2022年度

明治大学
ボランティアセンター活動報告書

Meiji University Volunteer Center

MEIJI UNIVERSITY

2022年度ボランティアセンター活動報告書発刊にあたって

西山 春文　ボランティアセンター長
（学務担当副学長兼学生部長、商学部教授）

新型コロナウイルス感染症による影響を受け始めて3年目。社会も大学もその大きな影響下にありましたが、ようやく活動制限も緩和され、長いトンネルの先に微かな光が見えてきました。

2022年度は対面形式の授業が再開し、キャンパスには活気が戻ってきました。また、課外活動の活動制限が緩和され、本センターでも、対面形式によるイベントを再開しました。とは言え、いまだ新型コロナウイルス感染症が終息したわけではありませんので、前年度に引き続き関係教職員ならびに学生の熱意と工夫のもと、感染症対策をしつつボランティア活動を続けてきました。この場をお借りして、関係者の皆様の御尽力に、心より御礼申し上げます。

私達にできるボランティア活動には、本学学生・教職員としての活動、社会の一員としての活動、そして人と人を結びつける活動があります。2022年度も各キャンパスの特性を生かした、多様な視点に基づく有意義な活動を展開しました。

駿河台ボランティアセンターでは、災害・防災をテーマとした講座を開催していますが、2022年度はそれらに加えて、文学部のゼミナールの学生を中心に、生理や性感染症及び避妊をテーマとした講演会を実施しました。

和泉ボランティアセンターでは、地域の高齢者との交流会、防災イベント、障害者施設や小学校のイベント等、途絶えかけてしまった地域との繋がりを結び直すことに注力し、対面の活動を実現しました。

生田ボランティアセンターでは、こども実験教室、中学校環境教室、小学校プログラミング教室など、地域の教育機関と連携した、こどもと共に学生も学んでいく貢献活動が充実していました。農業体験やホタル観察会など体験型プログラムも再開し、学生や卒業生が自らの体験を学生に伝え合うトークや対話のイベントも積極的に行いました。

中野ボランティアセンターでは、語学教室・対話カフェ・清掃活動などを開催しました。今年は新たにサイバー防犯ボランティアの活動を実施するなど、徐々に地域とのボランティア活動がコロナ禍以前に戻りつつあることを嬉しく感じます。

2022年度はゆるやかな制限と制約のなか、それぞれの活動に合わせ、考えられる限りの形式と方策を模索しつつ以上のような活動をしてきました。その途上には予想以上の困難もありましたが、同時に新たな発見もありました。これらの経験はこの先の活動に生かされていくはずです。

今後とも本学ボランティアセンターの活動に一層のご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ボランティアセンターの理念・目的

学生生活支援の理念は、高い社会性・共同参画意識を有する、自立した社会人としての基礎力を有する人材を育成するために、正課外教育の観点から、課外活動を含めて充実したキャンパスライフを学生が送れるように、学生生活全般の充実とそのためのキャンパス環境の整備を図ることにある。この理念の下で、明治大学ボランティアセンターは、正課外教育の観点から、学生に対するボランティア活動の支援を全学的に推進することにより、学生の社会性及び自主性を涵養し、もって社会に有用な人材を育成することを目的としている。

2022 年度ボランティアセンター運営委員会名簿

センター長	
商学部 教授	西山　春文

副センター長	
駿河台担当 文学部 教授	平山　満紀
和泉担当 情報コミュニケーション学部 専任講師	髙橋　華生子
生田担当 農学部 専任講師	伊藤　善一
中野担当 総合数理学部 准教授	渡邊　恵太

運営委員			
農学部 准教授 (ボランティアセンター担当副学生部長)	岡　通太郎	農学部 准教授	瀬戸　義哉
法学部 教授	阪井　和男	経営学部 教授	中澤　高志
商学部 教授	中林　真理子	国際日本学部 教授	萩原　健
商学部 准教授	川口　啓太	学生支援部長	小野寺　幸子
政治経済学部 専任講師	柴田　有祐	学生支援事務長	須藤　弘樹
文学部 教授	落合　弘樹	和泉学生支援事務長	東盛　達也
理工学部 准教授	川﨑　章司	生田学生支援事務長	大竹　貞昭
理工学部 准教授	加藤　恵輔	中野教育研究支援事務長	藤嶋　利生

駿河台キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
文学部 教授	平山　満紀
分科会委員	
商学部 教授	中林　真理子
政治経済学部 専任講師	柴田　有祐
文学部 教授	落合　弘樹
事務局	
学生支援事務長	須藤　弘樹
学生支援事務室	秋山　智美
駿河台ボランティアセンター	河野　理紗

和泉キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
情報コミュニケーション学部 専任講師	髙橋　華生子
分科会委員	
法学部 教授	阪井　和男
商学部 准教授	川口　啓太
経営学部 教授	中澤　高志
和泉キャンパス課長	庄井　正志
事務局	
和泉学生支援事務長	東盛　達也
和泉学生支援事務室	渡辺　正人
和泉ボランティアセンター	小林　和子
和泉ボランティアセンター	髙橋　真由美

生田キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
農学部 専任講師	伊藤　善一
分科会委員	
理工学部 准教授	川﨑　章司
理工学部 准教授	加藤　恵輔
農学部 准教授	瀬戸　義哉
生田キャンパス課	鈴木　幸司
分科会オブザーバー	
農学部 准教授 (ボランティアセンター担当副学生部長)	岡　通太郎
事務局	
生田学生支援事務長	大竹　貞昭
生田学生支援事務室	大須賀　克之
生田ボランティアセンター	藤掛　素子
生田ボランティアセンター	小林　優美子

中野キャンパスボランティア活動支援分科会

座長（副センター長）	
総合数理学部 准教授	渡邊　恵太
分科会委員	
国際日本学部 教授	萩原　健
事務局	
中野教育研究支援事務長	藤嶋　利生
中野教育研究支援事務室	首藤　雅一
中野教育研究支援事務室	稲川　悠介
中野教育研究支援事務室	三澤　祐子

目　次

●活動報告書発刊にあたって（ボランティアセンター長挨拶）　・・・ 1
●2022 年度 ボランティアセンター運営委員会・分科会名簿　・・・ 2
●目次　・・・ 3
●年間活動　・・・ 4-5
●活動報告
1　副センター長より　・・・ 6-7
2　センターが主催・コーディネートする活動　・・・ 8-63
3　学生の自主的な活動の支援　・・・ 64-86
●資料
ボランティアセンター来室者数・活動者数　・・・ 90

※表記について
明治大学では、「障害」の文字表記を「障がい」として統一しています。ただし、固有名称および感想においては、この限りではありません。

2022 年度 明治大学ボランティアセンター年間活動

	駿河台ボランティアセンター	和泉ボランティアセンター
4 月		• 先輩に何でも聞いてみよう P10 • ごみ拾い大作戦 P57 • 明大生ボランティア丸ごと紹介タイム P11
5 月	• 災害救援ボランティア講座 (5 月～ 6 月) P8 • 善福寺公園一斉清掃（駿河台ボランティアセンター直属学生ボランティア団体 Tree） P64	
6 月	• 留学生との交流会（Tree） P83	• 杉並区高齢者との「お茶会」（6 月～ 3 月）P33 • せたがや学生ボランティアネットワーク会議（6 月～ 3 月） P13 • 全商品リサイクル活動（サークル MIFO） P79
7 月	• 明大生の知らないシリーズ P30 • 防災ワークショップ P9 • 華を楽しむ会（Tree） P83 • 北神町子ども夏祭り（Tree） P84 • ボランティア活動支援分科会	• ボランティア活動支援分科会 • 竹とんぼ教室 P44
8 月	• 神保町子ども夏まつり（Tree） P84 • ビーチクリーン活動（Tree） P71	
9 月	• 援農ボランティア（Tree） P65 • MIW 祭り（Tree）（9 月～ 10 月） P66	
10 月	• ふれあい福祉まつり（Tree） P85 • ホームカミングデーへの協力（Tree） P43 • キッズハロウィンフェスティバル（Tree） P85 • 神保町ブックフェスティバル（Tree） P86 • 明大祭（Tree） P67	• スポーツフェスティバル P40 • 下高まつり P41 • まつばらデイキャンプ P42 • 秋のお楽しみ会 P35
11 月	• 災害救援ボランティア講座 P8 • 千代田区一斉清掃の日（Tree） P67 • 備蓄品運搬・配布訓練 P10 • 善福寺公園一斉清掃（Tree） P64	• スペシャルトーク「ボランティアはじめの一歩」 P12 • 障がい者・高齢者体験 P36 • ボランティアサークル新幹事長顔合わせ P12
12 月	• 明大生の知らないシリーズ P30 • 防災ワークショップ P9 • Tree 総会（Tree） P86	• クリスマス音楽会 P37 • せたがや学生ボランティアフォーラム P13 • 全商品リサイクル活動（サークル MIFO） P79 • Meal for Refugees（サークル MIFO） P80 • TABLE FOR TWO（サークルぱれっと） P81
1 月		• ボランティア活動支援分科会
2 月		
3 月	• ボランティア活動支援分科会	• 明大生による津軽三味線ライブ（サークル津軽三味線響） P43 • ボラ FES（ボランティア学生交流会） P15
通年	• エコキャップ回収（Tree） P68	• SNS を通じた情報発信 • 明大前駅周辺清掃活動（サークルぱれっと） P70 • エコキャップ回収（サークルぱれっと） P78
4キャンパス合同	• 3 大学連携オンライン講座（9 月）	

生田ボランティアセンター	中野ボランティアセンター	
• ボランティア相談会（4 月～ 6 月、10 月） P18 • 明治 2020@ikuta プログラム（4月～7月） P19 • 昼やすみ学生トーク（4 月～ 12 月） P16		4 月
• 脱炭素ワールドカフェ P58	• 清掃活動（5 月～ 6 月） P61 • 韓国語教室（5 月～ 7 月） P24 • 中国語教室（5 月～ 7 月） P27 • 献血活動の呼びかけ（サークル学生赤十字奉仕団・クローバー） P82	5 月
• 科学博士になろう1（6 月、3 月） P45 • ホタル観察会 P59 • 江の島・レクリエーション兼ビーチクリーン活動（サークル LINKs） P71 • 西なぎさ　東京里海エイド（サークル LINKs）（6 月～ 10 月） P72	• 対話カフェ ハナハナ（6 月～7月） P20	6 月
• ハロー！ Agriculture! P60 • 飯館村「までいな」農業復興支援プロジェクト（サークル SHIP）（7 月～ 12 月） P73 • ボランティア活動支援分科会		7 月
• かわさきサイエンスチャレンジ P52 • オープンキャンパス液体窒素実験 P54		8 月
• 小学校でのプログラミング授業のサポート P56	• ボランティア活動支援分科会	9 月
• 科学博士になろう2実験テーマ創り（10 月～ 12 月） P48 • 生明祭液体窒素実験 P54	• 清掃活動（10 月～ 12 月） P61 • サイバー防犯ボランティア P32 • 献血活動の呼びかけ（サークル学生赤十字奉仕団・クローバー） P82 • エコキャップ回収（サークルぱれっと） P78 • 対話カフェ ハナハナ（10 月～ 12 月） P20	10 月
• 昼やすみ卒業生トーク P17 • エネルギー環境ワークショップへの出展（学生有志） P74	• 韓国語教室（11 月～ 12 月） P24 • 中国語教室（11 月～ 12 月） P27	11 月
• 昼やすみ学生トーク P16		12 月
• 科学博士になろう3実験テーマ創り（1 月～ 3 月） P50 • 試験勉強会 P18 • ボランティア活動支援分科会	• サイバー防犯ボランティア P32 • エコキャップ回収ボックス運搬（サークルぱれっと） P69 • 対話カフェ ハナハナ（1 月～ 3 月） P20	1 月
	• ボランティア活動支援分科会	2 月
	• ブラインド卓球大会運営ボランティア P38	3 月
• 公式 SNS で発信 P14		通年
• ボランティアセンター運営委員会（年 2 回） • ボランティア情報の受付に関わるオンライン団体登録（通年） • 災害復興ボランティア活動に対する助成金の給付（通年）		4キャンパス合同

副センター長より

もっと多くの学生が、もっと多様な大学ボランティア活動に

平山 満紀　ボランティア副センター長
（駿河台担当、文学部教授）

コロナ禍での活動制限が緩和された 2022 年度、災害救援ボランティア講座では実習が再開し、Tree のメンバーが増えて多彩な活動に取り組むなど、対面活動が復活し幅を広げていったのは、とても嬉しい変化でした。また新たに、専門医を講師にお呼びして「生理」「避妊と性感染症」に関する講演をおこない、2 回とも 100 人を超えるオンライン参加者があり、セクシュアリティのテーマに関するニーズも明らかになりました。この講演への、教室での参加者は少なく、このような話題は対面よりもオンラインの方が、参加のハードルが下がることもわかりました。「防災ワークショップ」のオンライン開催が、遠隔地からの参加につながったことと合わせて、オンライン活動の利点が示されました。こうした経験を基に、いよいよ活動制限が撤廃される 2023 年度には、さまざまな対面活動を活発に展開することと、オンラインに利点のある活動は積極的にそうすることの、両者とも一層盛んになってほしいと願います。

大学ボランティア活動とは何か、改めて考えてみますと、それは、大学生の自発的な社会参加活動、社会貢献活動を幅広く指します。その活動内容は、大学生活上の問題解決、大学でのダイバーシティ＆インクルージョンのための活動、学生同士の交流、近隣地域から遠隔地までのさまざまなまちづくり活動、地域から地球レベルまでのさまざまな環境運動、福祉活動、災害・戦争・飢餓などの被害者への支援等々、非常に幅広くありえます。学生はボランティア活動を通して現実の困難を知り、社会を作っていく体験をし、自分の価値を感じます。Tree のメンバーに限らず、キャンパスの多くの学生が、多様なボランティア活動をおこなえることが理想でしょう。それを十分応援できるボランティアセンターそして運営委員会へと刷新していきますように、心より期待しています。

コーディネーションの重要性－ボランティアセンターの意義－

髙橋 華生子　ボランティア副センター長
（和泉担当、情報コミュニケーション学部専任講師）

新型コロナウイルスの感染拡大という未曽有の出来事を経て、社会のあり方が大きな変化を迎えています。それは、私たちがどのように他者と関わっていくのか、それを巡る問いであるように思われます。長引くコロナの影響で明らかになったのは、私たちの生活が他者のおかげで成り立っていることでしょう。たとえば、宅配で荷物を運んでくれる人がいなければ、コロナ初期の物流の混乱を乗り越えることはできなかったですし、ゴミを収集してくれる人がいなければ、衛生環境が悪化し、異なる疾病が発生してさらなる痛手を被っていたかもしれません。

コロナ禍で改めて確認できたこの事実は、まさにボランティア活動の理念につながっています。ボランティアとは、社会貢献という目的だけでなく、他者がしてくれていることに思いを馳せて、自分は何ができるのかを模索する試みであると考えています。しかし、それに気づき、何かを始めようとしても、方法が分からずに諦めてしまう人も少なくありません。数々の災害を経て得た教訓は、ボランティア活動への敷居を低くし、多くの人に機会を提供するコーディネーションの重要性です。

そして、そのコーディネーションの役割を担っているのが各キャンパスに設置されているボランティアセンター（VC）です。VC のスタッフは日々学生に接しながら、かれらの関心を引き出し、それを後押しする手立てを考えてくれています。その努力やアイデアを最大限活用できるよう、VC への支援体制が大学全体で強化されることを切に願っています。

体験型ボランティア活動の充実

伊藤 善一　ボランティア副センター長
（生田担当、農学部専任講師）

生田ボランティアセンター（生田 VC）は、農学部、理工学部のある生田キャンパスに設置されています。これまで、生田 VC では、理系の学生が学ぶキャンパスということもあり、「サイエンス」と「自然」を主なテーマとして、「災害復興」、「環境」、「子ども」、「地域」、「国際」、「福祉」などのテーマについても、多くの学生が主体的に参加し、幅広いボランティア活動を行ってきました。

2022 年度も、新型コロナウイルスの影響により、ボランティア活動が制限される状況が多くありました。そのような状況の中でも、「ボランティア活動をしたい」という学生たちからの熱い要望をうけて、状況をみながら感染対策には十分留意して、一部のボランティア活動は対面で実施することができました。

内容によっては、オンラインでも実施できるボランティアもありますが、生田 VC で実施している「こども科学教室」、「ハロー！ Agriculture！（黒川農場での農業体験）」、「生田緑地ホタル観察会」等は、やはり対面で参加して、実際に現地に赴き、「体験」することに価値があると考えます。今年度は、新しいプログラムとして「中学校環境教室、エネルギー・環境ワークショップ」を実施することも出来ました。今後、従来どおりの対面で実施するボランティア活動が増えることと思います。
今後も生田 VC の活動をさらに発展させていきたいと思います。皆様のご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

100 年に 1 度の中野駅周辺の再開発とともに

渡邊 恵太　ボランティア副センター長
（中野担当、総合数理学部准教授）

「国際化」「先端研究」「社会連携」をコンセプトとする中野キャンパス（国際日本学部、総合数理学部）は、キリングループ本社をはじめとする大手企業や中野区の行政機関、そして帝京平成大学と早稲田大学などの教育機関があり、国際色豊かなだけでなく、隣接する四季の森公園の一部と言えるほど地域と一体化した場所です。住民や企業組織人ら様々な人々が集い、交流する土地柄があります。隣接の公園、中野キャンパス開設から始まった中野駅周辺の再開発は 100 年に 1 度と言われる規模です。2023 年の夏には、中野のランドマークである中野サンプラザ閉館と解体がはじまり、さらに大学目の前の囲町エリアも大きな商業施設とマンションの開発が進んでいます。区役所も新庁舎も四季の森公園に隣接し建設が進んでおり、より国際性や、先端性、社会連携が期待されるようなエリアとなろうとしています。

中野キャンパスでは、新型コロナウイルス感染症の蔓延以前、キャンパスの 1 階エントランスや学生食堂は、地域住民にも親しまれて参りました。そうした地域性や土地柄を活用し、防災ワークショップなどの取り組みや、学部の特性を活かして実施している中国語、韓国語の語学教室（講師は学生ボランティア）は好評を得ています。対面での活動が再開し地域と連携した取り組みなど、創意工夫により新展開を迎えています。

中野ボランティアセンターの活動は、日本社会において現在まさに求められているものと言えます。今後とも、一層活動の拡充を図り、学生の成長に寄与するとともに社会からの要請に応えていく所存です。

センターが主催・コーディネートする活動

防災・復興

災害救援ボランティア講座 駿河台

千代田区大規模災害時における協力体制に関する基本協定に基づき、2005 年度から実施している千代田区助成事業です。千代田区と大学の災害時の協力体制を確実なものとしていくための学生ボランティアの養成を目的として実施しています。全 3 日間のカリキュラム修了者には、「セーフティリーダー認定証」および「上級救命技能認定証」が交付されます。

日　時	春学期：2022 年 5 月 28 日(土)・6 月 4 日・11 日(土) 9：00 ～ 17：00 秋学期：2022 年 11 月 5 日(土)・12 日(土)・19 日(土) 9：00 ～ 17：00
場　所	駿河台キャンパスリバティタワー内教室およびスポーツルーム、本所防災館
内　容	消防実務・ボランティア有識者による講義・演習、本所防災館での災害模擬体験、上級救命技能講習などの実技を 3 日間通して学ぶ。
協　力	災害救援ボランティア推進委員会
後　援	総務省消防庁、NHK
受講者数	春学期：18 名　秋学期：21 名
累計受講者数	839 名(2005 ～ 2022 年度)

▲救命講習の様子

▲グループワークの様子

▲防災館での様子

▲講義の様子

▲地震体験の様子

防災ワークショップ 駿河台

2014 年度から駿河台キャンパスで実施している企画で、学生や教職員の防災意識を高めることを目的に年 1 ～ 2 回開催しています。2022 年度は 2021 年度に引き続き、オンラインで開催しました。

3 大学連携協定を結んでいる法政大学・関西大学の学生、教職員にも参加していただき様々な視点で防災について考えました。

日　時　春学期　2022 年 7 月 14 日(木) 17：10 ～ 18：50
秋学期　2022 年 12 月 8 日(木) 17：10 ～ 18：50

方　法　Zoom

目　的
・学生、教職員に対する防災意識の向上
・災害時の学生ボランティア養成のためのきっかけづくり

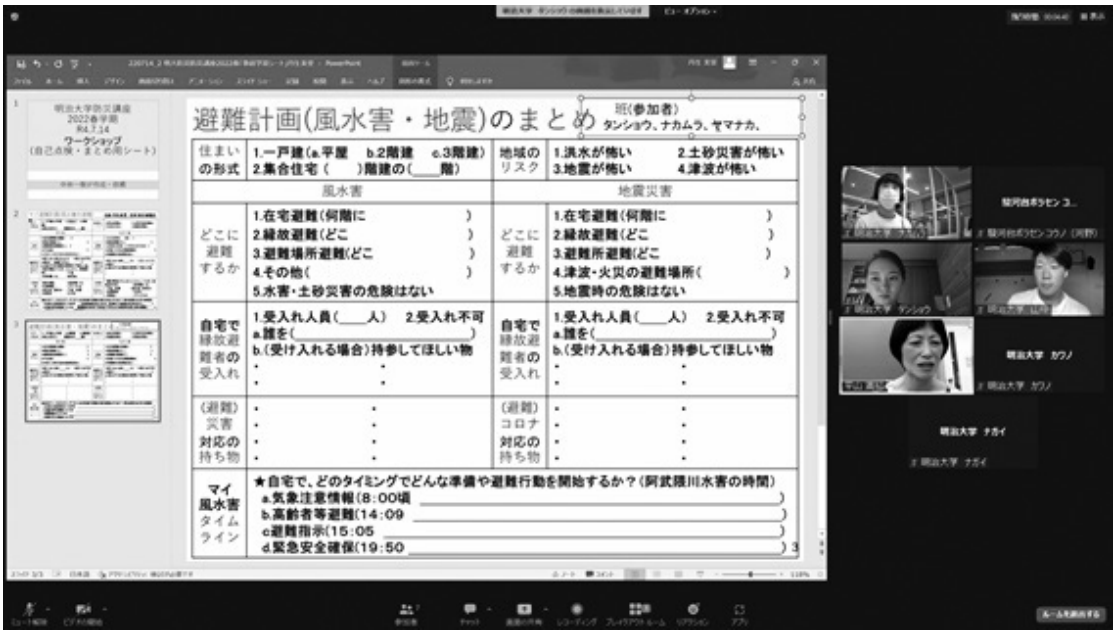
内　容
・講義「激化する風水害！どう命を守る？」※ 7 月 14 日
・講義「地震に備える“マイ対策”をアップデートする」※ 12 月 8 日

参　加　春学期　明大生 32 名 / 明大教職員 1 名 / 他大生 2 名 / 他大職員 2 名
秋学期　明大生 10 名 / 明大教職員 2 名

講　師　中林 一樹 氏(明治大学 元特任教授、明治大学 復興・危機管理研究所 客員研究員、東京都立大学 名誉教授)

参加者の声

・明治大学だけでなく関西大学の方ともお話することができ、自分が住んでいる地域とは全く異なる場所の状況を知ることができて、とても有意義な時間でした。災害時の避難について、家族と一度しっかり話し合おうと思いました。
・ブレイクアウトルームごとに討論の進み具合に差は見られたものの、初対面の学生同士が協力してまとめシート作成に取り組んでおられて、学生にとって非常に有意義な講座になったのでないかと思います。東日本大震災の話をして討論をしているグループもあり、見学しながら非常に学ばせていただきました。ありがとうございました。
・実際に“マイ対策”を議論することで、自分ごととして災害対策を考えることができましたし、他の方の意見を聞くことによって、自分にはなかった視点も明らかになりました。これは実際に地震が起きた際、自分の対策だけではなく、もし自分がボランティアとして派遣された時の準備すべき物事として参考になりました。これからも防災に敏感になって、周りの人にも呼びかけていきたいと思います。



▲春学期防災ワークショップの様子

備蓄品運搬・配布訓練 駿河台

明治大学総務課主催による駿河台キャンパス総合防災訓練が行われ、災害救援班に登録している学生や、学生団体 Tree の学生が、備蓄品運搬・配布訓練に協力しました。当日は段ボールを開け、備蓄品（クラッカー、アルファ化米ドライカレー、2L ミネラルウォーター）及び手指消毒ジェルをテーブルに並べ、空の段ボールを崩す作業に取り組みました。

日　時　2022 年 11 月 24 日(木) 12：20 ～ 13：30

場　所　リバティタワー 1 階紫紺ホール

内　容　訓練内容及びスケジュール
12：20　集合、ビブス・ヘルメット着用、業務説明
12：25　配置
12：30　2 限終了、配付開始
13：30　3 限開始、訓練終了、解散。

▲総合防災訓練の様子①

▲総合防災訓練の様子②

参　加　学生 5 名(4 年生 1 名、3 年生 3 名、2 年生 1 名)、職員 2 名

目　的　今後発生が予想される災害に備え、防火・防災に対する意識及び技術の向上を図る

センターの役割　連絡・調整、ボランティア募集案内、当日受付・説明

情報提供・交流

先輩に何でも聞いてみよう！ 和泉

新入生に向けて、大学生活という新しい環境における悩みや不安を、先輩たちの経験談を直接聞くことで、大学内外の情報やノウハウを得て、自分に合った選択をし、大学生活をより充実したものにしてもらいたいと企画しました。また、新入生が必要としている情報を確実に渡したいと考え、事前に相談したい内容をアンケートで知らせてもらい実施しました。熱心に相談する新入生に先輩たちは、自分たちが新入生のときに欲しかった情報など、ただ自分の経験を押し付けるのではなく学生の個性や状況に合わせたアドバイスをすることを心掛けていました。相談をした側の学生も今後、先輩になった時に後輩たちに同じように接することができることと思います。ボランティアセンターでは、今後も学生同士の互助活動の手助けをしていきたいと考えています。

▲ポスター

日　時　① 2022 年 4 月 11 日(月) 12：35 ～ 13：20
② 2022 年 4 月 14 日(木) 12：35 ～ 13：20

場　所　和泉キャンパス内教室

参　加　①相談学生 4 名、学生アドバイザー 3 名
②相談学生 1 名、学生アドバイザー 3 名

明大生ボランティア丸ごと紹介タイム 和泉

４月には、新生活をきっかけに「ボランティアを始めてみたい」「どんなボランティアがあるのだろう」そんな思いを抱く学生がたくさんいます。そこで、ボランティアに興味のある新入生を主な対象として、活動団体や形態を問わず、明大生の行っているボランティア活動や団体を一度に紹介する合同説明会を 2022 年度も開催しました。お昼休みの限られた時間ではあるものの、両日とも満員で立ち見も出て、熱心に団体の紹介に耳を傾けていました。説明会後には、興味を持った団体に詳しく話を聞きに行ったり、連絡先を交換したり、早速新たな一歩を踏み出す学生の姿も見られました。

今後も学生の活動につながる機会を積極的に作っていきたいと思います。

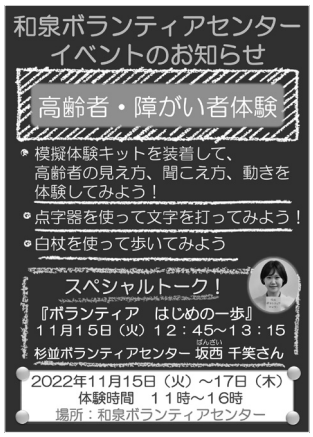
▲チラシ

日　時	① 2022 年 4 月 20 日(水) 12：35 ～ 13：20 ② 2022 年 4 月 21 日(木) 12：35 ～ 13：20
場　所	和泉キャンパス内教室
参　加	① 70 名(うち発表者 8 名) ② 78 名(うち発表者 7 名)

▲熱心に耳を傾ける学生達

スペシャルトーク「ボランティアはじめの一歩」 和泉

ボランティアを始めるきっかけになればと、「ボランティアはじめの一歩」というテーマで、ボランティアに参加する際の心構えや注意点等を、講師の杉並ボランティアセンター坂西氏に体験を交えながら、わかりやすくお話いただきました。学生からの質問にも答えていただき、初めてボランティア活動を考えている学生や、興味を持っている学生にとって、ボランティアを身近なものと感じ一歩を踏み出すきっかけとして大変貴重な機会になりました。



▲ポスター

日　時 2022 年 11 月 15 日(火) 昼休み
場　所 和泉ボランティアセンター
参　加 5 名
講　師 杉並ボランティアセンター　坂西 千笑 氏

▲トークイベントの様子

ボランティアサークル新幹事長顔合わせ 和泉

学生のつながりの場所でもあるボランティアセンターで、サークル同士の横のつながりを結びなおし、交流を深めることを目的に対面実施しました。この場所で意見交換し交流をすることが、サークル活動の活性化や、サークルを超えた活動につながることを期待し、定期的に会合を行い支援していきます。

▲打ち合わせの様子

日　時 2022 年 11 月 21 日(月) 12：40 ～ 13：30
場　所 和泉ボランティアセンター、Zoom
内　容 自己紹介
ボランティアサークル合同で開催するイベント、ボランティアサークルの冊子作りなどのための話し合い
連絡先交換、名簿作り
参　加 11 名(公認ボランティアサークルの新幹事長・支部長)、職員 2 名

せたがや学生ボランティアネットワーク会議・せたがや学生ボランティアフォーラム 和泉

せたがや学生ボランティアネットワーク会議」は世田谷区が大学との連携・協力によるまちづくりの推進を目的に、1年を通して開催されています。その取り組みとして大学生によるボランティア活動への区民の理解と関心を深めるために活動事例の発表、パネルディスカッションを行う「せたがや学生ボランティアフォーラム」があります。ともに本学の公認ボランティアサークルと団体の代表らが参加しました。

▲パネルディスカッションの様子

日　時
① 2022年6月～2023年3月 全6回
② 2022年12月17日(土) 14：00～16：30

場　所
① Zoom
②成城ホール

内　容
大学、区、区内のボランティア活動団体等との間で、ボランティア活動に関するネットワークを構築し、定期的な会議を通じて、地域や区におけるボランティア情報を提供し、大学生による地域活動を促進する。また、大学生が区・地域とつながり、活躍できる機会を増やし、新たなまちづくりを推進する。

参　加
公認ボランティアサークル「ぱれっと」
公認ボランティアサークル「きずな international」
公認ボランティアサークル「心身障害者福祉会しいの実」
チャリティーサンタ世田谷明治大学支部

参加学生の声

文学部3年　坂本 璃空

しいの実は、今年度（2022年度）から「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」に参加させて頂きました。当時幹事長だった私は、コロナ禍を経てサークル内外のつながりや日々の活動の活発さがなかなか回復しないことに不安を抱いていました。正直、自分一人の力やアイデアではどうしようもないと、なかば諦めかけていました。そんな時、明治大学のボランティアセンターの方から、「他のボランティアサークルや他大学の人達とも交流できる機会がある」と声をかけて頂きました。「たしかに、しいの実の外側の人達とつながれば、何か新しいアイデアをもらえるかもしれない」と思い、世田谷区の櫻井さんのご協力を経て参加させて頂きました。

月一回の会議に参加させて頂いて感じたのは、明治大学の他のボランティアサークルや、他大学のサークルも、私と同じような悩みを抱えているんだなということでした。活動を呼びかけてもなかなか人が集まらない、新歓をやっても新入生が入ってきてくれない、このまま引き継ぎがきちんとできるのか、など。皆同じことに悩みながらも、パーティーを企画したり連絡手段を工夫したりしながら、できることを模索していました。そんな皆さんの姿勢を見て、私も勇気をもらいました。

また、年末に会議の集大成として開催した「せたがや学生ボランティアフォーラム」では、普段オンラインでしか会ったことのなかった皆さんと実際に対面し、協力し合いながら自分達の日々の取り組みを発信することができました。

自分だけで抱え込むのではなく、少し外側に目を向けて、他の人に頼ったりアイデアをもらったりできる、そんな居場所がネットワーク会議なのではないかと思います。

政治経済学部 2 年　内山 結葉

二ヶ月に一回開催される「せたがや学生ボランティアネットワーク会議」は、世田谷区内にある大学のボランティアサークルの学生が Zoom 上でボランティア活動について話し合う場です。私はこの会議に参加して良かったと思うことが 2 つあります。

一つ目は、サークル運営に関して他の学生に悩みを相談できたことです。普段のサークル活動について話し合うと、どのサークルもコロナ禍でボランティアを行うこと自体が難しく、またサークルメンバーが集まらないなどの共通した課題を抱えていることが分かりました。その際、自分達のサークルで工夫していることを共有したり、解決策がないか一緒に考えたりすることで悩みを解消し、会議で学んだことを自分達の活動につなげることができました。

二つ目は、他の大学の学生との繋がりを持てたことです。会議には明治大学の学生だけではなく、昭和女子大学や駒澤大学などの世田谷区内の他の大学の学生も出席しています。昨年 12 月には会議に出席している学生が一堂に会し、ボランティア活動について発表する「せたがや学生ボランティアフォーラム」が開催されました。そこでは普段 Zoom 上で話している他の学生と対面で会い、協力してフォーラムの運営を行いました。大学生活の中で他の大学の学生と出会い、1 つの活動を行う機会はほとんどないので、会議やフォーラムを通してできた学生との繋がりを今後も大切にしていきたいです。

公式 SNS で発信 生田

2022 年度も公式 Instagram を活用して、生田のボランティアと社会貢献の“今”について、より一層積極的な発信に努めました。

日　時　2022 年 4 月 1 日～ 2023 年 3 月 31 日

内　容　公式 Instagram をとおして生田のボランティアと社会貢献の“今”を発信する

(1) 開室カレンダーの公開
感染状況と大学活動指針に応じて変化するボランティアセンターの開室情報を、カレンダー形式でこまめに更新した

(2) 学生の社会貢献活動の紹介
活動のようすをカラー写真で具体的に伝えながら、明大生による読み応えある骨太の体験談を発信した。

▲公式 Instagram

(3) センター主催イベントの告知
イベントポスターを掲載し、主催イベントを広報した

(4) 投稿数のコントロール
読者にじっくり読んでほしいため、投稿は 1 日 1 回に控え、少しずつ投稿した

発　信　62 回　体験談を寄稿した学生 27 名
（開室カレンダー公開 19、学生の社会貢献活動の紹介 28、イベント告知その他 15）

ボラ FES（ボランティア学生交流会）和泉

ボラ FES は、ボランティアサークルやボランティア活動をする学生が 1 年の活動を総括すると共に、学生同士の交流や情報交換をする事により、横のつながりを作ることを目的に実施しています。

2021 年度は報告会だけとなりましたが、2022 年度は企画・運営を担当した学生達が事前に打合せを重ね、3 年ぶりにコロナ禍前の開催時のように、2 部構成にして作り上げました。

様々な形でボランティア活動している学生達が、今後もキャンパスや団体の枠を超えて交流するための機会のひとつとして、多くの学生に広げていきたいと思っています。

日　時	2023 年 3 月 24 日(金) 13：00 ～ 17：30
場　所	和泉キャンパス体育館メインホール、図書館ホール
内　容	第一部　ボッチャ寄贈式 + 講習会 第二部　活動報告 + クイズ
参　加	学生 25 名、外部講師 4 名、教職員 5 名
協　力	株式会社 CAC Holdings

▲ボッチャの様子

▲活動報告の様子

▲桜の下で集合写真

▲ボラ FES 司会の様子

農学部 2 年　大谷 凌央

今回のボラ FES は去年に引き続き対面開催となり、コロナウィルスによる制限が緩和されて、前半がボッチャ体験会、後半が活動報告会という二部構成で行われました。FES という名前に相応しく、当日は各サークル多くの学生が参加し、終始楽しい時間を過ごさせて頂きました。全 9 団体が一堂に会する機会でしたので、自分だけでなく参加した他の学生にとっても大変有意義な時間だったのではないでしょうか。

前半のボッチャ体験会に関してですが、こちらはゲストをお呼びし、指導を受けながら行いました。チーム毎に分かれ、初対面で緊張も窺えましたが、学生間で積極的にコミュニケーションを取り、笑顔で楽しむ様子が見られました。自分もボッチャをやる中で学年問わず様々な学生と交流し、ボランティアに対する姿勢や新学期に向けた展望などを話し合い、とても良い刺激となりました。

後半は活動報告会に移り、各サークルで行った活動を発表しました。他サークルの活動に関してはなかなか知る機会がなく、ぼんやりとしたイメージが先行していましたが、この会を通して特徴や多くの共通点、活動内容を知る事ができ大変勉強になりました。

全体を振り返って、当日は和やかかつ賑やかな雰囲気で終えることが出来ました。今後もコロナウィルスの影響を鑑みての開催にはなりますが、サークル同士が交流が出来る貴重な機会「ボラ FES」が今後も続いていくことを切に願っております。

昼やすみ学生トーーク！卒業生トーーク！ 生田

大学には、いろんなことを学び、活動し、考えたり、試している学生がたくさんいます。そんな学生たちによるプレゼンや交流のイベントを、2016 年度から、授業期間中の昼休みに開催しています。

2022 年度は、2021 年度につづき、定員をもうけて対面で、あるいは、定員をもうけた対面とオンラインとのハイフレックスで「学生トーーク」を開催しました。対面では、人数制限や飲食禁止等、感染対策を講じて開催しました。オンラインリスナーは事前申し込み制で、申し込んで実際に聞きに来るのは約半数です。

また、学生だけでなく「卒業生トーーク」も開催しました。卒業生の場合は発表者が学外に居り、完全オンラインでの開催です。卒業生トーークは 2020 年度以来の開催で、センターが直接知っている、直接関わりがある卒業生に限っています。近年リモートワークやフレックス等で学生の昼休み時間にアクセスできる卒業生が増えており、今後の可能性を感じています。

このイベントはリスナーからの質問が非常に活発に出ることが特徴です。また、トーク後、参加者が感じたこと、考えたこと、質問などを付箋に書いて、発表者にフィードバックすることも恒例になっています。

日　時　2022 年 4 月 19 日(火)～ 2022 年 12 月 20 日(火)
授業期間の昼休み 12：50 ～ 13：20　計 16 回

場　所　トークの場所：生田ボランティアセンター　または　Zoom

方　法　対面、対面と Zoom のハイフレックス、Zoom

参　加　247 名(担当を含む)

日時	タイトル	担当*1	方法	参加*2
4 月 19 日(火)	公認サークル SHIP 紹介 ～ SHIP は今年こんなことやります　サークル悩んでいる人もどうぞ	SHIP 3 年、2 年	対面のみ	20 (20)
4 月 20 日(水)	明治 2020@ikuta ～少人数の団体で、共にボランティアをする仲間に出会いませんか？	理工学部 2 年	対面のみ	13 (13)
4 月 21 日(木)	しんちーむについて詳しく知ろう！ ～たくさんあるボランティアサークル！しんちーむの特徴って？～	しんちーむ 中村、村石	対面＋Zoom	4 (2)
4 月 22 日(金)	LINKs をもっと知ろう！ ～ LINKs 活動内容発表会	農学部 3 年　太田 采奈、 農学部 2 年　大谷 凌央	対面＋Zoom	24 (21)
4 月 25 日(月)	新しいことを始めたいけど何をしようか悩んでいるアナタへ ～ボランティア団体のプログラムに参加して考えたこと	理工学部 3 年	対面＋Zoom	14 (6)
4 月 26 日(火)	無料塾とは？ ～子どもたちのために無料学習塾を立ち上げてみて	農学部 1 年　菊水 優太、 理工学部 2 年　中田 樹克	対面＋Zoom	16 (6)
4 月 27 日(水)	就活って何すればいいの？ ～対面、Web 面接 両方経験した就活生が語ります	農学部 4 年　駒井 一斗 (LINKs 前幹事長)	対面のみ	12 (12)
4 月 28 日(木)	教員採用への道 ～教職を目指すみなさんへ	理工学研究科 M2 川合 雄登	対面＋Zoom	17 (4)
5 月 9 日(月)	サンタさんになって考えてみたこと ～人生が変わったのは君か、ボクか	情報コミュニケーション学部 2 年　深谷 元喜	対面＋Zoom	12 (3)
5 月 10 日(火)	将来やりたいことの見つけ方 ～留学・コミュニティ運営・インターンを経験して	農学部 4 年　笠原 大靖	対面＋Zoom	19 (4)

5 月 11 日（水）	生田のお店、知っていますか ～イクタベル活動紹介 & オススメのお店教えます	理工学研究科 修士 2 年	対面＋ Zoom	12 （12）
5 月 12 日（木）	3 年生、今すぐ始める就職活動 ～ IT 業界解体新書	理工学部 4 年 池田 新太郎	対面＋ Zoom	15 （2）
5 月 13 日（金）	外資 IT 内定者が語る　ころんでも、おわりよければ、すべてよし	理工学研究科 うーさん	対面＋ Zoom	27 （4）
11 月 10 日（木）	卒業生トーク 大自然の中に住まい、働くってどんなこと!? ～宮城県の人口約 900 人の地域に 住む前と住んだ後	2019 年理工学部卒 海山 裕太	Zoom のみ	11 （0）
12 月 15 日（木）	行動力を身につけるには？ ～大学生のうちに、いかにして世界を広げるか	農学部 4 年　笠原 大靖	対面＋ Zoom	23 （4）
12 月 20 日（火）	自己探求 makes me happier	理工学部 4 年　林 勇輝	対面＋ Zoom	8 （6）
		計		247 （119）

＊ 1　学生の意思を尊重し開催時の登壇者名のまま記載
＊ 2　カッコ内は内数の対面参加の人数

▲プロジェクタでスライドを投影しながらトーク

▲卒業生トーク

▲ Zoom ではスライドを画面共有で

ボランティア相談会 生田

センターの存在を学生に知ってもらうきっかけ作りとして、学期はじめや長期休み前に日にちを決めて、ボランティア情報を多数紹介し、計画を立ててもらう相談会をひらきました。都合の良い時間にきてもらうようにしたところ、いろいろな時間帯に学生の来室がありました。

センターは常時開室して学生のボランティアの相談にのっています。しかし、いつも開いていると逆に、開いているという情報を学生に伝えるすべが意外と無いものです。そこで、センターがあってボランティア相談にのっていることを伝えるために、期間をくぎり相談会と名付け、具体的なボランティア例とともに学内ネットで周知すると、はじめて来室する学生、なんとなくボランティアをしてみたいが、どんなボランティアがあるのかわからないので知りたい、という学生が、とくに４月の相談会に多く来室しました。一方で、同じような広報をしても５月、６月、10 月となるにつれ来室は減っていく傾向にあり、学生のボランティアに対する関心は、毎年４月にもっとも高いことがうかがわれています。

日　時
① 2022 年 4 月 11 日(月)～ 22 日(金)
② 2022 年 5 月 16 日(月)～ 20 日(金)
※実験の紹介展示と体験
③ 2022 年 6 月 1 日(水)～ 10 日(金)
④ 2022 年 10 月 25 日(火)～ 28 日(金)

場　所
①③④生田ボランティアセンター
②センター隣ギャラリー

内　容
学生のニーズを聴き、ボランティア情報を紹介する。一部の日程では科学教室プログラムの実験の紹介展示と体験。

参　加
100 名(うち 実験展示と体験 16 名)

試験勉強会 生田

試験数が多く定期試験の負担が大きい理系キャンパスにあることから、出入り自由、おしゃべり自由、飲食自由の試験勉強ができる自習スペースとして、実験的に１月の生田ボランティアセンターを開放しました。

今までも自習は可能で、コロナ前は実際に自習する学生も多くいましたが、積極的に学内ネットで周知したのは今回が初めてです。

その意図は、コロナが収まりつつあり、課外活動が解禁になりつつあるにもかかわらず、以前のように学生が課外時間にキャンパスに滞留したりご飯を食べながら談笑したりする機会が回復していないことが挙げられます。また、コロナ前から、発語しながら勉強したほうが学びが深まる一定数の学生から快適な自習場所を望む声があったことが挙げられます。

周知に効果があり、学生が来室することを期待しましたが、来室は少ないままでした。コロナを経て、学生は試験期間もキャンパスに滞留しなくなったようです。友人と勉強を教えあう姿もあまり見かけず、キャンパスでは自習しなくなったのかもしれません。今後、図書館の建て替え等により、キャンパス内で学び合う、自習する姿が徐々に戻ってくるのではないかと期待しています。

日　時
2023 年 1 月 10 日(火)～ 31 日(火)

場　所
生田ボランティアセンター

参　加
15 名

明治 2020@ikuta プログラム 生田

このプログラムは 2019 年度に「オリンピック東京 2020 大会に何らかの形でかかわっている人たちが、便利になったり喜んだり助かったり幸福を感じるサービス」を学生が立案し実行をめざすことを目的に発足しました。

2021 年度は「コロナ禍で困っている人」をテーマに、サービスを考案する活動を行いました。

2022 年度は生田地域や全国各地のボランティアを互いに紹介し合うグループとして再スタートを切りました。曜日を決めて昼休みに集まり、それぞれが活動したボランティアについて情報交換したり、一緒にボランティアに参加したりしました。

はじめは多くのメンバーがセンターに集まっていましたが、感染状況がおさまり、対面での大学生活が増えていったこと、学年があがり研究など他の活動が忙しくなったことなどから、昼休みに集まる人数は徐々に減っていきました。

時折キャンパス内で出会ったときに話をするなどのゆるい関係のグループとなり、コロナ禍での役割を終えたとみなし、2022 年度でこのプログラムを一旦終了することとしました。

日　時	ミーティング：2022 年 4 月 13 日(水)～7 月 20 日(水) 昼休み　18 回
場　所	生田ボランティアセンター
内　容	ボランティア活動の共有や紹介、地域のボランティア活動への参加
参　加	115 名

▲昼休みミーティング

▲登戸・たまがわマルシェでボランティア

対　話

対話カフェ　ハナハナ 中野 生田

対話カフェは、様々な人の考えと自分の考えを照らし合わせ思考を深めてもらい、対話をしてもらう場として開催をしています。

アート鑑賞の回では参加者みんなで鑑賞したい作品を選び、それぞれの作品をじっくり鑑賞しました。

参加者それぞれの感じたことを聞きながら、時間をかけて鑑賞することで、自分以外の学生がどんな視点で作品を見ているのかを知ったり共有でき、たくさんの気づきを発見できる充実した時間となりました。

哲学対話・当事者研究の回では、自己の内面に向けて考えを深めるテーマを取り上げて開催しました。

参加学生からは「自分以外の人が体験したことを知ることができた」「対面で話を聞くことで思考が深まった」「話さないと気づけないことがあるから対話って面白い」などの声があがりました。

日　時　2022年6月16日(木)～7月14日(木)　春学期
2022年10月24日(月)～12月21日(水)秋学期
2023年1月31日(火)～3月29日(水)　春季休業

場　所　和泉キャンパス・生田キャンパス・中野キャンパス・Zoom

内　容　哲学対話・当事者研究・アート鑑賞対話　による対話カフェ
哲学対話…参加者が(輪になって)問いを出し合い、一緒に考えを深めていく対話手法。専門や立場に関わらず、誰もが対等に話し合える場所作りを目指す
当事者研究…自分が自分の研究者となって、仲間と語り合いながら、困りごとへ理解を深めたり、新たな自分を発見し定義しなおしていく試み
アート鑑賞対話…絵画、写真、立体などのアート作品を介在に、感じたこと、思ったこと、考えたことを伝えあう

参　加　135名(※ファシリテーターを含む)

〈春学期〉

日時	テーマ	場所・方法	対話の手法	ファシリテーター	参加
2022年6月16日(木) 15:20～16:20	働くってなに	中野キャンパス	哲学対話	学生	学生3名 職員1名
2022年6月23日(木) 15:20～16:20	当事者研究をやってみよう	中野キャンパス	当事者研究	学生	職員1名
2022年6月30日(木) 15:20～16:20	アートCafe　アートみながら話しませんか	中野キャンパス Zoom	鑑賞型対話	職員	学生4名 職員1名
2022年7月7日(木) 15:20～16:20	七夕企画 星に願いを☆あなたはなぜ「願い」ますか？ ～小さい頃の自分と今の自分に問いかけてみましょう～	Zoom	哲学対話	学生	学生1名 職員2名
2022年7月14日(木) 15:20～16:20	コミュ症について研究しよう①	和泉キャンパス	当事者研究	学生	学生2名 職員1名

〈秋学期〉

日時	テーマ	場所	対話の手法	ファシリテーター	参加
2022年10月24日(月) 13:00～14:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	和泉キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生5名 職員2名

2022年11月7日(月) 13:00～14:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	和泉キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生3名 職員2名
2022年11月9日(水) 12:30～13:30	「最近調子が悪いこと」を当事者研究してみよう	中野キャンパス	当事者研究	学生	学生3名 職員1名
2022年11月18日(金) 12:40～13:20	アートCafe　アートみながら話しませんか	生田キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生6名 職員1名
2022年11月24日(木) 15:30～16:30	アイデンティティについて対話しよう	中野キャンパス	哲学対話	学生	学生2名 職員1名
2022年11月28日(月) 13:00～14:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	和泉キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生4名
2022年11月28日(月) 15:30～16:30	コミュ症について研究しよう②	中野キャンパス	当事者研究	学生	学生6名 職員1名
2022年12月9日(金) 12:40～13:20	アートCafe　アートみながら話しませんか	生田キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生5名 職員1名
2022年12月20(火) 15:30～16:30	″さみしさ″の当事者研究～人肌恋しいってどういうこと？～	中野キャンパス	当事者研究	学生	学生4名 職員2名
2022年12月21(水) 13:00～14:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	和泉キャンパス	鑑賞型対話	職員	学生4名 職員1名

〈春休み〉

日時	テーマ	場所	対話の手法	ファシリテーター	参加
2023年1月31日(火) 10:30～11:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	Zoom	鑑賞型対話	職員	学生2名 職員2名
2023年2月14日(火) 10:30～11:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	Zoom	鑑賞型対話	職員	学生3名 職員1名
2023年2月15日(水) 10:30～11:30	〈コミュニケーションについて考える〉自分のコミュ症のタイプは何か	Zoom	当事者研究	学生	学生4名 職員2名
2023年2月22日(水) 10:30～11:30	〈コミュニケーションについて考える〉自分のできなさに名前をつける	Zoom	当事者研究	学生	学生2名 職員2名
2023年2月28日(火) 10:30～11:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	Zoom	鑑賞型対話	職員	学生3名
2023年3月1日(水) 10:30～11:30	〈コミュニケーションについて考える〉通じてるってなんだろう？	Zoom	哲学対話	学生	学生1名 職員2名
2023年3月14日(火) 10:30～11:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	Zoom	鑑賞型対話	職員	学生3名 職員1名
2023年3月15日(水) 10:30～11:30	〈ことばについて考える〉何かが言えない状況を整理してみる	Zoom	当事者研究	学生	学生3名 職員1名
2023年3月22日(水) 10:30～11:30	〈ことばについて考える〉自分の伝え方を見つける	Zoom	当事者研究	学生	学生1名 職員1名
2023年3月28日(火) 10:30～11:30	アートCafe　アートみながら話しませんか	Zoom	鑑賞型対話	職員	学生2名 職員1名
2023年3月29日(水) 10:30～11:30	〈ことばについて考える〉「じぶんの言葉」ってなんだろう？	Zoom	哲学対話	学生	学生1名 職員1名

総合数理学部 3 年
参加した対話手法（アート鑑賞・当事者研究）

参加する前は聞くことがメインになってしまうのではないかと思っていました。しかし、実際に参加をしてみて、参加者のほとんどが同じようなことで悩んでいたり自分では思い浮かばなかった意見が出てきたりと視界が広がったように感じました。

特にアート対話は作品を見ることが好きなこともあり、作品を見ながら対話することで新しいことに気がついたり普段の何倍も細部まで確認したりすることができ楽しかったです。

こうした方がいいなと感じた点は、全ての対話で人数が少なかったこともあり一人一回発言が基本となってしまっていたときがあったためパスのような感じで聞くことだけに集中できる環境が欲しいなと感じました。

ペンネーム　レモン
参加した対話手法（アート鑑賞・哲学対話・当事者研究）

今回参加したのは、近年流行している当事者研究やオープンダイアローグを体験したいと考えたからです。

対話カフェの特徴は「先生」がいないところです。例えばアート鑑賞をする場合、美術の専門家が講義するのではなく、1 枚の絵をめぐって参加者全員で話します。お互いがフラットな立場で語り合うので、自分の率直な感想をシェアしたり、他の人の視点や考えを知ることができました。

当事者研究では「コミュニケーションと言葉」をテーマに参加者と話し合いました。

他者とのコミュニケーションは日常生活を送る上で欠かせないものですが、ちょっとした言葉のすれ違いからモヤモヤした想いを抱くことも多いです。対話カフェでは自分の体験を共有したり、他の人も似たような経験をしていることを知ることで、これまでの悩みが少し解消された気がします。

今回のイベントでは相手の言葉にじっくり耳を傾け、それをもとに自らの意見を述べることで、参加者全員が協力して問いに向き合うことができました。また、違う学年や学部の人と対話して意見を交換するのは非常に楽しかったです。大学卒業後もこの経験を活かして地域の哲学カフェや哲学対話に参加したいと考えています。

先端数理科学研究科 M1　大塚 拓海

・対話の方法について

春休みは春学期と秋学期に実施してきたことを踏まえて、継続的にテーマを深めていく対話イベントを行ってみたいと思い、テーマごとに当事者研究 2 回、哲学対話 1 回と交互に手法を取り入れてみることにした。

春休みに毎週、時間を作って対話する良さがあった。何度も参加してくれるリピーターがいて、ほぼ同じメンバーでテーマを掘り下げる事ができた。まさに研究会のような内容の深まりを感じたし、メンバー同士の考え方の違いや、その人らしさをゆっくり味わうことができ、場の空気のようなものも生まれた。対話の前やあとに、メンバー同士で雑談したり、次のテーマを決めたりもした。そこから新しいテーマに広がっていった。

二つの話し方を試してみて、ファシリテーションの正解はなく、もっとみんなが楽しめる、リラックスできる場を作ることが大事だと思った。ルールをキッパリ決めるよりも、参加する人が好きなように参加でき、自分の体からリラックスした言葉を引き出していくようなファシリテーションを目指していき、学生の居場所や心の憩いを感じられる場所を作っていきたいと思った。

・シリーズで開催して良かった点

2022 年は定期的に「コミュニケーション」について当事者研究を行ってきた。そこで春季休業中にその集大成として「コミュニケーション」について対話することにした。

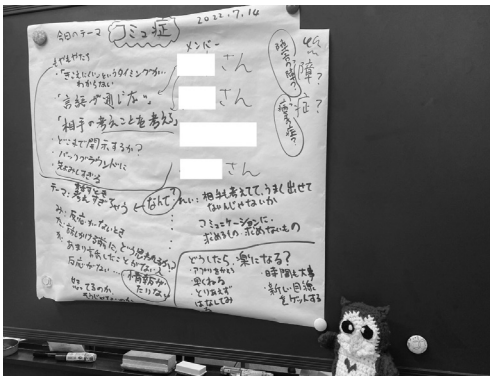
哲学対話や当事者研究の技法を用いて、コミュニケーションについて話すことで狙っていたことは、「伝わることが当たり前」という考えをあえて捉え直してみることだった。

私自身難聴があり、コミュニケーションについての難しさや、それを言葉にできないもどかしさを感じているので、伝わるコミュニケーションより、伝わらない難しさや、他の人が感じている伝わらなさとの共通点を探してみたかった。

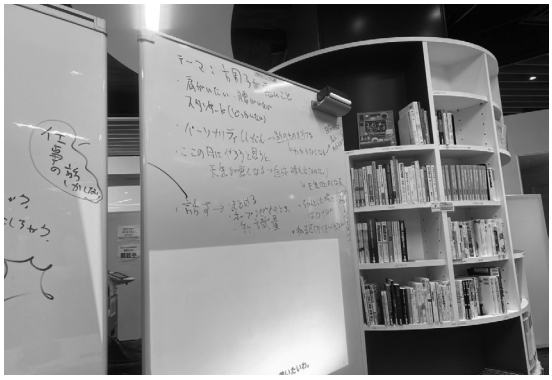
結果、伝わらないことやうまくいかないことを仲間と考える当事者研究の方法で自分の理解を深めてから哲学対話を実施したため、うまく行ったと思う。伝えることの前にある、それぞれの考え方や、自分の言葉を生み出す前の悩みやもやもや、相手とうまくいかなかった経験などの捉え方など、コミュニケーションの難しさについて正面から立ち返って考える事はとても大切だと気づけた。

そして 2022 年の最後は「じぶんの言葉」というテーマで、言葉について話し合った。最終的に対話とは、自分の言葉を見つけるためにあるものだと思っている。いろいろな人と話し合って、問いかけられて答えていくことで、自分の考えを自分自身で初めて知ることがある。そうした言葉をたくさん見つけることが自分を表す基本になる。対話カフェを通して、参加した人それぞれが、この場で気づけた自分の言葉を胸に、自己表現を実現してくれると嬉しい。

▲哲学対話「働くってなに？」



▲当事者研究「コミュ症」を研究してみよう



▲当事者研究「最近調子が悪いこと」

▲アート鑑賞対話

語　学

韓国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に韓国語や韓国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

韓国人留学生の大半は４月になりようやく日本に来ることができました。初めてのボランティア活動として韓国語や韓国文化を日本人に教えるという高いハードルを懸命に乗り越えていく様子は回を追うごとに成長していき、お互いの文化を知ろうとする講師学生と受講学生の相乗効果でとても素晴らしいものになりました。

各教室ともに、少人数での開催となりましたが、そのぶん連帯感が生まれ、教室終了後も、一緒に食堂へ昼ごはんを食べにでかけたり、お互いの共通の趣味について話をしたりなど、たくさんの交流を持つことができました。

秋学期は４つのクラスのうち２つのクラスが、講師学生が韓国人留学生と日本人学生のペアのクラスの開催となりました。

日本と韓国文化の違いを比較しながら紹介することができ、受講学生が知りたい内容を幅広く教えることに成功していました。それぞれの講師学生がサポートにまわる時は、お互いの文化背景からのアドバイスを多く取り入れることでとてもいいフォローアップも行えました。

講師学生と受講学生の間での異文化交流として始まった語学教室ですが、出身国の違う学生同士で講師を担当し教室運営を行うという新たな形の異文化交流も生まれています。語学教室も回を追うごとに進化が進んでいます。

日　時　2022 年 5 月 9 日(月)～7 月 6 日(水)春学期
2022 年 11 月 8 日(火)～12 月 16 日(金)秋学期

場　所　駿河台キャンパス・和泉キャンパス・中野キャンパス

内　容　明大生が明大生に語学や文化を教える活動や文化交流を行う

参　加　307 名

＜春学期＞

クラス	日時	場所	回数	講師学生	受講学生
月曜クラス	2022 年 5 月 9 日(月)～7 月 4 日(月) 10：50 ～ 12：30	和泉キャンパス	9 回	18 名	40 名
火曜クラス	2022 年 5 月 10 日(火)～7 月 5 日(火) 9：00 ～ 9：40	駿河台キャンパス	9 回	18 名	30 名
水曜クラス	2022 年 5 月 18 日(水)～7 月 6 日(水) 10：50 ～ 11：30	和泉キャンパス	6 回	12 名	32 名

＜秋学期＞

クラス	日時	場所	回数	講師学生	受講学生
火曜クラス	2022 年 11 月 8 日(火)～12 月 13 日(火) 11：00 ～ 12：00	和泉キャンパス	6 回	12 名	33 名
木曜クラス①	2022 年 11 月 10 日(木)～12 月 15 日(木) 11：00 ～ 12：00	和泉キャンパス	6 回	18 名	30 名
木曜クラス②	2022 年 11 月 10 日(木)～12 月 15 日(木) 11：30 ～ 12：30	駿河台キャンパス	6 回	8 名	20 名
金曜クラス	2022 年 11 月 11 日(金)～12 月 16 日(金) 11：30 ～ 12：30	中野キャンパス	6 回	12 名	24 名

政治経済学部２年　イ ジェウン
（春学期　和泉キャンパス　月曜クラス担当）

韓国語教室は新しい経験、思い出、友達でいっぱいの貴重な経験だった。最初は教える経験もなく、母国語をどうやってわかりやすく伝えればいいのかという悩みと心配があった。でも韓国語に興味を持って教室にきてくれた学生に、いい授業を作ってあげたいという気持ちで始めた。最初の授業から韓国語に関心を持っていろいろ質問してくれたり頑張って勉強してくれる学生を見ながらやりがいを感じた。そして授業を重ねるごとに増える学生と、みんなが見せてくれる韓国語に対する熱情でもっと頑張って授業を準備することができた。

２か月間、毎週月曜日の授業を準備するため講師担当の留学生と二人でミーティングを行い、週末に授業資料を作るというスケジュールは大変だった時もあった。しかし、私達が準備したこと以上に、毎回の授業で学生からもらうことのほうが大きかった。先生と学生というよりみんないい友達になって一緒に誕生日を過ごしたり遊びに行ったり授業が終わってもいろいろ話をしたりした。いい友達になったから毎回韓国語の授業に行くことが楽しくなった。また、学生たちの韓国語力がどんどん成長していくことを見るのが一番よかった。みんな最初は韓国語をどのように読むのか、どのように形成されているのかもわからなかったが今は読める韓国語も多くなり、簡単な会話までできるようになったのを見てやりがいを感じた。

完璧な授業ではなかったかもしれないが、私達先生にも学生にもいい時間だったと思う。改めていい思い出を一緒に作ってくれたジヒさんと韓国語教室の学生なつ、ゆうか、マット、るい、えみり、ももかに感謝の気持ちを伝える。

文学部２年　イ ヨヌ
（秋学期　和泉キャンパス　火曜クラス担当）

最初は上手にできるか心配でいっぱいだったし、毎週テーマを決めてパワーポイントを作るのも大変でしたが、振り返ってみたらすごくやりがいがあり、留学生活の大切で幸せな思い出になりました。

韓国人ではわからない外国語としての韓国語の文法や学習方法については一緒に講師を行ったちかこさんが説明してくれました。韓国人じゃないとわからない、韓国の文化や最近の流行などについては自分が教えました。韓国人の私だけではなく、日本人の友達と一緒に教室を進めていったのも良い教室ができた理由の一つだと思います。

学生さんもみんな毎週楽しく参加してくれました。教室が終わる日にみんなに「ここまでありがとうございました」、「本当に楽しかったです」、「もう終わりなのが残念です」とお礼を言ってもらえました。この授業が本当に役に立ったんだと思うとすごく嬉しかったです。

ラーニングスクエアにある教室もみんなで話しやすい形の教室だったので良かったと思います。ここまで本当にありがとうございました。

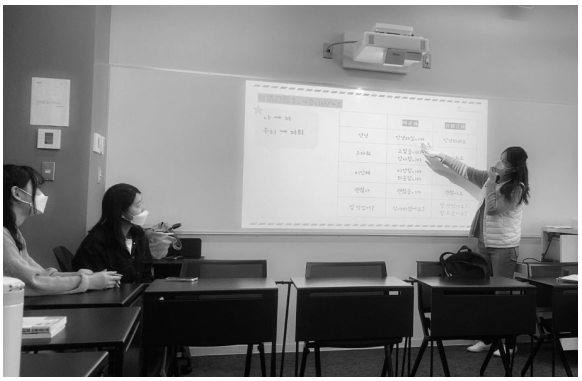
国際日本学部４年　名倉 真実
（秋学期　中野キャンパス　金曜クラス担当）

私自身、母が韓国人で韓国の大学院への進学が決定しているなど、韓国と繋がりは多々あるものの、韓国語のネイティブスピーカーではないため、語学教室の教える側に立つかどうか、正直最初は躊躇していたが、１ヶ月半やってみてよかったと思えました。まず、文法などを復習していき、教えるにあたって気付かされた、苦手な文法とかを再確認できたのがよかったです。もともとは人の前に立って話すのは好きではありませんでしたが、みんながとても韓国語教室に協力的だったので私の緊張もほぐれ、楽しみながら進行することができました。

１ヶ月半、６回分の韓国語教室をやりきれたのは、一緒に授業計画を練って、韓国語がネイティブでない私にたくさんアドバイスをくれたユシンさん、毎回授業中も積極的に参加してクラスを構成してくれた生徒の皆さんのおかげだと思います。この支えてくださった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

▲春学期　和泉キャンパス　月曜クラス

▲秋学期　和泉キャンパス　火曜クラス



▲秋学期　和泉キャンパス　木曜クラス

▲秋学期　駿河台キャンパス　木曜クラス

▲秋学期　中野キャンパス　金曜クラス

中国語教室 中野

中野キャンパスでは、明大生が明大生に中国語や中国文化を教えながら異文化交流を行う教室を毎年開催しています。

日　時　2022 年 5 月 11 日(水)～7 月 8 日(金)春学期
2022 年 11 月 16 日(水)～12 月 14 日(水)秋学期

場所・方法　駿河台キャンパス(Zoom 併用)・和泉キャンパス・生田キャンパス・中野キャンパス

内　容　明大生が明大生に語学や文化を教える活動や文化交流を行う

参　加　251 名

＜春学期＞

クラス	日時	場所	回数	講師学生	受講学生
水曜クラス	2022 年 5 月 11 日(水)～7 月 6 日(水) 13：30 ～ 15：10	和泉キャンパス	9 回	27 名	18 名
木曜クラス	2022 年 5 月 12 日(木)～7 月 7 日(木) 13：30 ～ 15：10	中野キャンパス	9 回	27 名	19 名
金曜クラス①	2022 年 5 月 13 日(金)～7 月 8 日(金) 12：30 ～ 13：30	駿河台キャンパス Zoom	9 回	33 名	30 名
金曜クラス②	2022 年 5 月 13 日(金)～7 月 8 日(金) 15：30 ～ 16：10	生田キャンパス	9 回	9 名	10 名

＜秋学期＞

クラス	日時	場所	回数	講師学生	受講学生
水曜クラス①	2022 年 11 月 16 日(水)～12 月 14 日(水) 12：30 ～ 13：30	中野キャンパス	4 回	12 名	17 名
水曜クラス②	2022 年 11 月 9 日(水)～12 月 14 日(水) 13：30 ～ 15：10	和泉キャンパス	5 回	20 名	29 名

前年度の語学教室での経験が楽しかったので続けて開催したいと参加してくれる留学生が少しずつですが増えてきています。

春学期の中国語教室は 4 キャンパスで対面実施となりました。全クラスとも、昨年秋学期に参加した留学生が新たな講師学生とともにオリジナリティ溢れる教室を開催してくれました。

和泉キャンパスでは、自分たちの身近な事柄に目を向け、中国の学生事情や中国のコマーシャルなど、自分たちの目を通して感じたことを、映像を用いて話してくれました。

中野キャンパスでは講師学生が分担して、それぞれの学生のレベルに合わせて教室を行いました。日本でも食べられる中国グルメなども紹介してもらいました。最終日の家庭料理の回では留学生がそれぞれ自宅で作った料理を写真で紹介してくれました。

駿河台キャンパスでは、対面と Zoom のハイフレックスで教室開催をしました。日本でも使われる漢字熟語を、中国語ではどのような意味で使っているのか教えてもらう授業では、日本人と中国人の共通言語である漢字を使うことでお互いの認識の違いを楽しむことができ、驚きながらも理解が進みやすい内容となりました。

生田キャンパスでは中国の漢詩を読み解く教室を行いました。風景を詠んでから作者の心情を描いていることを知り、漢詩を詠む楽しさを味わいました。

秋学期の和泉キャンパスの中国語教室の経験学生はとてもパワフルで実行力がありました。受講している学生もパワーに引き込まれ楽しく教室に参加していました。このような行動力のある学生が教室運営に意欲的に参加してくれることは、他の講師学生や受講学生にも大きな影響があるようです。毎回、教室終了後も、様々な中国文化を紹介し、楽しくディスカッションを行っていました。

中野キャンパスの中国語教室では、進行を経験者が把握し、新しい講師学生にも自由に教室を実行してもらい、バランスのいい教室運営が行えました。自分の好きなカルチャーを紹介するので担当学生の楽しさが受講学生にも伝わっていました。また、中国語の上達には中国人のお友達を作ってたくさん話すといいですよとアドバイスをする場面もありました。

異文化交流や友達を作る場として語学教室が一役を担えるよう、明大生の参加を増やすことが今後の課題です。

政治経済学研究科 1 年　閻 芳氷
（春学期　駿河台キャンパス　金曜クラス担当）

今回はボランティア講師として 2 回目の参加だったので、初回のような緊張や不安がなく、むしろ様々な文化背景のある学生さんとの出会いを楽しみました。1 回目の経験を活かして、教室では、中国語のピンイン・アクセントという基礎的な知識から、自己紹介・日常挨拶などの実用中国語も交え、中国の祝日・伝統文化まで色々なことを紹介しました。それ以外にも、受講生の興味に応じて好きな中国人アイドル・ドラマ・漢詩・音楽などについても一緒に交流しました。毎回の授業の話題を工夫して考えました。この 2 ヶ月は充実した時間を過ごせて非常に嬉しかったです。

今回のボランティア活動を通じて、日本人学生や韓国人の学生と話し合い、貴重な体験がありました。異なる文化間の交流が本当に面白くて、たくさんのことも学びました。4 人で一緒に中国語を教えたことを契機にして、新しい友達も作ります。機会があれば、もう一度中国語教室のボランティアをしてみたいと思います。

政治経済学部 2 年　LIU BAICHUAN
（春学期　和泉キャンパス　水曜クラス
秋学期　和泉キャンパス　水曜クラス担当）

2021 年度の秋学期に引き続き、2022 年度も語学教室に参加させていただきました。私達の教室は最初、中国の映画をテーマにしていましたが、何回かやってみると、映画を見て解説した時の進行のテンポがかなり悪いような気がしたため、メンバーとの相談の上、方針を変えました。最終的に中国に関する映像を見て中国語や中国の文化について解説する路線で行くことに決まりました。幾つかの試行錯誤を重ね、この形となりました。

私達の教室では、中国の一人っ子政策（最初の映画で紹介）や中国の学校生活、食文化、今の社会問題、漢字文化等様々なテーマが取り上げられました。一つ一つのテーマについて深掘りすることができなかったのですが、それらを紹介することで、中国語並びに中国の事情を上手く紹介できたのではないかと個人的に考えております。

今回の教室は試行錯誤がたくさんありましたが、参加学生さんと一緒に楽しく教室を作ることができたと思います。何回かの教室を経て学生さんも徐々に積極的になってくれましたし、学生さんの質問によってアドリブでテーマを変えたりすることもありました。私達も楽しかったし、参加した学生さんも楽しかった様子でした。至らない点も多くありましたが、楽しい教室作りを一緒に進行できたのではないかと思います。今後また機会があれば、ぜひとも参加したいと思います。

文学部 3 年　平 傑涛
（秋学期　中野キャンパス　水曜クラス担当）

今学期の中国語講座は私は四回目の参加になり、対面というこれまでと違う形で、講座を行えるようになりました。色々慣れていない所もありましたが、対面の教室はやはりオンラインで味わえないものなので、非常に嬉しい限りでした。

秋学期は「エンタメ」という、細分化しても使いやすいテーマにしました。そのため、映画・アイドル・ドラマ・音楽という内容で行えました。僅か 4 回の講座でしたが、学生とディスカッションやコミュニケーションを取り、中国・台湾・香港・マカオといった中華圏の華流文化をより一層知ることができたと考えます。特に、他の国からの受講生もいたので、よりグローバルな異文化交流もできました。

短い間でしたが、異文化交流や文化共有、五感での授業体験などいろいろな形での中国語講座ができました。学生・講師間の仲も良くなり、これからも講座を運営したいと思いました。

商学部２年　張 佳明
（春学期　和泉キャンパス　水曜クラス
秋学期　和泉キャンパス　水曜クラス担当）

語学教室のテーマは毎週ズームミーティングでコンテンツを考えた。授業計画は、その日のテーマに合わせて時間配分と進め方（グループワークなど）を決めた。テーマはなるべく毎週異なる内容にするように工夫し、毎週の内容をできるだけ事前に用意しておくようにした。初回の中国語会話のテキストは３人で分担して準備した。高校生活を紹介する回では、みんなで自分の高校時代の写真とテキストを用意した。他の回はネット上の情報と自分たちの経験を用いて勧めたので、資料作成は特にしなかった。教室運営する際、教室で内容説明をする人と事前に資料作成を担当する人、授業が進む中で内容について補足をする人という三つの役割を設けた。

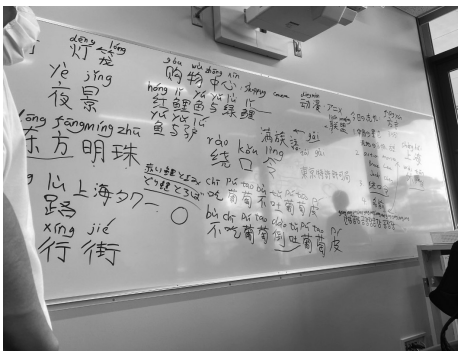
毎回参加しに来る学生がいて、彼らが授業を聞いてメモに勤めている姿を見たらモチベーションが上がった。そして、講師学生はみんなやる気が高くて、本当に頼りになる存在だったので、自分も頑張らなきゃと思った。

上手く行った点は講師学生同士が役割分担をしてきちんと授業を勧められたことである。毎回のコンテンツも違うものを用意し、受講学生に新鮮感を持たせた。そして毎回事後アンケートを行いみんなの意見を集めた。上手く行かなかった点は、講師学生が全員集まって授業をする回が少なかったことである。

本当に自分は成長したと実感した。秋学期は春学期と比べると、受講学生とのやりとりやコンテンツの充実についてもっと工夫した。また、授業を進めていく中で、他の講師学生から色々な協力を得たり、受講学生からたくさんの意見をもらうことで、自分だけでなく、みんな一緒に目標に向けて頑張っていると感じた。そして、自分が見てきた中国と、日本人学生が見た中国を相対化し、自分の文化と異文化に対する理解が深まったと思った。これからの講師学生には、一方的な講義みたいな授業をするより、もっと参加者学生の声を聞き、参加者学生とのやりとりを増やした方が良いということを伝えたい。

▲春学期　中野キャンパス　木曜クラス

▲春学期　駿河台キャンパス　金曜クラス



▲秋学期　和泉キャンパス　水曜クラス

▲秋学期　中野キャンパス　水曜クラス

講演会「明大生の知らないシリーズ」駿河台

文学部平山ゼミの３年生と明治大学学生保険委員会が中心となり企画した講演会です。
「明大生の知らないシリーズ」と題し、リプロダクティブ・ヘルス・ライツを多くの学生に知ってもらうために「月経」・「性感染症の予防」・「避妊」をテーマに２回に分けて行われました。

◆「明大生の知らない生理の世界」

飯田橋レディースクリニック院長　岡野浩哉先生をお招きし、月経に関する幅広い情報について講演いただきました。Zoom ミーティングの形式と対面形式の両方を用いて、事前予約不要で開催しました。

日　時　2022 年７月７日(木)

場所・方法　駿河台キャンパスリバティタワー内教室での対面と Zoom のハイブリッド

内　容
- 担当者より始めの挨拶・講師紹介
- 岡野浩哉先生講演
  1. プロローグ
  2. 正常な月経とその仕組み
  3. 異常な月経とは？
  4. 妊娠の仕組みから理解する、避妊法の仕組みと日本の特徴
  5. リプロダクティブ・ヘルス・ライツ
- 質疑応答

▲講演会の様子

参　加　95 名(対面と Zoom を合算した人数)

目　的　生理(月経)の仕組みや特徴、特に辛い症状など、月経に関する幅広い情報について多くの学生に知ってもらう。

講　師　岡野 浩哉 先生(飯田橋レディースクリニック院長、医学博士)

主　催　文学部平山ゼミ３年生一同、明治大学学生保険委員会、駿河台ボランティアセンター

コーディネーター　平山 満紀 先生(駿河台担当ボランティア副センター長、文学部教授)

文学部３年　工藤 翔偉

男性と女性の社会的な違いについては語られることは多いものの、身体の違いについて語られることはなかなか無いため、今回のような、月経について「正しく」「必要な」知識を学ぶことができる機会は非常に貴重で、参加された方にとっては有意義な時間だったことと思います。今回学んだ知識は全て、当事者として、また当事者でなく支援者、理解者としても役に立つものになりました。

専門家の先生をお招きした講演会は、私たちゼミ生にとって初の試みで、当日の運営や広報活動など慣れない部分もありましたが、こうした素晴らしい講演会を開催できたことをゼミ生一同嬉しく思っています。今回の経験を、一回限りで終わらせるのではなく一人でも多くの方に正しく必要な情報をお届けできるよう、こうした機会をまた設けられたらと思います。

◆「明大生の知らない性感染症と避妊の世界」

春学期に開催した「明大生の知らない生理の世界」の講演会が非常に好評だったことから、第2弾として文学部平山ゼミの3年生が中心となり、企画した講演会です。飯田橋レディースクリニック院長　岡野浩哉先生をお招きし、「性感染症」と「避妊」をテーマに自分自身やパートナー、将来生まれてくる子どもたちを守るための正しい知識を教えていただきました。開催形式は、対面とZoomを組み合わせたハイブリッド型で行い、事前予約不要としました。

日　時　12月1日(木) 15：20～17：00

方　法　対面とZoomのハイブリッド

内　容
- 避妊法の種類と避妊効果
- 妊娠成立機序と避妊法の作用部位
- 日本、世界の避妊事情
- 緊急避妊について
- 性感染症について

参　加　131名(対面とZoomを合算した人数)

講　師　岡野 浩哉 先生(飯田橋レディースクリニック院長、医学博士)

主　催　文学部 平山ゼミ3年生一同、駿河台ボランティアセンター

コーディネーター　平山 満紀 先生(駿河台担当ボランティア副センター長、文学部教授)

▲明大生の知らない性感染症と避妊の世界　ポスター

サイバー防犯ボランティア 中野

中野警察署からの協力依頼で、サイバー犯罪被害防止とインターネット利用時の規範意識の向上のために、最新のサイバー犯罪の実態について、駅を利用する一般の方に啓発活動を行いました。

初回の10月は、寒く雨が降る中、集まった7名の学生が中野駅を利用する通行人にチラシなどを配布し、サイバー空間をめぐる情勢を説明するなどして防犯への意識を高める活動に従事しました。

特にインターネットに不慣れな高齢者を対象にチラシなどを配り、広報啓発に努めました。中には活動の様子を見ていた通行人が学生に歩み寄り、説明に耳を傾ける場面もありました。

1月は「中野署安全安心街づくりフェス」の一環として広報啓発活動に参加しました。多くの方がイベントを見守る中、様々な犯罪への注意喚起をものまねタレントの松村邦洋さんと一緒に行いました。

今後も周辺地域の住民の方の防犯意識を高めるために、中野警察署と共に定期的に活動を行う予定です。

日　時	①2022年10月7日(金) 12：45～13：15 ②2023年1月28日(土) 10：30～12：30
場　所	中野駅北口周辺・東中野駅西口広場周辺
内　容	犯罪被害防止のための広報啓発活動を行う
参　加	①7名 ②5名
主　催	中野警察署

法学部1年　三浦 琉菜

今回がはじめてのボランティアで、かつ知らない人に話しかけてチラシを渡すという活動内容だったため初めは緊張しました。しかし、警察の方がサポートしてくださったり、私の様子を見て自らチラシをもらいに来てくれた方や、私の話に耳を傾けてくれた方がいてくださったおかげで無事にボランティア活動を行えました。この活動によって少しでもスマホなどでの詐欺被害が少なくなれば良いなと思います。

政治経済学研究科M2　ヌルジャン エリフ セルジェン

こちらのボランティア活動は自分の研究テーマに関連しているため、貴重な機会になったと思います。

現代社会にとってサイバーセキュリティがとても重要だと多々言われますが、どのような対策をとれば良いか分からない人も大勢います。そのような人々には、今回のボランティア活動で配った資料や、直接声をかけることが、正しいサイバーセキュリティ対策になると信じています。

▲10月　中野駅北口周辺での活動の様子

▲1月　東中野駅西口広場周辺での活動の様子

杉並区高齢者との「お茶会」和泉

和泉ボランティアセンターでは、地域包括支援センター「ケア 24 永福」と連携し、近隣地域にお住まいの方々と互いに交流を深め、安心して生活できる地域づくりを目指した交流会「お茶会」を定期的に実施しています。学生達が交流企画の検討・運営を担い、ボランティアセンターでサポートをしています。これまでに、数多くの地域の方にご参加いただき、長年の活動が認められ、2021 年度は杉並区より「青少年善行表彰」をいただいています。

2021 年からはオンラインでの交流を継続していましたが、2022 年度は第 2 回から念願の対面での実施となりました。学生達は事前準備を対面や Zoom でアイデアを出し合い打ち合わせを重ね、当日は楽しく和やかな交流をすることができました。地域の方々も「久しぶりにこんなに笑った」「おしゃれをしてきた」「たのしみでウキウキしている」と、3 年ぶりの対面での開催を喜んでくださり、お互いに顔を合わせることの大切さを再認識しました。第 3 回は、卒業間近の 4 年生も参加してくれました。「お茶会」は、全員で協力して作り上げるとても素晴らしいチームです。異なるバックグラウンドを持つ人々との交流を通じて新たな視点やアイデアを得ることで、さらに成長していくことと思います。

今後も地域の方々と繋がりを持ち続けられるように取り組んでいきたいと思います。

<第 1 回オンライン>

日　時　2022 年 6 月 18 日(土) 14：00 ～ 15：00

内　容　・山手線ゲーム
・「悩み相談」などをテーマにした歓談

参　加　学生 12 名、地域の方 7 名、職員 4 名

▲オンラインお茶会の様子

<第 2 回>

日　時　2022 年 12 月 3 日(土) 14：00 ～ 15：30

内　容　・オリジナルすごろく
・「新年、年の暮れ」「クリスマスの思い出」などをテーマにした歓談

参　加　学生 9 名、地域の方 7 名、職員 6 名

▲お茶会の準備の様子

▲お茶会の様子

<第３回>

日　時　2023 年 3 月 11 日(土) 14：00 ～ 15：30

内　容　・対義語伝言ゲーム
・「卒業、入学」「春の思い出」などをテーマにした歓談

参　加　学生 11 名、地域の方 6 名、職員 6 名

▲お茶会の様子

▲お茶会の参加者

参加学生の声

文学部 2 年　森下 聡

6 月 18 日の土曜日にお茶会が Zoom で行われました。私は初参加ということで少し緊張していました。当日は我々大学生も多く参加し、高齢者の方も 7 人参加しました。例年より大人数でした。全員集まった後、小グループに分かれてちょっとしたアクティビティを行いました。まず世界の国の名前で山手線ゲームを行いました。Zoom ということですこしやりにくさを感じましたが、高齢者の方々の記憶力がとてもよく、一つのお題で 5 分以上続きました。大学生達よりも多くの国を出していて驚かされました。Zoom 上だとは思えないほどの盛り上がりを見せ一気に緊張が和らぎました。Zoom が和やかになったところで、次に大学生の悩みを高齢者の方々の知恵を借りて解決するお悩み相談が始まりました。そこで私は「最近寝つきが悪いのですぐ寝れる方法」を相談したところ、「耳の上と下を合わせて眼を瞑る」と、「自分が興味のない本を読む」という答えをいただきました。どちらとも試してみてとても有効だったので高齢者の知恵はさすがだなと感じ、話す機会をいただいてよかったなと感じました。全体を通して、高齢者の方々がとてもすらすらと話し、私達にもわかりやすくお話をしていただけて高齢者の方々のすばらしさを実感しました。1 時間という短い時間だったのでまだしゃべり足りないなと感じました。オンラインでの実施が続きそうですが十分楽しめました。対面での実施は体験したことがないので今後はしていきたいです。

文学部 2 年　飯田 莉央

▲お茶会受付の様子

2022 年度の 12 月と 3 月のお茶会は、和泉キャンパスで行われました。先輩方にとっては久しぶりの、私達下級生にとっては初めての対面での開催でした。高齢者の方々と対面でお会いできることへの期待を胸に、昼休みや授業がない時間に集まって準備をしました。トークテーマ決めやオリジナルすごろくの作成だけでなく、時には自分たちでゲームを実践することもありました。高齢者の方々に楽しんでもらうために先輩や後輩と相談して準備を進めるこの期間は、とても充実して楽しかったことをよく覚えています。少しの緊張もありつつ迎えた当日は想像以上に盛り上がり、あっという間に時間が過ぎました。ゲーム中には声を出すほど笑い、フリートークの時間では意外な共通点から話に花が咲きました。最後には高齢者の方々から「楽しかったよ」と言っていただきました。この経験から、私達の間でお茶会をさらに良くしていこうという気持ちが強くなり、先輩方が卒業された今でも積極的に話し合いを行っています。

私は、楽しさや雰囲気を共有することで「つながり」を感じられることがお茶会の良いところだと考えています。この良さを活かして、高齢者の方々に安心できる温かい場を提供していきます。そして、スタッフの皆さんと協力しながら学生が主体となって活動し、お茶会の魅力を下の代に伝えていきます。

秋のお楽しみ会 和泉

2012 年度から 2019 年度まで継続して参加していた杉並障害者福祉会館での「福祉会館まつり」が 2022 年度もコロナの影響で中止となりました。このイベントは地域で 30 年以上に渡り開催され毎年多くの方が参加していましたが、2022 年度は、縮小版として「秋のお楽しみ会」と名前を変更して開催されました。公認ボランティアサークル「しんちーむ」の学生が運営スタッフとして参加しコロナ禍でもつながりを途切れさせず続ける事や、支え合う関係性の大切さを再確認することができる機会となりました。

日　時	2022 年 10 月 16 日(日) 10：30 ～ 15：30
場　所	杉並障害者福祉会館
参　加	2 名
主　催	杉並障害者福祉会館運営協議会

▲受付の様子①

▲お楽しみ会の様子

▲受付の様子②

国際日本学部 1 年　永塚 友里佳

今回のボランティアを通じて、たくさんの方の笑顔や前向きなエネルギーに触れさせていただくことができ、とても元気づけられました。それぞれの方が自分らしくステージに立っていて、まわりの人を笑顔にする姿に私自身も勇気をもらいました。また、普段から障がいのある方と接する機会が多くあったわけではなかったため、この活動にはじめは不安を感じていましたが、ほかのスタッフの方が私たちを温かく迎えてくださり、いろいろなことを教えてくださったことに感謝しており、良い経験ができたと感じています。地域にこうした温かい場所があることにより、たくさんの人が安心して暮らせるまちができるのではないかと感じ、私自身も今後は小さなことでもこうした温かい気遣いを忘れないように心掛け、誰かの心の支えとなれるようにしようと思いました。

法学部 3 年　渡部 隆介

障がい者の方と実際に交流を持つ機会というのは中学校以来で、実生活においてなかなか接点を持つ機会はないので貴重な機会になりました。一番印象に残っていることは、障がい者の方々の余興とそれを盛り上げている観客の光景です。不自由がある中でなかなかうまく踊れなかったり表現できない中、それでも一生懸命踊ったり、応援したりしているところにとても感動しました。このような場はとても大事だと実感しました。私は公務員を志望しており、まちづくりに興味がありましたが、将来、障がい者支援に携わりたいなと興味が湧いたので、行政が行っている施策などを調べてみたいと思います。まだ経験としては浅いので、これからも障がい者支援活動に参加し続けていきたいです。今回、参加してよかった反面、個人的な反省としてはもう少し参加者の方々と コミュニケーションをとりたかったなと思いました。コロナの関係で出過ぎたことはできないですが、次に参加する機会があれば、もっとコミュニケーションをとってみたいです。初めて参加した会でしたが、みなさんが優しく接してくださり、嬉しかったです。クリスマス会も行うと聞いたので、また募集があればぜひ参加したいです。

障がい者・高齢者体験 和泉

和泉ボランティアセンターでは、学生にもっと気軽にセンターに足を運んでもらおうと、センター内で障がい者・高齢者体験イベントを実施しました。高齢者・障がい者模擬体験装具を着用し、心身の苦痛、快、不快を感じ取ることを、学生自らが五感を使って疑似体験し、いかに今、不自由のない生活が送れているかを十分に実感した体験となりました。体験用装具を着用すると、どの学生も汗ばむほどで、高齢者に対する認識が変わり、手助けの必要性を感じていました。また、体験後には、家族支援のあり方や社会的介護のあり方についても考えるきっかけになってもらえればと、併せてアンケートを実施しました。

日　時　2022年11月15日(火)～17日(木) 11：00～16：00
場　所　和泉ボランティアセンター
内　容　①高齢者模擬体験セットを装着し荷物を持って歩行
②白杖及びアイマスクを着用し歩行または手引きを行う
③点字器で名刺などを作成
参　加　19名

▲アイマスク着用歩行

▲高齢者疑似体験

文学部1年　歩けば歩くほど悪化するような感覚。祖母の気持ちがよくわかりました。

文学部1年　視界が狭くなるだけで、こんなにも歩くことが困難になるとは思わなかった。また、視界だけでなく、身体が重くなったり、背骨が曲がったりすることでも、歩くことが困難になることが分かった。歩行が遅い高齢者が歩いていたら、いたわりの気持ちを持とうと思った。

文学部1年　点字器をはじめて使ったのですが、難しく、目の不自由な方のすごさを改めて感じました。白杖体験では、案内する役が難しかったです。方向をわかりやすく伝えるにはどうしたらよいか、考えながらやりました。

文学部1年　高齢者・障がい者の体験を通して、より切実に感じ取ることができた。何事も自分で体験してみることが大事だと再確認した。

政治経済学部1年　町中で高齢者体験や点字を用いた会話など、日常で実践するイベントがあれば興味がある。

政治経済学部2年　普段バイトで高齢のお客さんと接する機会がある。お財布からお金を出すのに手間取るのを見て「遅いなぁ」とイライラしてしまうことがありました。でも今回の高齢者体験で高齢の方の体の動かしにくさや、目の悪さを体験し、生活がしづらいことを知ることができました。今後は高齢のお客さんにも優しく接していこうと思いました。

政治経済学部4年　体の重さや胴の曲がりが続くと負担が体全体にひびき、様々な体の支障が出る危険性があることを体験で実感できました。「お手伝いしたい」という思いの他に、「どう手伝えばよいか」を学ぶことができたのが貴重でした。

クリスマス音楽会 和泉

杉並障害者福祉会館で行われた「クリスマス音楽会」の演奏トップバッターとして、公認サークル「津軽三味線響」が参加しました。クリスマスの曲を含めた全６曲を演奏し、津軽三味線の豪快で美しい音色が会場内に響き渡りました。来場者の方々は曲に合わせて歌ったり、リズムを取ったりして盛り上がりました。他にはクラッシック演奏、腹話術のアトラクションなど盛りだくさんの内容で楽しいひと時を過ごしていました。

日　時	2022 年 12 月 11 日(日) 13：30 ～ 14：30
場　所	杉並障害者福祉会館
参　加	４名(公認サークル「津軽三味線響」)
主　催	杉並障害者福祉会館運営協議会

▲演奏の様子

参加学生の声

政治経済学部２年　野田 涼平

現代曲から民謡まで様々なジャンルの曲を披露させていただきました。クリスマス曲では皆さんにサイリウムを振って演奏を盛り上げていただけてとても嬉しく、感無量でした。

実は１つ上の先輩が 11 月に引退して初めての演奏の機会で、私も部員も緊張していたのですが、皆さんの温かい声援のおかげでリラックスして演奏できました。本当にありがとうございました。また演奏の機会を頂けることがありましたら演奏させていただきたいと思いました。

ブラインド卓球大会 中野

特定非営利活動法人 中野区視覚障害者福祉協会の依頼で、ブラインド卓球大会の運営ボランティア活動に参加しました。

このボランティア活動は、明治大学に通う弱視の留学生の点字学習支援について中野区視覚障害者福祉協会からご協力いただいた際にご紹介していただき、学生のボランティア参加が叶いました。

ブラインド卓球は STT（サウンドテーブルテニス）とも呼ばれ、視覚に障がいのある方たちを中心に楽しまれています。視覚障がい者が競技を行えるよう、通常の卓球とは違うルールで競技を行います。もちろん道具も通常の卓球で使うものと異なります。ボールは中に金属の粒が入っているものを使って音を頼りにボールを打ち合い、音を吸収するラバーをつけていないラケットで打ち返し、ボールをネットの下で転がして行う方法を用います。サーブを打つ際も“打ちます”と声に出し、相手からの返事を待ってからサーブを始めます。

ブラインド卓球自体は認知度が低く、競技者もボランティアも少ないのが現状です。

ですがブラインド卓球は、ボランティアやサポートしてくれる人の参加がないと成り立たない競技です。

選手をサポートするために、様々なサポート活動が必要になります。今回学生は競技選手の誘導やボールパーソン（試合中のボール拾い）のボランティア活動を中心に活動を行いました。

当日は 69 名が参加し約 30 名の選手のサポートを行いました。

参加学生からは、このような競技のボランティアに参加し、普段接する機会の少ない視覚に障がいを持った方との交流を持つことで、いろいろな気づきや成長を実感できたとの感想がありました。

日　時	2023 年 3 月 19 日(日) 9：00 ～ 16：00
場　所	キリンレモンスポーツセンター（中野区立総合体育館）
内　容	・出場選手の誘導 ・ボールパーソン(試合中のボール拾い) ・カウンター（試合中の得点係） ・会場整備等
参　加	8 名
主　催	特定非営利活動法人 中野区視覚障害者福祉協会
共　催	キリンレモンスポーツセンター（中野区立総合体育館）

参加者の声

文学部 2 年　菊川 博行

私は、これから就活に向けた準備などをしていくにあたって、春季休業期間に何かよい経験になりそうなことをしようと思い、このボランティアに参加しました。

ボランティア自体、私にとっては初めてのことで少し緊張していたのですが、大きな問題もなく無事に活動することができてよかったです。

とはいうものの、目の不自由な方やお年寄りに対するサポートには、私の配慮不足もあり、難しさを感じました。誘導する際には、選手の皆さんが不安なく、会場まで移動できるように、周りに気を使わなければならないのですが、見える範囲が比較的狭い人を安全に導くためには、ドアやフェンスといった通常ではあまり気にする必要のないものに対しても、気を配らねばなりません。加えて、アイコンタクトや指差し、ジェスチャー等の音以外のコミュニケーション手段が使えず、私の目に見える障害をすべて声に出して伝達しなければならないということも非常に大変です。そのため実際の活動期間は 6 時間程度でしたが、終わってみるとかなりくたくたに疲れてしまいました。

しかしながら、今まではあまり積極的に関わる機会のなかった方々と交流を重ね、前述のような体験をすることができたことには、やはり大きな価値を感じます。

今日も、駅のホームで点字ブロックの上を歩く、白い杖を持った人に気づき、彼の邪魔にならないような場所に移動することができました。

ボランティアに参加する前よりも目の不自由な方に対する配慮はできるようになったと感じます。わずかながらもこのように、自分の確実な成長を実感できて、今回このボランティアに参加できて本当によかったと思います。

文学２年　吉川 千智

何故参加しようと思ったか

上京してから、街中で白杖を使っている方や盲導犬を連れた方を良く見かけるようになりました。しかしそれでも身近な存在ではなく、いつもすれ違って終わってしまうことに歯がゆさを感じていました。そんな時に目にしたのがこのボランティアの募集です。最初は、目の見えない人がどのように卓球をするのだろうと思いました。それが気になったのと、スポーツを観戦して、会場にいるからこそ感じられる一体感や熱気に触れたいと思い参加しました。

参加してみての気づき

「いきます」「はい」という掛け声のもと始まった試合は、温かい雰囲気に包まれていました。ピンポン玉の中の球が真っすぐに向こうに飛んでいく音がすると、木に当たった快音がして、またこちらに戻ってきます。時には激しい打ち合いになってあっちこっちに行き来します。作り出される静寂や情熱は、以前に私が知っていた他のスポーツと同じでした。

目が見えないと、全てに対してサポートしなければならないというイメージを持っていましたが、必要なのは擁護ではなくて手伝いなのだとその時に気づきました。

至らない部分も色々とあっただろうとは思いますが、関わったことによって視覚障がい者の方を身近に感じることが出来ました。

▲ブラインド卓球大会のボランティア活動の様子

スポーツフェスティバル 和泉

和泉キャンパスの近隣にある、杉並区の方々に広く利用されている運動施設で一斉に開催される「スポーツフェスティバル」という大きなイベントに、杉並スポーツ・カルチャー共同事業体からお声かけいただき、学生が運営サポートで参加しました。

大学近隣の住民の方々や子ども達とスポーツを通してふれ合うことで、より地域を身近に感じる機会となりました。

日　時　2022 年 10 月 10 日(月) 9：00 ～ 18：00

場　所　TAC 杉並区永福体育館、下高井戸運動場

内　容　①フェスティバル受付サポート
②イベント運営補助
③スポーツ競技補助(サッカー、ダンス)
④会場設営や撤収作業等

参　加　12 名

▲活動の様子

参加学生の声

政治経済学部 1 年　越野 萌香

今回、大学生になって初めてボランティア活動に参加しました。当日の運営で受付業務に携わったのですが、初めての場所で知り合いがいることもなく、とても不安を感じていました。しかし、親切な運営団体の方々に恵まれ、私自身もお祭りに参加して楽しみながら活動することができました。また、普段、なかなか子どもたちや高齢者の方と触れ合える機会をもつことができない、そんな中で、幅広い年齢層の方々とのコミュニケーションを体験し、対応の仕方を学ぶことができ、有意義な時間を過ごすことができたと思います。

▲受付の様子

正直、大学に入学する前からボランティアに参加したいと考えていたものの、新しい土地で新しいことに挑戦する勇気が出なかったのです。しかし、やらずして後悔したくないと思い、ボランティアセンターに相談しに行き、このボランティアをおすすめされました。これが大学生活におけるひとつの転換期になったと感じます。この後に、3 つの他のボランティアに応募し、参加しました。今回をきっかけにボランティアの楽しさを知ることができたのです。大学生活初めてのボランティアが、今回のスポーツフェスティバル運営ボランティアで良かったと心から思います。今後も、ボランティアを通して新たな挑戦をすべく、積極的に行動していきたいです。

下高まつり 和泉

和泉キャンパス近くでは、地域の方々の交流を楽しむお祭りが多数開催されています。「下高まつり」もその一つで、今回は公認ボランティアサークル「きずな International」のメンバーが参加しました。当日は輪投げ、ポップコーン販売、スーパーボールすくいなど協議会スタッフの方とチームを組み、お祭りの運営サポートをしました。参加したメンバーはお祭りを盛り上げ、楽しい雰囲気を作りだしていました。

日　時　2022 年 10 月 10 日(月)
場　所　下高井戸運動場
参　加　10 名
主　催　永福和泉地域区民センター協議会

▲活動の様子

参加学生の声

商学部 2 年　岩間 浩輝

「きずな International」は 10 月 10 日に行われた、下高まつりにボランティアとして参加しました。輪投げや射的、スーパーボールすくい、ポップコーンの中でそれぞれ担当を決め、お祭りのお手伝いをしました。近くに住んでいる小学生が多く来ており、子ども達が目を輝かせて屋台を楽しんでいる姿が、とても印象に残っています。

一緒に下高まつりの運営をした自治体の方に話を伺うと、去年の今ごろに比べコロナの感染者数が減ったからか今年の参加者は大きく増えたそうです。というのも、参加者は最初に受付を行い、スタンプラリーの紙をもらってからお祭りを楽しめるのですが、その受付の紙が午前中（お祭り開催時間のまだ半分になったばかりのころ）に無くなってしまったのだそうです。他にも輪投げでは、用意していた景品がなくなってしまうアクシデントも起こりました。

そんな大盛況で終えた下高まつりでしたが、私はこのお祭りを通して、子ども達との交流は素晴らしいということを感じました。普段大学にいると同世代との関りが必然的に多いのですが、子ども達と関わることで、無邪気な笑顔にこちら側も元気をもらえたり、童心に帰れたりするなどいつも経験できない心境になることができます。この感動を得られるのがボランティアの醍醐味なのかなと、改めてボランティアの良さを実感できました。私はこの体験を活かし、これからの学生生活をより良いものにしていきたいです。

まつばらデイキャンプ 和泉

和泉キャンパス近くの世田谷区立松原小学校で、子育て世代と地域の方々との交流や、地域の防災意識を高めることを目的としたデイキャンプが開催されており、2022 年度はコロナ渦を経て 4 年ぶり（2019 年度は悪天候により中止）に開催され、公認ボランティアサークル「きずな International」の学生が参加しました。

規模を縮小し、事前申し込み、所属の小学校ごとに参加時間を決めるなど制約のある中での開催でしたが、地域の方や青少年委員、松原まちづくりセンター、消防署・消防団、地区社会福祉協議会などいろいろな方と活動を共にし、地域との繋がりを感じる良い機会となりました。

日　時　2022 年 10 月 15 日(土)

場　所　世田谷区立松原小学校

内　容　①昔遊びコーナー実施補助
②運動あそびコーナー（ボッチャ）体験補助
③運動あそびコーナー（ハンド・アーチェリー）体験補助
④その他全体の会場設営や撤収作業等

参　加　3 名

主　催　青少年松原地区委員会

▲受付の様子

▲ボッチャ体験の様子

参加学生の声

政治経済学部 4 年　河村 優輝

まつばらデイキャンプは台風や新型コロナウイルスの影響を受け 2018 年以来の開催でした。そのため地域の方々は皆さま待ちに待った開催を喜んでおられました。私達もそのような地域の方々と喜びを共有するとともに、活動を通して貴重な経験ができました。私達が行った活動内容は運動遊び・昔遊びコーナーの運営補助です。受付やルールの説明などを行い、子ども達が安心安全に楽しめるよう努めました。丁寧に説明をすることや目線の高さを合わせて会話をすることなど、参加したメンバーがそれぞれ工夫をしながら活動を行いました。子ども達の中には各コーナーをできるだけ多く回ろうと逸る気持ちでいっぱいの子もいましたが、微笑ましい姿でもありました。また、どのコーナーでも子ども達が興味津々に楽しんでいる様子が印象的でした。様々なコーナーの中でも特にパラリンピック正式種目であるボッチャは人気が高かったです。私達も含めて多くの子ども達はボッチャに初めて触れる機会となったのではないでしょうか。ルールも簡単で老若男女問わず誰でも楽しめる魅力があり、コーナーでは子どもから大人まで多くの人の笑顔で溢れていました。私達は、まつばらデイキャンプでの活動を通して多くの子ども達やスタッフの地域住民の方々と交流ができました。この貴重な経験をもとにきずな International はこれからもたくさんの人の笑顔を引き出すことができるボランティア活動を目指していきます。

明大生による津軽三味線ライブ 和泉

和泉キャンパス近隣にある杉並区立杉並和泉学園の、放課後子ども教室による情操教育の一環として、津軽三味線の楽曲を聴き、大学生との触れ合いも楽しむことを目的に開催されました。学園内の体育館に迫力ある美しい音色が響きわたり、子ども達は、普段はあまり耳にすることのない津軽三味線の生演奏に、真剣な表情で耳を傾け聴いていました。演奏後の子ども達との交流では、体を使って思い切り遊び、笑顔が飛び交う楽しい時間となりました。

日　時　2023年3月8日(水) 15：00～16：00
場　所　杉並区立 杉並和泉学園
内　容　公認サークル「津軽三味線響」による三味線の演奏会及びその紹介、子ども達との交流
参　加　5名
主　催　杉並和泉学園 放課後子ども教室 いずみんなクラブ事務局

▲演奏の様子

▲津軽三味線を体験する子ども達

参加学生の声

情報コミュニケーション学部2年　松野下 和温子

私たちの代では初めての小学生向けの演奏会でした。小学生が知っているであろう曲を含めながら、津軽三味線のかっこよさを知ってもらうセットリストにしました。MCでは、知っている曲だと「知ってる！」「幼稚園で踊った！」など賑やかな雰囲気で進み、知らない曲でも最後まで真剣に聴いてくれました。演奏後の質疑応答では、「三味線の重さって何“トン”ですか？」「自分（の背丈）よりも三味線が高いの？」「実際に触ってみたい！」など、小学生らしい元気いっぱいな質問が多く、こちらとしても心温まる時間でした。実際に触ってもらい、弾いてもらった際には、「かっこいい！」「他の曲も弾いてみて」「ランドセルよりも全然重い！」といったさまざまな感想が飛び交い、小学生にとって津軽三味線を知る一つのきっかけになったのではないかと思います。およそ1時間とかなり短い時間ではありましたが、解散時には名残惜しそうに帰っていく姿が多くみられたので、会として成功したのかなと感じています。

今後も、幅広い世代の方に演奏会を通じて、津軽三味線について興味を持っていただくきっかけ作りのお手伝いができればいいなと考えています。

ホームカミングデーへの協力（駿河台ボランティアセンター直属学生ボランティア団体 Tree） 駿河台

日　時　2022年10月23日(日) 9：30～17：00
場　所　駿河台キャンパス　グローバルフロント
内　容　大学で行われるホームカミングデーへの参加。キッズコーナー「めいじろう縁日」にて、射的・輪投げ・塗り絵・ビンゴの実施。
参　加　29名

法学部４年　吉村 野ばら

昨年は、対面で行うことができなかったこともあり、初のホームカミングデーへの参加でした。今年はどのくらいの子ども達が参加してくれるのか不安でしたが、１日で 200 名弱参加してくれ、楽しい時間を過ごすことができました。射的に行列ができたり、塗り絵が満席になったりと大変ながらも充実していました。特にビンゴ大会は大盛り上がりで、司会を務めた私も嬉しく思いました。自分達が想像していたよりも、幅広い年齢の子ども達が参加してくれたため、来年はもう少し小さい子達向けのコーナーがあると良いのかなと思いました。

▲ホームカミングデーの様子

竹とんぼ教室 和泉

子ども達に竹とんぼ教室を行う団体「どこ竹 @ 竹とんぼ教室」が、杉並区内の公園、児童館やお祭りなどで開催する教室に、学生が先生役のボランティアとして参加しています。事前に作り方や注意事項を把握しておくための講座を受講した後、子ども達との交流を通して、外で遊ぶことや物づくりをする楽しさを伝える活動を行っています。

日　時　2022 年 7 月 27 日(水)～ 2023 年 3 月 28 日(火)
参　加　15 名
連　携　どこ竹 @ 竹とんぼ教室

日時	会場	参加
2022 年 7 月 27 日(水)	下高井戸児童館	3 名
2022 年 7 月 31 日(日)	荻窪地域区民センター	2 名
2022 年 8 月 9 日(火)	環境活動推進センター	2 名
2022 年 8 月 25 日(木)	環境活動推進センター	2 名
2022 年 8 月 28 日(日)	杉並第六小学校	2 名
2022 年 10 月 12 日(水)	上高井戸児童館	1 名
2022 年 11 月 12 日(土)	向陽スポーツ文化クラブ(西永福)	1 名
2023 年 1 月 15 日(日)	高円寺学園	1 名
2023 年 3 月 28 日(火)	環境活動推進センター	1 名

▲竹とんぼ作りの説明を受けている様子

▲竹とんぼを作っている様子

科学博士になろう1 生田

キャンパス近隣の児童館で土曜日に開催している、一日完結型の科学教室プログラムです。学生が気軽に参加できるよう、また、生田以外のキャンパスの学生であっても参加しやすいよう、実験テーマは予めボランティアセンターが決め、学生が集まるのは当日一日のみです。

2021年度に引き続き、2022年度も、感染拡大防止対策を講じた上で、対面で開催しました。感染対策として、密度制限、都度消毒のほか、学生に事前の誓約書登録や体温記録の共有を求めました。なお、春になるにつれ感染状況が収まっていき密度制限を緩和し開催することができました。

一日完結ということは、当日に初めて顔を合わせる学生同士で教室を開くということです。教室がスムーズに開けるよう、事前にメールなどで実験内容を共有し、コロナ禍のため確実に体調の良い人だけ参加するよう、欠席するときは無断でなく連絡を取り合うよう徹底する等の工夫を行いました。丁寧な事前準備、手間ひま、慎重さ、綿密さが求められました。学生はさまざまな学年や学部で、近年は教職課程を履修している学生が多くなってきています。

日　時	①2022年6月18日(土) ②2023年3月23日(木)
場　所	三田こども文化センター、生田ボランティアセンター
内　容	小学生向け科学教室の開催
参　加	13名
体　験	子ども30名、保護者2名
方　式	小学生①1～2人②2～3人に、明大生1人が寄り添う小グループ方式
テーマ	①かさ袋ロケットの㊙研究～遠くまで「とぶ」を科学する！ …かさ袋に空気を入れてロケットをつくる。先頭をとがらせる、尾翼を付ける、おもりをつけることで原型のまま投げたときより飛ぶ距離がどのように変わるかをたしかめる ②見えない力 ～層ができる液体のふしぎ …水、エタノール、グリセリン、ベビーオイル、ごま油の5種類の液体について、そっと注ぐと比重の違いから5層に、よくかきまぜると親水と疎水の2層になることをたしかめる
連　携	三田こども文化センター

①かさ袋ロケット
- 楽しかったこと：先っぽをとがらせて5m50㎝飛ばせたところ。
- おもりのおもさをちょうせいすることでとぶ速さがかわるのが不思議に思った。

②見えない力
- ボトルを振って色が分かれるのが楽しかった。
- すごく楽しかった！また来て液体の実験をやりたい。何回もやっても飽きないから次もやりたい。
- 水と油の力が大きく違うことがわかった。

農学部1年　真宗 希実

今回私がこのボランティアに参加したのは、小学生の子どもたちに自分で仮説を立てて実験してみることの面白さを教えたかったからです。私が小学生のころ、中学校の模擬授業で科学実験を目の前で行ってもらったことがありました。目の前で起こる不思議な現象に心を奪われたことがきっかけで理科が好きになり、進路を決める重要な経験となったことから、今度は私がそのような機会を提供したいと思い参加を決めました。

実験は、最初に指定された４つの条件で飛行機を作り、それぞれどれくらい飛ぶのか確認した後、それを踏まえて自分の飛行機を作ってみるという内容でした。最初にとばした４つの飛行機はそれぞれどのように飛び方が異なるのか、なぜそのようになるのか、小学３年生の女の子と一緒に試行錯誤して最後に作ったオリジナル飛行機は、今までで一番遠くまで飛ばすことができ、とても嬉しそうでした。

今回、このボランティアに参加して実験中にたくさん「ありがとう」と言われたことや、私の名前も一緒に飛行機に書いてくれたことがとてもうれしく、何よりも実験中の顔がとても真剣で、楽しんでくれていることが直に伝わってきたので私も楽しかったです。対照実験をして、その結果からどのようなことが考えられて、どのようにしたらもっと良い結果が出るのか、自分で考えて試してみるということが実験の面白いところで、実際、私もそこに惹かれて農学部に進学したので、一緒に実験をした女の子にもこの面白さが伝わっていればよいなと思います。

農学部１年　原田 美希

今回このボランティアに参加したきっかけは、科学を通じて子どもたちと交流してみたいと考えたことです。私は小学生の頃、毎週実験教室に参加していました。そこで過ごした時間や得た経験が現在の私自身に繋がっており、農学という自然科学を学ぶ一つの理由にもなっています。その経緯から、この機会が子どもたちにとって同じように科学に興味を持つきっかけとなり、私自身がその一翼を担えたら良いなと思いました。

活動に参加して、まず難しいと感じました。年齢も10歳以上離れて性格も全く違う小学生に対して、どのように接したら一番良いのかが掴めなかったためです。私が担当した小学生はまだ２年生でしたので、どのような説明が分かりやすいのか、科学実験として興味を持ってもらえるかを意識して進めるのに大変苦労しました。しかし、その難しさの中でも、実験を楽しいと感じてくれたようで安心しました。また、傘袋ロケットを飛ばして、ものによって距離に差があることを知ったときには興味深そうにしていたので、面白く感じていれば良いなと感じました。

活動全体を通して、有意義な経験になりました。小学生と大学生というギャップは思った以上に大きく、時間の制約がある中で交流するのは難しいことでした。そのことを知ることができたのも実際にこの活動に参加したからであり、とても勉強になりました。短い時間の科学実験ではありましたが、この経験が記憶として残って良い思い出の一つとなってくれたら嬉しいです。そして、進路など人生の岐路に立った時、自分の思う道を進む上での小さなきっかけや支えとなれたら良いなと思います。

政治経済学部３年　加藤 愛依

私は教職課程を履修し教員を志望しているため、子どもたちと一緒に活動することが将来に活きると考え、今回参加しました。私は高校の教員志望で、今回のこども科学教室の参加児童は小学生が中心のため、対象年齢は異なりましたが、新鮮な気持ちで取り組むことができました。私は小学校低学年を担当しましたが、思ったことや感じたことを友達の意見を遮ってまで伝えようとする様子は、見ていてとても元気をもらえました。学校ではなく参加自由の実験教室ということで、指導ではなくサポートに徹しましたが、可愛いなと思う一方、教員になって学校現場でこのような状況に日々向き合うとなると、児童一人一人と向き合うのはなかなか難しいことを実感しました。

ボランティアに参加したのも今回が初めてで、その内容も理系だったため、文系の私が参加して力になれるのかという不安もありました。しかし事前指導で大学生が実験をしてみる時間も確保されていたため、これといった問題が発生せずにやり遂げることができたので良かったです。

今回の実験教室は私自身も終始楽しく取り組むことができ、また教員を志す者として、普段の授業では得られない感覚に触れることができたので、参加して良かったと思っています。

理工学部１年　N.S.

今回、児童館での科学実験ボランティアに参加してみて最も驚いたのは、子どもたちの想像力です。

私が担当したグループの子どもたち（小２）は比重や極性により層に分かれた液体を見て、「夕陽の落ちる草原。上には雲が浮かんでいる」と考えたり、実際には商品化され得ないようなジュースに喩えたりしました。私は、層になった原因は何かを子どもたちに考察してもらうという教科書的な展開しか予想していませんでしたが、現象の答え合わせはむやみに行わず、子どもたちがその場で感じたことを尊重することにしました。年長者として安全に気を配りながら子どもたちと遊ぶ、というような感覚で１時間楽しむことが出来ました。彼らだけで無く、私にも学んだことが多々あったと思います。

五感を最大限に使って身の回りの現象に感動することは、幼少期のうちにたくさん経験しておくべきだと思いますが、今回のイベントを通して、失われつつあるそうした機会を子どもたちに提供できたと思います。科学に触れることで、自分の目の前に広がる世界の解像度を上げる、という今後の人生で好奇心や感受性を見失わないために大切な経験や、そのような活動の一端に携われたことがうれしいです。

理工学部２年

今回参加したボランティアでは、これまで経験したことのない実験の指導を担当しました。相手に内容や手順を説明する立場になることで、自分が受け手だったときとは異なる視点で物事を考えることができ、貴重な経験をしました。小学生に対してわかりやすい言葉を使って説明すること、聞き取れる速さで話すこと、適切な声量を保つことなど、指導する立場にあることで意識する点が多くありました。また、実験を進行するために必要な道具の把握や手順の理解、緊張感との向き合い方、相手との意思疎通方法など、指導者として必要なスキルを学びました。これらのスキルは将来に役立つことが多く、貴重な経験であったと感じています。

今回私が担当した相手は高学年でしたが、実験内容を速やかに理解し、真面目に実験に取り組んでいました。私語もなく、真剣に実験に向き合ってくれたことに感心しました。また、実験の結果や作製した液体に興味を示してくれたことも嬉しかったです。特にプログラムが予定より早めに終了した際には、「他の色でも作製してみよう」とか「別の液体を混合させてみよう」と前向きな姿勢を示してくれたため、時間いっぱいまで実験を行うことができ、充実した日を過ごすことができました。

この一日で学んだことを、今後の人生においてもいかしていきたいと思います。

農学部２年　白上 愛理

私は過去に１回、科学教室のボランティアに参加したことがありました。そのときの実験は原理が難しく、小学校低学年にもわかるように説明できませんでした。不思議な現象には理由があることを理解し、科学の面白さを味わってもらいたいと思っていました。しかし、結果的には、図工の時間のようになってしまい、思い描いていた実験は実現できませんでした。今回は先述の目標を達成するために参加しました。

今回の実験は、私が原理を理解できており、説明しやすい内容でした。水と油は混ざらないが、水とエタノールは混ざることを子どもたちは疑問に思っていました。原理を説明すると、納得したようで安心しました。子どもたちの疑問は自分にとっては当たり前でした。ゆえに、知らないことに触れて好奇心にあふれている子どもたちの姿がとても印象に残りました。

この科学教室では、子どもたちが身近な科学現象に興味を持ち、科学の面白さを感じられたように見えました。子どもたちの科学に対する向き合い方は私が学ぶべき姿勢であると思いました。子どもの純真な心に触れられた上に、子どもから学ぶことも多いとわかり、良い経験となりました。

▲かさ袋ロケットの㊙研究～遠くまで「とぶ」を科学する！

▲見えない力～層ができる液体のふしぎ

科学博士になろう2 生田

キャンパス近隣の児童館で開催している恒例の科学教室プログラムです。科学博士になろう①が一日完結型であるのに対し、このプログラムは前段となるテーマ創りや企画も学生が行っています。3ヵ月にわたり昼休みにボランティアセンターに集まり、実験テーマを創り、準備を行い、リハーサルを行った上で教室を開く、長期プログラムになります。

日　時　①テーマ創りと準備　2022年10月19日(水)～12月7日(水)
毎週水曜 昼休み　全5回
②リハーサル　2022年12月2日(金)
③教室運営　2022年12月10日(土)

場　所　①②生田ボランティアセンター
③生田ボランティアセンター、三田こども文化センター

内　容　小学生向け科学教室のテーマ創りと開催

参　加　61名　(①②53名、③8名)

体　験　子ども14名、保護者5名

方　式　学年の近い小学生1～2人に明大生1人が寄り添う小グループ方式

テーマ　蒸気でうごくポンポン船
…直径3ミリのアルミパイプをコイル状に巻いて船を作る。船を水上に浮かべ、コイルに水を満たしろうそくで熱すると船が進むことを確かめる。

連　携　三田こども文化センター

子ども達の感想

- 蒸気を利用して走ることがすごいと思った。
- 3年生の理科も楽しみにしていたので理科にもっと興味をもちました。
- 火で動くなんて知らなかった。
- 水に自分が作った船が浮いて嬉しかったし楽しかったです
- 蒸気で色んなことができるんだなと思った

テーマ創り・運営学生の声

農学部1年　N.J.

私は、何か新しい活動をしてみたいと思い今回のボランティアに参加しました。初めて会う人達との企画や試作する時間は、初めはみんなとあまり話すことができず難しいなと感じていましたが時間が経つにつれて話せるようになり最終的にはとても楽しい時間になっていました。

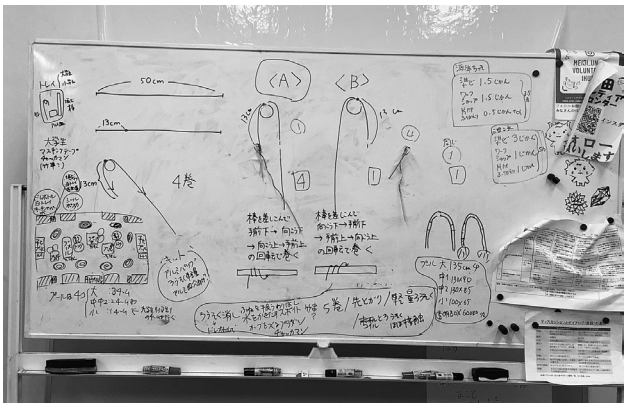
本番では私は男子小学生2人を担当しました。様々な話を小学生とすることができて普段このような経験をできる機会がないので新鮮で楽しかったです。一方で実際にポンポン船を作り始めると小学生は次から次へとやりたくて私が説明する前に一人で先にやってしまい失敗してしまっ

たり私が一人の小学生を見ている間にもう一人の小学生が違うことをやっていたりと小学生との接し方が難しく大変でした。また本番、作り方を説明する上でうまく言葉で表すことができなかったことがあったので本番前にもっと小学生に分かりやすい言葉を使って話をする練習をしておけばよかったと感じました。大変だったこともありましたが最後に小学生２人とも楽しかったと言ってくれたのでとてもうれしかったです。

　このボランティアに参加することによって初めて会う人と話すことに慣れることができたように感じます。このボランティアに参加して楽しいこと難しかったことなどたくさん経験できて全体的にとても有意義な経験ができたと思います。

▲当日へむけて性能チェック

▲本番、いよいよ着水



▲制作方法の共有

科学博士になろう3 生田

キャンパス近隣の児童館で開催している恒例の科学教室プログラムです。この回は学生３名が実験テーマを創り、さらに教室運営ではメンバーの人数を増やして開催しました。

テーマを創った学生は、もともと理科と数学の教職課程を履修しており中高生向け実験授業を組立てる正課にとりくんでいました。そこで創った授業案を小学生向けにアレンジし、実際に試してみる回でもありました。教室が終わった後、内容や組立てについて、学生同士でフィードバックとふりかえりの時間を設け、学生にとっては、自らの意図が実際はどうだったか、こどもの反応を直接みることで、またメンバー間のフィードバックで知ることもできた、楽しいだけでなく学びの多い一日となりました。

日　時　①テーマ創りと準備　2023年１月13日(金)～２月28日(火) 全５回
②教室運営　2023年３月17日(金)

場　所　①生田ボランティアセンター
②生田ボランティアセンター、三田こども文化センター

内　容　小学生向け科学教室のテーマ創りと開催

参　加　18名　(①10名、②８名)

体　験　子ども18名、保護者３名

方　式　学年の近い小学生２～３人に明大生１人が寄り添う小グループ方式

テーマ　科学の力でモノを消そう ～身近なモノを使った体験教室
…屈折率に関する２つの実験を行う
① 屈折率が等しいとモノが消え(水に水)、屈折率が異なると消えず(水にガラスなど)、屈折率が近いとモノが消えかかる(ベビーオイルにガラスなど)実験。
② 水と空気など屈折率が異なることで見えていた絵や文字が消える実験。

連　携　三田こども文化センター

・消臭ビーズが消えて楽しかった
・クロの色でぬったところに文字を書くと文字が読みやすいのがびっくりだった
・実験で楽しかったしまた新しいことが知れた

理工学部２年　佐藤 純大

今回の科学教室に私は、内容を考える段階から参加しました。光の屈折に関する実験を考えましたが、準備段階では、子どもたちにどこまで、現象の説明をするのかという点で意見がまとまりませんでした。子どもたちはものが消えることに対して、驚きを示し、なぜ？と聞いてきます。しかし、そこで、光の進み方が、、、などと説明をしてしまうと、子どもたちの集中力が切れてしまう恐れがあり、今回の実験で、細かい説明は行わないこととなりました。

実際に実験を行うと、実験をどんどん進めてしまう子や、とてもゆっくりていねいに進める子、水をこぼしてしまう子など、子どもたちの元気さや意外性に驚かされるばかりでした。そのため、早く実験が終わってしまった子もいて、時間配分には非常に苦戦しました。科学教室の振り返りの際には、手順の記載があるワークシートが欲しかったという意見や大学生との対戦をする内容も欲しかったなどの意見がありました。

このような小学生を中心とした科学教室は臨機応変に対応する力が求められ、そのような力をつける機会になっているのだと感じました。今回の内容を踏まえ、今後の科学教室に繋げられればと思います。

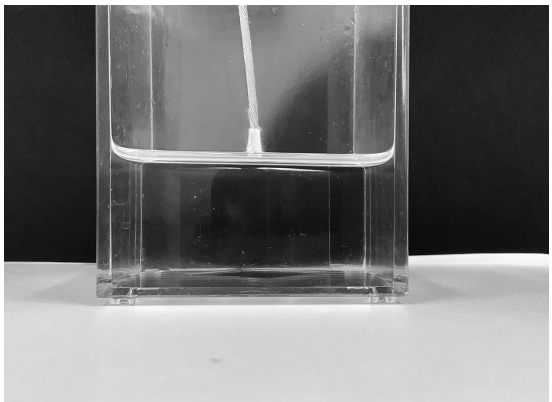
理工学部２年　岩田 海

私はこども科学実験ボランティアに参加し子どもたちと一緒に楽しく実験を行う中で、２つ気づいた点があります。

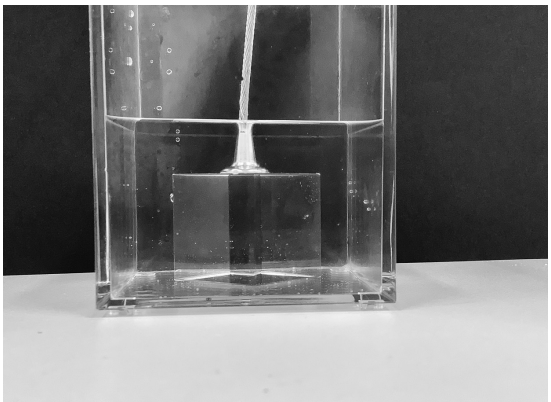
まず子どもが理解でき、かつ飽きない実験を考えることは、難しいことと実感しました。今回は飽きないことを考え体験型の実験を行いました。最初は子どもたちの反応も良く問題ないと思っていました。しかし、子どもたちはどんどん楽しくなり、テンションが上がっていきました。そのため、子どもたちが実験に夢中になってしまい、言うことを聞かなくなる場面がありました。とはいっても原理の説明を多くしても子どもたちの興味を誘うことは出来ません。なので、そのバランスを見つけることが課題であり難しい所だと思いました。

次に子どもたちは、いろいろなものに対して興味を示す力強さが素晴らしいと思いました。何かに取り組む際には、一生懸命取り組み、夢中になっていました。この力強い姿勢に私もかつてこのように何に対しても興味を示していたのかなと思いました。同時に、この頃の姿勢を忘れてしまった私を見て、子どもたちに教えるだけでなく学ぶことも多いと思いました。

私はこども科学ボランティア実験を通じて、子どもたちと過ごす時間で得られるものの多さを知ることが出来ました。



▲ベビーオイルにガラス



▲水にガラス

▲絵が消える様子を観察

かわさきサイエンスチャレンジ 生田

川崎市最大の子ども向け科学の祭典「かわさきサイエンスチャレンジ」が３年ぶりに再開し、生田ボランティアセンターも３年ぶりに企画・主催の実験ブースを出展しました。

感染拡大防止対策を講じ、子どもの人数を減らし、完全予約制での開催となりました。

2022 年度の実験テーマは「層になる液体」　子どもが「楽しい」「ふしぎ」と感じられ、子ども自身が「手を動かして、たしかめられる」教室をめざしました。また、講師役にできるだけ多くの裁量をもたせ、各クールが創意ある多彩な教室になるようめざしました。明大生は、事前に準備会を行い、それぞれが講師役として授業を組み立て、教室当日は講師、講師アシスタント、実験準備など、出展ブースのすべての運営を行いました。

日　時　①準備会　2022 年８月１日(月)
②教室運営 2022 年８月６日(土)・８月７日(日)

場　所　①生田ボランティアセンター
②かながわサイエンスパーク

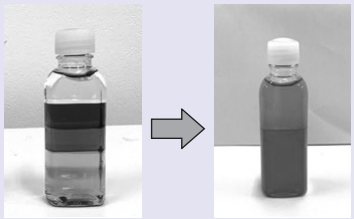
内　容　小学生向け科学教室の開催

参　加　15 名　(①８名　②７名)

体　験　小学生 48 名

方　式　講義形式。明大生１人が講師、明大生２～３人が講師アシスタントとなり、小学生６人に 45 分間の教室をひらく。１日４クール。
講師役がそのクールの授業を組み立てる。講師手づくりのワークシートを配付する。講師や講師アシスタントは固定でなく交代し、明大生全員がどちらの役割も経験する。小学生はひとり１キットの器具で実験を行うことができる。

テーマ　見えない力 ～層になる液体のふしぎ
水、グリセリン、エタノール、ごま油、ベビーオイルの５種類の液体が、比重の違いから５層に分かれ、極性の有無によって２層に分かれることをたしかめる。


▲比重の違いで５層に / 極性の有無で２層に分かれる

経営学部２年　牧野 幹斗

塾講師の仕事を通して子どもたちと交流する楽しさを知っていたので、今回のボランティアにも応募しました。

小学生向けのこのイベントでは、種類の異なる液体を一つの容器に注ぎ、混ざったり分離したりするといった不思議な現象を楽しみました。

事前に、学生メンバーと職員で打ち合わせを行い、実験に向けた準備を行いました。私自身は文系学部なので、実験で確認した現象について、子どもたちにどう説明するのかといった課題もありましたが、理系院生の先輩がサポートしてくださいました。

当日、小学生と保護者の前で説明するというのは、大学生とはいえ緊張しました。しかし、人前で話す度胸をつけるのには、有意義な体験だったように思います。また、学生メンバーと協力してイベントを作り上げる過程は、自然と仲間同士の交流を深めてくれました。つい最近、和泉キャンパスのエスカレーターで、メンバーが声をかけてくれました。何より、無事に実験教室が終わって、楽しいお土産（カラフルな液体にラメを加えたボトル）を手に、嬉しそうな子どもたちの表情が見れた時の喜びは、それまでの苦労を吹き飛ばしてくれました。

農学部１年　香川 春海

この活動に参加しようと考えたきっかけは、子どもたちと関わったり、教えたりする体験をしてみたいと思ったこと、自分の学んできたことを活かせるボランティアを行いたいと思っていたことです。

ボランティアでは、自分たちで活動内容や配布プリントの中身を考えるのが大変でした。しかし、よりわかりやすく伝えるためにはどうしたら良いのか考える過程で、自分自身も科学の現象への理解を深めることができました。また、子どもたちからあまり反応が得られないこともあり、実験が始まる前に声をかけたり、日常生活と科学との繋がりを話すなど、子どもたちの興味を引く話から始められるとよかったと思っています。子どもたちが楽しそうに自分たちが考えた実験を行ってくれることに、喜びと

やりがいを感じました。

活動前は、普段の生活のなかで、小学生に対しどのように伝えたらわかりやすいかということを、なかなか考える機会がありませんでした。しかし、ボランティアをしてみて、物事の伝え方といったコミュニケーション力を伸ばせたと感じました。また、科学の不思議な現象を前に、楽しみながら学んでいる小学生を見て、自分自身も日常の些細な現象を当たり前だと考えずに、疑問を持って学んで行こうと感じました。

▲準備会の様子

▲当日準備の様子

▲教室運営の様子

液体窒素実験 生田

液体窒素を用いた 2 種類の実験を、オープンキャンパスと学園祭にて開催する恒例イベントです。3 年ぶりの開催でした。

テーブルごとの動線の切り分け、安全上の注意事項を掲示し視覚に訴えるなどの、コロナ禍以前の知見を継続し、今回からあらたにチーム制を導入しました。感染拡大防止対策として安全メガネの消毒作業が加わりましたが、明大生ボランティアはチーム内で分担交代しながら、安全でスムーズな運営を行い、学生相互のコミュニケーションも図ることができました。

日　時　① 2022 年 8 月 7 日(日)〈オープンキャンパス〉
② 2022 年 10 月 29 日(土)・30 日(日)〈生明祭〉

場　所　生田キャンパス 屋外ブース

内　容　「極低温・超伝導の世界を体験しよう」
3 テーブルに分かれて実験を行う：
A 極低温の実験…液体窒素で {バラ、ほうれん草、酸素、二酸化炭素、空気} を冷却する
B 極低温の実験…液体窒素で {ゴムボール、バナナ、ピンポン球、プチトマト} を冷却する
C 超伝導の実験…中央リニアにも使用される超伝導体を使い、磁気浮上やピン留め効果の、不思議な感触を体験する

参　加　28 名　(① 17 名　② 11 名)

体　験　約 500 人(①高校生　②一般来場者 多くはファミリー層)

方　式　屋外ブースに、原理説明ポスターを掲示する。明大生ボランティアは 3 つのチームに分かれ、チームごとに各テーブルの実験を運営する。来場者にデモ実験を見せたり、安全な範囲で来場者が実験を体験できるようサポートし、安全メガネの消毒を行い、待ちの時間に来場者に話しかけたり相談にのったりする。各チームは交代してすべてのテーブルの実験ボランティアを経験する。

発案と引率　安井 幸夫(理工学部教授)

待　機　川﨑 章司(理工学部准教授)、瀬戸 義哉(農学部准教授)、加藤 恵輔(理工学部准教授)

新しい工夫　＊ボランティアのチーム制の導入
＊安全メガネの消毒は、1 回ごとに行う。体験終了後、体験者に水槽内のエタノールに浸してもらい、しばらく経った後にボランティアが引き上げ乾燥させる。

理工学部 2 年　岩田 海 (①に参加)

液体窒素の実験ボランティアでは、行列になって待っている人に実験の注意事項を伝えながら大学や受験勉強のことを話す時間がありました。高校の宿題で来た人、大学に興味があって来た人など、話をした中にはいろいろな方がいました。その中でも私は高 3 の受験勉強の合間に来てくれた人が印象に残りました。彼は受験勉強の息抜きとして来たそうですが、やはり夏の時期というのもあり不安を抱えているようでした。参考書や勉強時間の相談に乗っていると、打ち解けてきたのか少し明るくなってくれた気がしました。

当初、私は実験を通して来てくれた方に楽しい時間を過ごしてもらえたらなと思っていましたが、会話によって楽しい時間を過ごしてもらえて嬉しく思いました。少しでも私の経験を糧として彼には高い壁を乗り越えて欲しいと思いました。超伝導によるマイスナー効果については大学で学んでおり、理論や事象としては知っていましたが、実際にその現象を見たことはありませんでした。今回の実験ボランティアでは、頭で知っていることを実際に目の前の事象として観察できたこと、来てくれた方にどうしてこのような現象が起こっているのかを説明できた事がとても面白かったです。このような体験が実験（ボランティア）の醍醐味だと思いました。

理工学部 2 年 (①に参加)

私は初めて、液体窒素を扱いました。容器に入っているときは、水みたいな液体でしたが、外に出し

た瞬間に、一瞬にして、気体に変化！ドライアイスのような白い煙が出てきて、初めての体験にビックリ！さらには、液体窒素に、野菜やカラーボール、バナナを入れると驚きの変化が、、、個人的に、春学期に大学の講義で学習した超電導の現象も、実際に目で見ることが出来ました。

液体窒素で、特定の金属を冷やすと宙に浮くなんて、、、

専門的な内容ではありますが、視覚的にマイスナー効果について学べたことや、液体窒素の温度が-196℃であることを実際に体験できた良い機会となりました。

どれも、物理に詳しい人でも、そうでない人でも、遊び感覚で楽しめる内容でした。

物理の現象が好きな人や、また、それらを通じて、様々な人とつながりたい人におすすめできるボランティアです。

理工学部 3 年　木下 智貴（②に参加）

このたびは実験ボランティアに参加させて頂き誠にありがとうございました。生明祭は 3 年ぶりの開催となったため 3 年生にとっては初めての生明祭となりました。

今回こちらに応募させて頂いた理由は、大学の文化祭に何かしらの形で関わりたいと考えたからです。また、未だ体験していないことをしてみたいと思ったからです。

参加する前は上手くお手伝いできるか不安ではありましたが当日多くの来場者の方に液体窒素を用いた不思議な現象を体験して頂くことができて良かったです。実験ボランティアは物理学科の方が多かったですが一部文系キャンパスの方も参加されていたのが意外でした。実験では小さなお子さまとその保護者の方が多く参加されていた印象を受けました。お子さまが親御さまと一緒に実験され、バラが凍る様子や磁石が浮く様子をご覧になられ、どのような仕組みで現象が起きているのかについて深く興味を示されていたことが印象的でした。やはり、超伝導体が宙に浮く様子は何度見ても不思議だと思います。

私は今までは「実験を提供する」側ではなく「実験をする」側でありましたので、今回のように実験を提供させて頂く機会は非常に新鮮に感じました。来年度も生明祭やこのような催し物が例年通りに開催できるようになることを願っております。

文学部 3 年　中村 華蓮（②に参加）

私がこのボランティアに参加した理由は、普段はできないような新鮮な体験をしてみたいと思ったからです。私自身が文系学部で科学実験に関わる機会はほとんどなく、生田キャンパスに行くこともないため、単純に行ってみたいという好奇心もあって参加しました。参加する前は文系の自分に液体窒素の実験の仕組みを理解してきちんと扱えるのかどうか自信がなく、理系の方の足を引っ張らないか不安がありました。実際には本番の前に物理学科の先生の指導があったことで問題なくできた上に、行っていく中でもっと円滑にできる方法をやりながら模索していきました。背の小さい子どもたちがより安全にできるように液体窒素との距離を取れるような配慮をすることや、実験の前に液体窒素を扱う上での注意点を説明することの重要性を感じました。そして自分が考えているよりも詳しく説明しないと勘違いが生じて危険が高まるため、相手に伝わるような説明が必要になると強く思いました。実験を安全に終え、終了後は生明祭も楽しむことができたので、液体窒素の実験と合わせて良い思い出になりました。そして自分が普段全く関わらない領域の実験やキャンパスでこの経験ができたことは自分自身にとって有意義なものでした。

▲気体を液体窒素で冷やす

▲来場者が体験する様子

小学校でのプログラミング授業のサポート 生田

近隣小学校のプログラミング授業で明大生がサポートボランティアを行いました。

理工学部と川崎市立三田小学校の連携事業としてプログラミング学習の出前授業が行われ、三田小学校の６年生と５年生に、理工学部情報科学科の井口幸洋教授が Scratch を使ったアニメーションの動かし方や簡単なゲームの作り方を教え、理工学部の学生 10 名と農学部の学生５名がボランティアで児童のサポートをしました。感染拡大防止対策として教室に入る大学生の数を一度に５人までに制限し、午前または午後に分かれてサポートを行いました。

児童たちは自分のタブレットの中のスプライト（キャラクター）が動いたり鳴いたりすると、歓声をあげたり笑ったりして好奇心いっぱいな様子で取り組んでいました。一方で、Scratch に初めて触れる児童も多く、複数のスプライトを動かすためにそれぞれにコードを書くという作業に戸惑ったり、ゲームを作る時に使う変数を作ることが難しい児童もいました。

途中でつまずく児童がいると学生たちは隣に寄り添い、丁寧に説明し理解を促していました。また、児童がうっかりスプライトごとコードを消してしまっても、学生が瞬く間に元通りに復活させて、頼りになる存在となっていました。

日　時	①勉強会　2022 年８月２日(火)・８月５日(金) ②授業　2022 年９月２日(金)・９月８日(木) ③ふりかえり会　2022 年 10 月７日(金)
場　所	①生田キャンパス 教室 ②川崎市立三田小学校 ③生田キャンパス 教室
内　容	小学校の総合的な学習の時間「プログラミング学習」授業にて児童のサポートを行う。
参　加	40 名(① 16 名　② 15 名　③９名)
体　験	小学生　約 200 名
引　率	井口 幸洋(理工学部教授)

小学生の声

- 井口先生たちと一緒に考えてプログラミングを使って失敗もあっておもしろかった
- クラスで先生に教えてもらったゲームを応用してゲームを作っている人がいます。また教えてほしいです。
- よく分からなかったパーツの使い方がわかりクラブ活動で役立てたいなと思います。左側のパーツ以外にも他に追加できることも知れたので作ってみたかったBGM つくりをやってみようと思います。

理工学部３年　K

参加者の声

私はこれまでコロナの影響もあり大学生らしいことをあまりしてきておらず、何かこの夏は大学生だからこそできることをしたいと考えていました。そんななか今回のボランティアの募集を見て、プログラミングを教えるのは面白そう、そして給食を食べられるのはいいなと感じ応募しました。一番初めに驚いたことは参加していたほかの大学生でした。大学一年生が多く、一年生のうちからこんなに積極的にボランティアに参加する気持ちを持っていてすごいと感じました。

私がこのボランティアをしている中で一番うれしかったことは、周りより遅れてしまい、投げやりになってしまった生徒がいたのですが、「一緒にやろう」と声をかけ無事最後まで完成させることができたことです。完成した時にはその生徒はとても喜んでくれていて、授業が終わった時にはサポートに入ってくださっていた校長先生からも感謝の言葉をいただき、とても嬉しかったです。

このボランティアが終わった後、小学生達からのお礼の色紙に、自主的にゲームを作ってみた、と感想があり、子ども達によいきっかけを与えることができたのではないかと感じました。これからの時間があるときにはなりますが、ボランティアに参加して、子ども達に私たちから、良いきっかけを与えられたらいいなと感じています。

▲勉強会のようす

▲授業中のようす

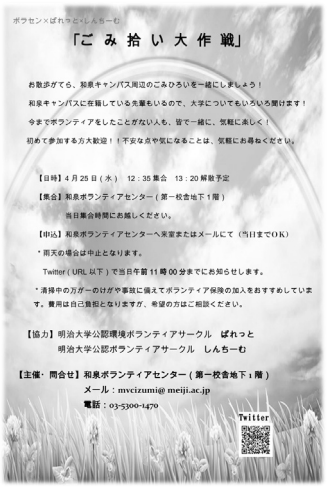
環　境

ごみ拾い大作戦！ 和泉

明大生の環境問題への啓発活動を主な目的として、お昼休みに和泉キャンパス周辺の清掃活動を実施しました。

公認ボランティアサークルのメンバーと共同で４月に開催したことによって、清掃活動だけでなく新入生とサークルメンバーのコミュニケーションの場をつくる良い機会になりました。また、和泉キャンパス周辺の地域社会の一員として自覚を持ち、身近なことから社会貢献できると知る機会になったことと思います。

日　時	2022 年 4 月 25 日(月) お昼休み
場　所	和泉キャンパス周辺
内　容	公認ボランティアサークル「ぱれっと」、「しんちーむ」、和泉ボランティアセンターの共同開催
参　加	22 名



ボラセン×ぱれっと×しんちーむ

「ご み 拾 い 大 作 戦」

お散歩がてら、和泉キャンパス周辺のごみひろいを一緒にしましょう！
和泉キャンパスに在籍している先輩もいるので、大学についてもいろいろ聞けます！
今までボランティアをしたことがない人も、皆で一緒に、気軽に楽しく！
初めて参加する方大歓迎！！不安な点や気になることは、気軽にお尋ねください。

【日時】４月 25 日（水）　12：35 集合　13：20 解散予定
【集合】和泉ボランティアセンター（第一校舎地下１階）
当日集合時間にお越しください。
【申込】和泉ボランティアセンターへ来室またはメールにて（当日までOK）
＊雨天の場合は中止となります。
Twitter（URL 以下）で当日午前 11 時 00 分までにお知らせします。
＊清掃中の万が一のけがや事故に備えてボランティア保険の加入をおすすめしています。費用は自己負担となりますが、希望の方はご相談ください。

【協力】明治大学公認環境ボランティアサークル　ぱれっと
明治大学公認ボランティアサークル　しんちーむ

【主催・問合せ】和泉ボランティアセンター（第一校舎地下１階）
メール：mvcizumi@ meiji.ac.jp
電話：03-5300-1470

Twitter

▲募集チラシ

▲ごみ拾い活動の様子

脱炭素ワールドカフェ 生田

“環境配慮型のライフスタイル（脱炭素）をジブンゴトとして考えていくにはどうしたらよいか”についてアイデア創出を行う、ワールドカフェ方式の対話イベントに明大生が参画しました。

環境問題に関心の高い明大生が、授業とかぶらず、感染対策をよく理解した上で誓約書を提出、体調管理をし、無断欠席なしに参加できるよう、できるかぎり工夫をこらした募集や設計を行いました。

対話カフェ当日は、川崎市に縁のある企業、行政、NPO、住民が集まる中、明大生がそれぞれに貴重な意見を話し、大変好評を博しました。

日　時　2022 年 5 月 27 日(金) 14：00 ～ 17：00

場　所　株式会社富士通ゼネラル本社

内　容　脱炭素×健康がテーマのワールドカフェ方式の対話イベント

☆カフェのテーマ：

環境配慮型のライフスタイルへ行動を変容していくために、企業や個人は何から始めれば良いのでしょうか？“健康”は、誰もが関心がありジブンゴトとして考えていますが、“環境配慮型のライフスタイル”（脱炭素）も同じようにジブンゴトとして考えていくにはどうしたらよいのでしょうか？将来にわたって笑顔あふれる街づくりに向け、カフェの様な自由な雰囲気の中、”ワールドカフェ”を楽しみます！

☆ワールドカフェ…

カフェでくつろいでいるようなリラックスした雰囲気のもと行われる対話方式の一つ。1995 年サンフランシスコでファニータ・ブラウンとデイヴィッド・アイザックスにより偶発的に生まれた。

参　加　明大生 21 名、川崎市に縁のある企業、行政、NPO、住民、他大生

主　催　川崎市

参加者の声

- 普段他学部の学生や社会人の方とお話しすることがなかなかないので、脱炭素に関してはもちろん、ちょっとした雑談もできたのが嬉しかった。学生は皆コミュニケーション能力が高く、話し方とか動き方とかたくさん勉強になった。自分はうまく立ち回れなかった部分があったので反省するとともに、次に活かしていきたい。
- 共通点のない色んな世代や立場の人と話す機会はあまり今までなかったので、とても楽しかった。少し緊張した。
- 富士通ゼネラルの方をはじめ、多くの企業が明治大学などの大学生とワークショップをやりたいとおっしゃっていたのが印象的だった。参加をしたいと思う学生を増やすために活動内容などを今回のように細かく書いてくれると参加したいと考える学生が増えるかなと思う。
- 様々な世代がグループにいて話し合うことができ、年上の方が話しやすい環境を作ってくれたことがありがたいと思った。グループの中で明大生が 2 人だったが、私たちばかり話したりしてしまっていいのか心配になるほどだった。コーヒーやお菓子まで用意してくださったので、至れり尽くせりだと感じた。何かのテーマを通じて話すことで世代間交流がより容易なものになると身をもって感じたイベントだった。
- 初対面の人とでも話をしてみるととても面白かった！日常でも気軽に会話出来る社会だと嬉しいと思った。
- ディスカッションすることが中々なかったので、貴重な経験をさせていただきうれしかった。
- 脱炭素というのは企業などの技術開発によってできると思っていたので、大切なのは地域の交流という意外な着地点だったが、とても納得でき、学びの多い 1 日だったなと感じた。
- 参加してよかった。ワールドカフェの良い点・問題点が理解できた。
- 世代の広がり（20 ～ 60 歳代）があったことが良かった。
- ワークショップを大学や企業、NPO、自治体など幅広い職種と年代で行ったことで若者だけの意見でなく、多くの市民向けの住みやすい川崎市を考えるきっかけになった。
- いろんな年代、立場の人と脱炭素と健康についてお話しできて良い経験になった。

▲話し合いの様子

▲立場・年代をこえて考えをまとめる

▲発表の様子

ホタル観察会 生田

大学近隣の生田緑地でゲンジボタル観察会を開催しました。2017 年度以来の開催になります。

学生はホタルに関するレクチャーやルール説明を受けた後、暗闇の中に浮かぶゲンジボタルの光を味わいながら、地域の自然について、生物多様性について、またホタルガイドボランティアなど地域の方々についても学びを深めました。

感染拡大防止対策として定員を設け 20 名とし、学内ポータルサイトにて先着順で募集したところ、募集開始 10 分で満員となり、全キャンパスから学生があつまりました。相変わらず学生人気の高いプロジェクトとなっています。

日　時　2022 年 6 月 24 日(金) 19：30 ～ 21：30

場　所　生田緑地

内　容　観察エリア外で、ホタルについてのミニレクチャー、生きものを守るためのルール説明(携帯・カメラ・ライト・虫よけスプレーの使用禁止、ホタルの捕獲禁止など)。
観察エリア内で、ゲンジボタルの観察。

参　加　15 名

講　師　倉本 宣(農学部教授)

▲ホタルについてのミニレクチャー
(観察エリア内の写真はありません)

ハロー！ Agriculture! 生田

大学農場で、明大生が試行錯誤しながら手づくり野菜を育てたり収穫したりするプログラムです。コロナ禍で中止が続いていましたが、3年ぶりに再開し、2022年度は〈収穫編〉が開催されました。

農場の先生から教授をうけながら野菜を収穫する体験を味わいました。

真夏に最寄り駅から農場まで徒歩20分かかり、農場内は別の靴を各自持参するなど、学生にとっては硬派の体験プログラムですが、ニーズと満足度が高く、例年20人弱の参加があります。今回は130人もの応募があり、抽選を行い80人まで受け入れました。

感染拡大防止対策として、応募学生に誓約書の登録と体調管理を依頼し、料理はせずに収穫のみでお昼で終了するプログラムとして設計しました。当日は陽性、濃厚接触者、体調不良等で10数名の欠席がありましたが、全員連絡があり、混乱はなく、無断欠席者はいませんでした。熱中症対策として頻繁な水分補給をうながし、必要に応じ休憩を取った後帰宅できるよう、終了後に大教室を開放しました。

全学部から参加があり、農学部以外の学生が非常に意欲的だったことが印象的でした。他学部の学生は正課での農場実習の機会がないそうです。それぞれの野菜の特徴、収穫に適した野菜の選び方、収穫の仕方などの先生によるレクチャーに、学生は熱心に聞き入っていました。

日　時	2022年7月31日(日) 9：00～12：00〈収穫編〉
場　所	明治大学黒川農場
参　加	54名
野菜の種類	ナス、ピーマン、オクラ、トマト
講　師	伊藤 善一(農学部講師、副センター長)

文学部1年　東風谷 菜々

長閑で緑豊かな黒川の町に馴染む、木を基調とした校舎が美しく、温かく、癒されました。伊藤先生が収穫や農場の施設にまつわることだけでなく自然や里山のことなども語ってくださいましたゆえ大変勉強になりました。文理問わずさまざまな学部・学年の学生で賑わっており、収穫とは程遠い文学部の私にも、このような機会を持たせていただけたことに感謝しております。持ち帰ったお野菜も新鮮で非常に美味しかったです。機会がありましたらまた黒川農場へ伺いたいです。

▲収穫のようす

▲先生によるレクチャー

清掃活動 中野

ボランティア活動の第一歩として気軽に参加できる清掃活動には、継続して参加してくれる学生も増えてきました。今年もさまざまなキャンパスや学部の学生が交流しながら清掃活動を行いました。留学生も定期的に参加し、他の人が見つけないような場所にゴミが隠れているのを上手に見つけてくれました。

学生からは、中野キャンパスへ向かう際に見た歩道などは一見ごみが見当たらずきれいに見えたけれど、実際に清掃活動を行うと、ごみが次々と発見されて袋一杯になりとても驚いたとの報告がありました。清掃活動へ参加することで、街への視点や考えが変わることを体感したようです。

清掃活動が街をきれいに保つ啓発となるよう、これからも続けて活動を行っていく予定です。

日　時	2022 年 5 月 18 日(水) 30 日(月)、6 月 14 日(火)（雨天のため中止)30 日(木)春学期 2022 年 10 月 6 日(木)（雨天のため中止)18 日(火)、11 月 8 日(火) 21 日(月)、12 月 2 日(金) 19 日(月)秋学期
場　所	中野キャンパス周辺・中野駅前など
参　加	32 名

国際日本学部 3 年　松澤 涼

以前までと変わらず、中野の街には特に煙草の吸殻を中心とした多くのごみが落ちていました。二週間に一度清掃を行っていて、それでもまだ拾うごみが多いということは、それだけごみを路上に捨てている人も多いということです。僕たちが活動する意義が見えてくる気がします。

今回も他のキャンパスから来てくださった方が何人もいて、交流しながら活動できたことを嬉しく思います。いつもは和泉キャンパスからの参加者が多いイメージがありましたが、今回は駿河台キャンパスから参加してくださる方が多く、話していて新鮮に感じました。

経営学研究科 2 年　王 安吉

今回初めて学内のボランティア活動に参加しました。

今まで毎日通っていた街なのですが、異なる視点で再発見することができました。参加した仲間達とお話したり、鬼ごっこしているごみを探したり、みんなの街を綺麗にすることができて、大変有意義な体験でした。

今後 SDGs が進む中、環境保護を発展させるため、人まかせではなく自身でも参加することが大切だと思うので、社会規範を守りながら、またボランティアに参加したいと考えています。

一日だけの体験でしたが、初めの一歩を踏み出すための貴重な機会となりました。普段接することの少ない他学部の方々との触れ合いも楽しかったです。ありがとうございました。

政治経済学部 4 年

私は今回そこまで深慮の上で参加したわけではなく、4 年生になったにもかかわらずキャンパス周辺地域や大学に何か貢献したことがなかったと思ったため、空いた時間で可能な活動に参加することにしました。やはりたばこの吸い殻が多く、路上喫煙は未だ盛んにおこなわれているのかと考えてしまいました。

私はなぜか乾電池やライターを複数拾いましたが、こういったものは自然への害になりえるかもしれず、少し危なさも感じました。

また地域の方らしき人にお声がけをいただき少し会話をしましたが、その方の親族が明治大学に在籍中とのことで親近感を得ました。しかしながら通行人の邪魔にならないように行動する、あるいは他の方が取りこぼしたごみを回収することを考えて活動を行うと、どうしても他の方々の会話に交じる機会を失ってしまっていたことは残念でした。ともあれ機会があれば、また参加させていただきたいと思います。

国際日本学部４年　池田 麻衣子

大学に入学した頃から中野ボランティアセンターを通じて様々なボランティアに参加してきましたが、途中新型コロナウイルスの影響でブランクがあったものの、この清掃活動が唯一４年間継続してきたものでした。１番初めは何となく参加してみたこの活動でしたが、それ以来定期的に参加を続け様々な気付きや出会いがあり、振り返ると私の大学生活においてたくさんの学びが得られた場だったと感じています。

何かはっきりとした目的がある活動ではありませんが、毎回どんな人が集まってくるのだろうとワクワクし、活動中には地域の方から温かい言葉をいただき、４年間通い続けた中野のまちを綺麗にするというのは、私にとって貴重な時間であり経験でした。また活動後には毎回温かい気持ちになることができ、この活動がとても好きでした。

清掃活動はただごみを拾い、まちを綺麗にするだけではない、やった人にしか分からない良さがあると思います。これからもこの素敵な活動が後輩に引き継がれていったら嬉しいです。

▲６月 30 日実施の様子

▲11 月８日実施の様子

３大学オンライン講座 駿河台 和泉 生田 中野
「琵琶湖ツーリズム！～大学生で考える環境ボランティアの未来2022～」（関西大学・法政大学・明治大学３大学連携事業）

関西大学ボランティアセンターが企画している「琵琶湖の環境保全活動」について、2022 年度は３大学連携オンライン講座として開催され、当大学の学生と職員が Zoom で参加しました。

日　時　2022 年 9 月 14 日（水）13：30 ～ 15：30

場所・方法　関西大学内の教室での対面と Zoom のハイブリット

内　容
- 琵琶湖の環境保全：特に侵略的外来生物への対策
- 駆除活動について
- 小グループでの意見交換会

参　加　明大生 2 名、明大職員 1 名（他大学生・他大職員：対面・オンライン合計 30 名）

主　催　関西大学ボランティアセンター

目　的　専門家の講義により、琵琶湖の環境保全、特定外来生物、および、駆除活動の概要・心構えなどについて学ぶとともに、３大学学生同士の交流の場を持つことにより，今後の３大学連携活動の一助とする。

講　師　滋賀県立琵琶湖博物館 特別研究員/滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課 副主幹 中井 克樹 氏

【参加者事後アンケートから抜粋】

水草を中心に、琵琶湖とその周辺の侵略的外来種の増加のグラフ、問題点、駆除方法などについて幅広くお話を聴けて勉強になりました。特に、外来の魚について釣り業界と環境保護団体で意見が対立したということに驚きました。侵略的外来種でも、立場が異なれば必要と感じる人がいることが興味深かったです。

▲ポスター（関西大学ボランティアセンター提供）
※個人への配慮のため、一部ポスターの画像を加工しています。

学生の自主的な活動の支援

環　境

善福寺公園一斉清掃（Tree）

日　時　春学期　2022 年　5 月 29 日(日) 13：00 ～ 15：00
秋学期　2022 年 11 月 27 日(日) 14：00 ～ 16：00

場　所　善福寺公園(杉並区)

内　容　公園のサービスセンターの方から清掃のための用具を借り、6 班に分かれて清掃活動を行う。

参　加　春学期　29 名
秋学期　46 名

センターの役割　相談(駿河台)

商学部 4 年　佐々木 和真（春学期に参加）

チームの皆と協力をしながらの清掃活動はとても有意義なものでした。夏に差し掛かる時期ではありましたが、多くの落ち葉が落ちているという状況でした。公園のサービスセンターの方にご指導頂き、みんなの協力もあり、軽トラック一台分のごみが集まりました。

また、公園の景観は見違えるように変わり、達成感を得ることができました。サークルのメンバーや公園の方々など、協力してくれる方々への感謝の気持ちを忘れずに今後のボランティア活動を行っていきたいと思います。

商学部 4 年　長谷川 大地（秋学期に参加）

善福寺公園内のくぬぎ広場の落ち葉を全員で役割を分担して集めました。集めた落ち葉を軽トラックで善福寺公園内のサービスセンターの付近の腐葉土堆積場に運んでもらい、腐葉土堆積場では Tree のメンバー 3 人で大袋から落ち葉を出しました。クヌギ広場ではメンバー同士がコミュニケーションをとりながら楽しく活動していました。みんなの協力もあり、予定していた 16 時よりも 20 分も早く終わることができました。活動終了時には善福寺公園サービスセンター長から、お褒めのお言葉を頂くことができました。来年以降も善福寺公園でのボランティアを継続していきたいと思います。

▲善福寺公園清掃の様子（春学期）

▲善福寺公園清掃の様子（秋学期）

援農ボランティア(Tree)

日　時	2022 年 9 月 25 日(日)
場　所	山内ぶどう園(調布市)
内　容	畑の片づけ、草取り
参　加	20 名
センターの役割	相談(駿河台)

法学部 3 年　大野 伊織

自分を含めてこれまで農業にあまり関わったことのないメンバーもいたため、山内ぶどう園様の活動の一助となることが出来るか不安でしたが、全員が取り組むことが出来る作業内容であり、しっかり貢献することが出来たと思います。特に草取りやオクラの片付けなどでは作業前と作業後で畑の光景を大きく変えることが出来、より達成感を感じることが出来ました。また、メンバーだけでなく、山内ぶどう園のお子様とも交流をしながら活動を行うことで、より楽しくボランティア活動に参加することが出来ました。

また、援農ボランティアを通して、農業を行うことの大変さを、身をもって知ることが出来ました。草むしり一つをとっても体力的にも精神的にも大変な作業であり、そのことから普段何気なく食べている食材であっても、これからはより感謝の気持ちを持って食べていきたいと思いました。また、台風 14 号の影響を受けたというお話を聞き、自然災害の脅威を再認識し、他にも自然災害などで困っている農園の方はたくさんいらっしゃると思ったので、そのような方々の支援を続けていきたいと感じました。

▲援農ボランティアの様子

Tree は、駿河台ボランティアセンター直属の学生ボランティア団体です。現在 209 名（2023 年 7 月時点）の学生が部員として所属しています。主な活動として、「エコキャップ運動（※）」、「ホームカミングデー」への協力、「明大祭」への出店を行っています。この他にも、清掃活動、駿河台キャンパス近郊の地域で行われる行事の運営補助等を行い、地域社会に貢献する取り組みを積極的に行っています。

※駿河台キャンパス内にペットボトルキャップの回収箱を設置し、回収を行う。回収したペットボトルキャップは、民間事業者に売却し、その売り上げを NPO 団体に寄付することで世界の子どもたちにワクチンが提供される。

MIW 祭り(Tree)

日　時　① 2022 年 9 月 30 日(金)
② 10 月 1 日(土)

場　所　千代田区役所

内　容　エコキャップ回収および Tree の活動紹介

参　加　① 9 月 30 日　5 名
② 10 月 1 日　15 名

センターの役割　連絡調整、相談(駿河台)

法学部 4 年　吉村 野ばら

今回の MIW 祭りに向けて、6 月からブース準備や動画作成を行いました。そのため、当日無事に終わったことに非常に安心しました。MIW 祭りのテーマは「男女共同参画の多様性について考える」でした。川柳コンテストも行われ、男女について考える良い機会でした。これからも自分自身、学びを深めていきたいなと思います。

私達 Tree は毎年恒例でエコキャップ回収をさせていただいているので、1 年間キャップを貯めてくださっている方々から多くのキャップを回収することができました。2 日間の参加で 45 リットルごみ袋 2 袋がパンパンになる量でした。来年は、エコキャップ以外にも何か遊べる企画を用意するとさらにブースに来てくださる方々も増えて良いのではないかと思います。

また、他のブースを見て、色々な方々と交流しました。専修大学が行っていた AED 体験や、スマイル研究会の手相占いなどに参加して非常に楽しい時間を過ごすことができました。2 日目は、法政大学が行なっていたボッチャへ参加。初ボッチャでしたが、非常に楽しく過ごすことができました。他にもさくらベーカリーで売られていたみゅうじろうパンを食べて、MIW 祭りを満喫することができました。

▲ MIW 祭りの様子

▲たくさんのキャップが集まりました！

明大祭(Tree)

日　時　2022年10月29日(土)
～10月31日(月)

場　所　和泉キャンパス

内　容　模擬店・ゲーム企画の運営

参　加　69名

センターの役割　相談(駿河台)

▲明大祭の様子

政治経済学部3年　那須 総一郎

模擬店では唐揚げ・飲み物の販売と教室企画ではボーリングゲームを行いました。唐揚げが想定以上に売れ行きが良く、何度も追加で材料を買い出しに行ったことが印象的でした。声かけも工夫したことで多くの方に唐揚げを購入してもらうことが出来ました。教室企画のボーリングゲームでは当初盛り上がるか心配な面もありましたが、豪華な景品を用意したため来場者の方達が本気で参加してくれとても盛り上がったと思います。

コロナ禍もあり今年初めて文化祭に参加する人も多かったと思いますが、準備から片付けまで皆で協力し、特に大きなトラブルもなく無事に文化祭を終えることが出来ました。来場された高校生、近所の方々やOB・OGの方との交流を通じて明治大学が多くの方達に支えられていることを実感しました。今後も私達を支えてくれている方達への感謝を忘れず学生生活を送っていければと思います。

千代田区一斉清掃(Tree)

日　時　2022年11月7日(月)

場　所　駿河台キャンパス周辺及びJR御茶ノ水駅周辺

内　容　2班に分かれてキャンパス周辺と、御茶ノ水駅周辺の路上の清掃をそれぞれ実施。

参　加　11名

センターの役割　千代田区との連絡調整、相談(駿河台)

法学部3年　川上 翔太郎

今回の清掃活動に参加したメンバーは、殆どがこれまで一度も街の清掃活動に参加したことがなかったため、街にどれほどのごみが落ちているのかどうか、実際に街に出て活動を始めるまで想像できていなかった。だが、いざ清掃を始めてみると、皆が口々に言うように、想像よりも遥かにごみの量は少なく、大きな労力をかけずとも十分な清掃活動を実施できた。このことから、多くの若者がいる御茶ノ水・神保町エリアが、普段からこれほど美しい景観を保たれているのは、やはり常日頃清掃活動に従事している方々の存在があってこそだと気づいた。しかし、初めて清掃活動を行ったメンバー達に聞くと、多くがそもそもこのような活動が継続して行われてきたことを知らなかったという。確かに私も敢えてこのような活動に目を向けたことはなかった。今回の活動は、そんな自分達にとって、決して多くの称賛を貰えるでもないのに、まさに縁の下の力持ちとして人々の社会生活を支えている人々の存在を知り、彼らへの心からの尊敬と感謝の念を感じることができる素晴らしい機会になった。またこれからは、より一層の環境意識を持ち、自ら率先して街を保全する取り組みに参加していきたいと思う。

エコキャップ回収(Tree)

キャンパス内に設置された回収ボックスでペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後資源として売却され、売り上げを「認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて発展途上国の子ども達のワクチン接種のために寄付しています。

日　時	2022 年 4 月 21 日(木)、6 月 24 日(金)、10 月 7 日(金)
場　所	駿河台キャンパス
内　容	リバティタワー及びアカデミーコモンを中心とした駿河台キャンパスにおけるキャップの回収、並びに回収したキャップの部室への運搬。
参　加	42 名
センターの役割	相談、当日対応及び立会、備品の提供(駿河台)

政治経済学部 4 年

久々のエコキャップ回収であったが、場所によっては回収箱いっぱいにキャップが入っている箇所があった。多くの学生や教職員が協力してくれておりありがたいと感じたとともに、責任をもって回収し、業者に引き渡す必要があると痛感した。対面授業が再開され、今後エコキャップのボックスがすぐに満杯になることが予測される。そのため、適宜回収が必要であると感じた。

法学部 4 年　竹内 真帆

駿河台キャンパス内のエコキャップ回収を行いました。今回は、新入部員を募集してから初めてのエコキャップ回収だったため、予想よりも多くの方に参加していただきました。それぞれ 4、5 人のグループに分かれ、学校内を回りました。すべての場所を回収しに行けたので、大変多くのエコキャップが集まりました。6 月にしては気温が高く、体調にも気を付けながらの回収になりましたが、グループの部員同士でも声をかけながら行えたため、交流も深めることができたのではないかと思います。

▲エコキャップ回収の様子

▲回収したキャップは業者引き取り用の袋に詰め替えます

エコキャップ回収活動（公認ボランティアサークルぱれっと）

「手軽なボランティア」をモットーに環境系に力を入れて活動をしている公認ボランティアサークル「ぱれっと」が 2008 年から行っている活動です。

キャンパス内に設置された回収ボックスでペットボトルのキャップを集め、回収業者に引き渡します。その後、資源として売却され、売上を「認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて発展途上国の子ども達のワクチンのために寄付しています。

日　時	通年　12：40 ～ 13：10
場　所	和泉キャンパス
回　収	110kg
センターの役割	作業場所等の提供、回収したキャップの保管（和泉）

▲掲示物

▲エコキャップ回収ボックス

法学部 2 年　小島 涼司

キャップ回収を行う中で驚くことは、ペットボトル飲料を買って飲んでいる人の多さです。もともと和泉キャンパスには多くの学生がいるため、ペットボトルの数は多くなると思っていましたが、実際に大量のキャップが回収ボックスに溜まっているのを見ると、多くの人がペットボトル飲料を日々購入していることがよくわかります。回収をしているときに、ペットボトルキャップが一杯まで入っている回収ボックスを発見することがあります。回収ボックスはかなりの量のペットボトルキャップをためておくことができるのですが、そのボックスいっぱいに溜まっていたときには驚きます。

この活動は中野キャンパスでも行われていましたが、中野キャンパスには回収ボックスに溜まったキャップを回収する人がいないため、2022 年 10 月にペットボトル回収ボックスの設置を終了しました。そのため、中野キャンパスにあった回収ボックスを今度から和泉キャンパスで使う計画を立てています。ペットボトルキャップ回収は、リサイクルすることができる上に、海外の子供達にワクチンを寄付することができるという二つの良い効果があります。なので、今年でキャップの回収をやめる中野キャンパスの分までこれからは続けていきたいと考えています。

明大前駅周辺清掃活動（公認ボランティアサークルぱれっと）

環境問題への啓発活動を主な目的としてぱれっとが活動しています。

2022 年度の清掃活動は、和泉キャンパス正門から出て、線路沿いの道路を通り、体育館・和泉キャンパス北門までを基本ルートとし、時には、甲州街道沿いに足を延ばして行いました。ごみ拾いをする際は、感染対策として全員がビニール手袋をし、燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトル、びん・かんとごみ袋の係をその都度振り分け、トングで収拾をします。集めたごみ袋は、それぞれの重さを測り、記録し、処分します。

昼休みに行うこの活動はメンバー同士のコミュニケーションの機会にもなっており、他の公認ボランティアサークルと合同で活動を行うこともあります。

日　時	週 1 回程度 12：40 ～ 13：10
場　所	和泉キャンパス周辺、甲州街道沿い、明大駅前通学路等
回　収	（1 回あたり平均）燃えるごみ 100g、缶 10g、ペットボトル 150g、燃えないごみ 300g
センターの役割	作業場所及び保管場所の提供（和泉）

法学部 2 年　小島 涼司

この活動を行う中で感じたことは、去年と比較したときにキャンパスの周辺に落ちているゴミの量が減ってきているということです。去年は、ペットボトルやカン・ビンなどが多くはありませんが、必ずどこかに落ちていた印象がありましたが、今年はペットボトルやカン・ビンが路上に落ちていることが少なくなりました。他にも、去年は多かったタバコの吸い殻も拾う回数が減ってきています。それ以外にも、燃えるごみをはじめとする多くのごみがここ最近少なくなってきています。これからも、和泉キャンパス周辺に落ちているごみがなくなることを目指し、この活動を続けていきたいと考えています。

数の減少という点では、この活動に参加してくれる人の数も減少傾向にあります。去年は平均で 10 人前後の人が活動に参加してくれていましたが、2022 年度は参加人数が 6 人前後の回が多く、中には 3 人しか集まらなかった回もありました。この活動を続けていくためには、多くの人に参加してもらうことが大切となってくるので、みんなが参加してくれるためには何をしたらいいだろうかと日々考えつつ、改善点を探しています。

この活動は、キャンパスの周辺を清掃しながら、仲間同士の仲を深めることができる素晴らしいものであると考えているので、改善しながらより活動を賑やかなものにしていきたいです。

▲活動中の様子

ビーチクリーン活動(Tree)

日　時	2022 年 8 月 21 日(日) 15：30 ～ 17：30
場　所	江の島東海岸
内　容	江の島周辺の清掃活動
参　加	16 名
センターの役割	相談(駿河台)

商学部 4 年　佐々木 和真

海岸をよく見ると、遠目では見逃していた吸い殻や飲み物の容器がありました。こうした小さなごみを拾い集めていくだけでも、ごみ袋にはたくさんのごみが詰まっていきました。

たとえ意図せず捨てたものであったとしても、捨てる人が多ければ驚異的な量になりうることを感じました。この経験を通して、一人ひとりが環境に及ぼす影響の大きさを身に染みて感じ、今後の生活でごみの管理についてより一層気を付けていきたいと感じました。清掃中は、みんなでコミュニケーションをとりながら和気藹々とした雰囲気で清掃することができました。こうした対外・対内にも意味のある活動を今後も行っていきたいと思います。江の島の海岸美化清掃団体の方にトングやごみ袋の貸し出し、ごみ処理のご協力をいただきました。ありがとうございました。

▲ビーチクリーン清掃活動中の様子

江の島・レクリエーション兼ビーチクリーン活動(公認ボランティアサークル LINKs)

日　時	2022 年 6 月 26 日(日)
場　所	神奈川県藤沢市江の島周辺
内　容	レクリエーションを通した学生同士の交流及び江の島のビーチに落ちているゴミ拾い
参　加	80 名
共　催	公益財団法人かながわ海岸美化財団
回　収	ゴミ袋大 26 袋
センターの役割	相談、備品貸し出し(生田)

農学部 2 年　大谷 凌央

江の島のビーチクリーンはコロナ前には新入生歓迎も兼ねて行われる毎年恒例の活動でした。2022 年はまだ活動制限が続く中でしたが感染に気を付けながら開催をすることが出来ました。活動に当たって清掃道具の手配や共催の方への連絡、清掃活動前に行うレクリエーションの企画など当日参加するだけではできない経験をすることが出来たと思います。活動は班に分かれて行いましたが、清掃範囲が想定以上に広く、どこの場所から手を付けてよいか戸惑うような場面もありました。ですが最終的には班ごとに多くのゴミを集めることができ、学生同士の交流も図ることが出来ました。

2023 年も同様にこの活動を行って参りますが、ただゴミを拾うだけでなく、去年以上にゴミ問題や美しい海に根付く生態系に対して理解を深め、環境問題に対して意識をもって取り組みたいと思います。

▲活動中の様子

西なぎさ　東京里海エイド(公認ボランティアサークル LINKs)

日　時	2022 年 6 月 18 日(土)、7 月 9 日(土)、8 月 20 日(土)、9 月 10 日(土)、10 月 15 日(土)
場　所	東京都江戸川区臨海町
内　容	生態系や環境問題に対して清掃活動を通して理解を深める
参　加	公認サークル LINKs 30 名、その他 150 名
主　催	DEXTE-K
センターの役割	相談(生田)

農学部 2 年　大谷 凌央

生田ボランティアセンターに立ち寄った時、1 枚のチラシを手に取った事がきっかけでこのボランティアに参加をしようと思いました。

この活動は 1 ヶ月に 1 度行われていたので、自分を中心に毎月何人かメンバーを募集して、主催者の方々とコミュニケーションを取りながら主体的に海岸清掃に取り組みました。

葛西海浜公園の西なぎさが東京都でラムサール条約に初めて登録された湿地である事から、主催者や西なぎさの関係者の方々が、環境や生態系を壊さないよう積極的に清掃活動への参加を呼びかけていて、特別な思いや熱量を持って従事されているのだと感じました。

今後もこのような機会を作ってくださっている主催者の方々に感謝しながら活動に参加していきたいと考えています。また、活動から得た様々な経験を元に環境や生態系の保全を意識した清掃を心がけつつ、今まで以上に参加している方々と交流を深め、意見を交換し合い、持続可能な社会貢献に努めたいと思います。

▲回収したゴミときれいになったなぎさ

飯館村「までいな」農業復興支援プロジェクト(公認ボランティアサークル SHIP)

日　時　2022 年 7 月 2 日(土)～ 3 日(日)
2022 年 8 月 20 日(土)～ 21 日(日)
2022 年 9 月 24 日(土)～ 25 日(日)
2022 年 10 月 15 日(土)～ 16 日(日)
2022 年 10 月 29 日(土)～ 31 日(月)
2022 年 12 月 10 日(土)～ 11 日(日)

場　所　福島県飯館村　※ 10 月 29 日～ 31 日は生田キャンパス

内　容
・農業支援(ハウス栽培、経産牛の放牧予定地の放射線測定、米の収穫)
・特産品を使ったベーグル作り
・ロウソク作り
・生明祭での特産品販売

参　加　明大生 30 名、他大生 8 名

センターの役割　相談(生田)

参加者の声

国際日本学部 1 年　S.K

▲シイタケを収穫

今回のボランティアに参加した理由は、東日本大震災後の被災地について何も知らないことに気づいたからです。震災当時は新潟に住んでいて、テレビのニュースで被害の様子や復興について知ることが多かったですが、現在の被災地に行って見たいという思いが強く、決意しました。

ボランティアで特に印象に残ったのは、原子力事故の影響が現在も色濃く残っているということです。農家の方によると、震災前はできていた原木のシイタケの栽培ができなくなってしまったそうです。私たち消費者の中には、事故の被害が強かった地域の農作物を食べることに抵抗がある人も多く、検査で放射性物質などが検出されなくても出荷は難しいとのことでした。

また、農家さんのお手伝いをして、野菜を消費者へ届けることの大変さを実感しました。インゲンやミニトマトの収穫、選別、袋詰め・パック詰めまで行う過程で、どのようにしたら買う人が手に取ってくれるか常に考えられていました。ボランティアの途中でいただいたミニトマトはとても美味しく、さらに多くの人に飯舘村の野菜を手に取ってもらいたいと思いました。

私と同じように、被災地の現在の様子を知らない人は多いのではないかと思います。引き続きボランティアに参加して、情報発信を進めていきたいです。

エネルギー環境ワークショップへの出展

近隣中学校にてエネルギー・環境ワークショップが行われ、明大生が中学生に授業を行いました。

川崎市立枡形中学校は総合学習としてエネルギー・環境教育に取り組み続けて 20 年目になります。毎年 11 月にワークショップが行われ、十数の企業・団体が授業を行っています。2020 年から明治大学の学生も参画しています。全校生徒が 30 人前後に分かれて体験や実習を交えながら学びを深めています。

過年度までは公認ボランティアサークルが担当していましたが、2022 年度は生田キャンパスの学生から広くボランティアを募集しました。参加学生で様々な案を出し合い、検討を重ね、すりおろし人参とオキシドールを混ぜて飛ばす野菜ロケットの発射実験を行うことに決めました。大学の授業や実験実習の合間をぬって、ミーティングや実験の精度を高めるための試作を繰り返しました。

当日は学生 3 名が中学校に赴きました。限られた資源の有効利用や新たな利用価値についての講義と、ニンジンの皮部分と芯部分とで野菜ロケットの飛距離や反応時間に有意差がでるかを生徒自身が確かめる実験を行いました。

日　時　①企画　2022 年 10 月 4 日(火)～ 11 月 17 日(木) 全 12 回
②授業運営　2022 年 11 月 18 日(金) 13：40 ～ 15：10

場　所　①生田ボランティアセンター
②川崎市立枡形中学校

内　容　中学校の総合的な学習の時間「エネルギー環境ワークショップ」にて環境に関する授業を行う。
・限られた資源の有効利用や新たな利用価値についての講義
・すりおろし人参とオキシドールを混ぜて飛ばす野菜ロケットの発射実験
ニンジンの皮部分と芯部分とで野菜ロケットの飛距離や反応時間に有意差がでるかを生徒自身が確かめた

参　加　47 名(① 44 名、② 3 名)

体　験　中学生 18 名

センターの役割　相談・中学校との連絡(生田)

中学生の声

・普段食べないところをただ捨ててしまうのではなく、再利用することが大切。
・視点を変えてみると新たな使い方を見つけられる。
・実験を通じて新たな利用価値の気づきにつながった。
・（環境活動は）他の人のために行うのも大事だと思うけど、自分の利益のために行うことで環境活動を維持できるのではないかと考えました。

農学部 2 年　西村 洋輝

参加者の声

［実験内容決め］

「生徒に環境教室で影響を受けて主体的な SDGs 活動につなげてもらいたい。」という理想と、安全性や簡便さ、1 時間半という条件の中で行わなければいけない現実。案も複数出たが、理想と現実の両方を満たすものはなかなか見つからないまま時間が経ち、一時は空中分解しそうになった。単に科学実験を行うだけでは科学への興味で終わってしまい、かといって SDGs を前面に出すと講習会のような形になってしまう。最終的には派手で面白みのありそうな野菜ロケットの案が採用された。終わって考えるとこれは正解だったと思う。実験やワークは純粋に生徒に楽しんでもらいつつ、まとめの段階で直接言葉で伝えた方が生徒に伝わると思う。その時は学校生活と絡めて話すと身近に感じてもらいやすいと感じた。

［実験内容の細かい設定］

野菜ロケットの実験原型は既にネットにある段階からスタートした。しかし準備できる器具が違うのでそれに合わせて、ロケットの飛距離が長くなるように、誰がいつ実験しても正確に結果が出るよう

に、細かい設定を調整した。野菜の種類、にんじんの部位、すりおろし方、発射装置、試料の重さや体積、発射の仕方、オキシドールをあけてからの時間などなど挙げればきりがないほどに試行錯誤した。結果的に当日は満足できる結果となった。今回の活動の中で一番時間をかけて行った段階だが、「ここを変えたらどうなるかな。」とチームで協力しながら実験したのはとても面白かった。終わって考えるとそこまで実験の正確性はこだわらなくてよかったかもしれないと思った。グループ間での結果の差異を気にする時間もないこともそうだが、大きく予想からずれなければ伝える趣旨に影響しないからだ。

［学校との打ち合わせ・連絡］

学校との打ち合わせが二週間前くらいにあるが当日の流れのイメージがつかめるのでとても重要。そのイメージをもとに綿密な計画をたてた。先生方はとても協力的なので、実験のためと思ったことは遠回しにではなく、直球で発言した。先生方の話し方や行動が社会人として洗練されていたので緊張以上に刺激を受けた。これまで先生と生徒の関係でしか接してこなかったが、私が他団体の代表として対面してみてその凄さを実感した。

［当日に向けての資料準備］

私たちが作ったのは方法説明スライド、ワークシート、まとめスライド、タイムスケジュールの4つ。私たちの場合、方法説明に関しては細かい過程まで書いて、方法をすべて説明してから実験に入った。しかし、情報量が多いと生徒はあまり読まないし、方法を説明してから時間がたつと忘れてしまうので、重要な流れだけを書き、あとは講師が生徒の近くで直に同時に教えた方が効果的だと感じた。そして、これは方法説明とタイムスケジュールなど当日の流れに関して言えることだが、一度行う行動すべてを入念に想定して資料を作っておくと当日焦らない。必要なもの、危険性、効率性、時間、役割分担、手順の視点から多面的に考え、今までの計画では見落としていた穴が浮き彫りにされる。私たちも数多くの変更点、追加事項が浮上した。作った資料自体ではなく、資料作りを通じて想定する過程がとても重要だと感じた。まとめのスライドに関しては、基礎的なSDGsについては学校教育で実施済みだと思うので、時間をかけると生徒が飽きてしまうかもしれない。調べればわかる知識というよりは、大学生ならではの経験に基づいた生きた言葉が必要かと思う。

［当日の流れ］

大方計画通りに行えた。ただ、完璧な計画が練れたと思っても実際に行うと必ずズレも生じるので、手順を変更して臨機応変に対応することが求められた。講師一人一人が今必要なことを把握し、目的を見失わないことが大切だと感じた。

［生徒と接して］

最初のうちは向こうも年の差でかたくなっていたから、積極的に話しかけるように努力した。中高の部活で後輩にアドバイスしてきた経験が活きた気がしてうれしかった。実習が終わって一目散に出ていく生徒もいたけれど、片付けを手伝ってくれた生徒もいて今回の活動のやりがいを感じた。ただ実験の理想、生徒に熱意をもって良い影響を与えようと試みたが、課題を早く終わらせたくてワークシートを書くのに夢中な生徒を見て少し悲しい気持ちになった。うなずいて聞いてくれる生徒もいたので何人かにでも響いたらと思う。

［大学生同士のやり取り］

人数は少なかったが、その分学生一人一人が責任をもって活動に取り組んだし、意見の違いもより良いものをつくるための糧とした。実験内容決めは出会って最初は、それぞれの意見に対してそこまで踏み込めなかったが、勇気をもって批判点を挙げる必要性を感じた。活動を重ねていくうちに自分の意見もどんどん気兼ねなく言える関係になった。最終的にチームで一つの目標を協力して達成し、その喜びを共有できてうれしかった。当日実習が終わって大学にもどるとき、夕日の下でつくづくそう思った。

［活動を通じての成長］

この活動は企画、学校との連絡、準備、実習の一連の流れを大学生の力で行う。チームの一員として活動することもそうだが、条件に縛られている中で企画を練ったり、様々な視点から考慮した現実味のある計画をたてたり、生徒や先生方の前で発表することなど、どこをとっても貴重な経験で人として成長できると思う。何より、活動で関わる人の層が年齢、性別、職種関係なしに、多様な人々と接する機会がもてるという点が魅力的。ボランティアの良いところは、この経験を無料で行えて、なおかつ社会貢献というやりがいも感じられるところだと思う。教職を目指す人だけでなく、私のように経験を目的に取り組みたいという人にも勧められる活動だと思う。

［全体の感想］

この活動に参加して心から良かった。準備段階で困難さを感じつつも、それを乗り越えて実習が成功

したことに達成感を感じて。生徒の何気ない行動にやりがいや喜びを感じて。社会人の方に刺激を受けて。活動全体を通じてその時々で多様な色の感情が味わえた。「何かに取り組むときは全力で」。努力が必要だけれど、その方が楽しいし、成長できる。そう実感した活動だった。

理工学研究科 M1　村上 脩

今回の活動期間中、子どもたちが楽しく学びになるような実験内容を考え、何度も試作と実験を重ねていきました。その結果、実験において生徒に学んでほしいことと楽しんでほしいことの両方が、狙い通りに伝わってくれたことがとても嬉しかったです。

準備段階では、生徒の興味を引く内容だけでなく、彼らの安全面などを考慮しながら準備にあたりました。我々にとってはさほど目新しいものではなくても、生徒たちにとっては全てが新鮮で、それゆえに予測できない行動をとることも考えられます。どんなことが予測されるかを全員で考え、その対策をしっかりと講じることができたことが、今回の成功の要因の一つだったのだろうと思います。

また、将来働く上でも、これだけきめ細やかな注意を払わなければならないという経験ができたという点で、とても有意義な時間でした。

当日、いざ生徒の前に立った時は、自分の専門科目を教えるわけではないことからか、緊張していました。しかし、いざ始まってみると、生徒が夢中になって人参をすりおろしていたり、ロケットが飛んだ瞬間の歓声だったりと、私たちの想像をはるかに超える生徒たちの豊かな反応が見られ、それまでの緊張や不安が嘘だったかのように、その場を楽しめるようになっていました。実験を進める中で、周囲の班と結果が異なったり、うまくロケットが飛ばなかった班もあり、全てが想定通りとはいきませんでした。そういった班の生徒たちへの対応やリカバリーは、想定が甘かった部分でもあり、少し曖昧になっていたと思います。今後はもっと対応力を身につけていきたいと思いました。

このような貴重な機会を与えてくださり、多大なサポートをしてくださった枡形中学校の先生方、そして真剣に実験に取り組んでくれた生徒の皆さんに感謝申し上げます。

理工学研究科 M1　星野 雅貴

僕がこの環境教室ボランティアをやってみて、まず、なかなかうまくいかないと思ったことはボランティアの内容ではなく人員を集めることでした。最初の方はある程度メンバーが集まっていたのですが、次第にミーティングに集まる人数が減っていき最終的には少人数になっていました。ただ来なかった人が全くやる気がなかったというわけではなく、僕自身も反省するところがあります。例えば

・ミーティングの時間設定に関して毎回アンケートを取って多くのメンバーが来やすい時間に設ける。
・ミーティング等になるべく多くのメンバーに来てもらえるように声かけやリマインドを多くする。
・オープンチャットやミーティングの際に全員が会話に参加できるように話を振るなどメンバー間での雰囲気をよくする。

というような点が挙げられました。

このようなことをもっと初期の段階からこまめにやっていれば、多くのメンバーが欠けることなく、楽しくボランティアをやれていたのではないかと思います。

何はともあれ、残ってくれたメンバーでボランティアを進めていって、多少山あり谷ありではあったものの「野菜ロケット」という実験内容までは決まりました。ただこの野菜ロケットという実験に対して話し合うべき課題として浮き彫りになったのが「環境・エネルギー問題に対しての解決策」というワークショップのテーマとの関連性が薄いことでした。最初はこの野菜ロケットはバイオマスエネルギーないしはフードロス問題との関連性が高い実験だと思っていたのですが、細かい部分を詰めていくうちに

・そもそもこの実験内容は環境・エネルギーというテーマに適しているのか？
・この実験を一回の授業きりでなく授業後も子ども達が環境問題・エネルギー問題に参加しようという意識を持てるようにするにはどうしたらいいか？

などの課題が挙がってきました。テーマとの関連性などの問題についてはこじつけのような案も何個か挙がりましたが、子どもへ授業するのにこじつけはまずいということで出た案を少しずつ改良し、その都度問題はないかを確認していったり、実験内容を多少変えていったりすることで最終的には「子どものフードロス及びその他の再利用可能な廃棄物の問題に参加しようとする態度や姿勢を育む」という形で解決しました。この時は実験当日までとにかく時間がなくて焦っていましたが子ども達に授業をするなら少なくともここだけは妥協できないと思い諦めず考え続けていました。

ワークショップを 1 週間前に控えた予備実験では最初の方は不本意な結果しか得られずなかなかに焦っていました。しかし、この授業はある程度の確率で成功しないと子どもたちに伝えたいことの意味

が薄れるという授業でしたので、成功する可能性をあげなければならないという不退転の覚悟で何度も何度も条件を変えて実験を行なっていました。この時にはすでに結構メンバーの思いが一つになっていて楽しかったです。

自分は実験当日にはどうしても外せない用事があって参加できなかったので体験談としてかけるはこのくらいです。拙い文章だったかもしれませんがここまで読んでくださりありがとうございました。

農学部 3 年　太田 采奈

私がこのボランティアに参加した理由は、環境というテーマで中学生と関わることができることに魅力を感じたからです。また、ボランティア活動自体がとても久しぶりだったため、純粋にボランティアしたい！と思ったのもひとつの理由です。

今回のボランティアは、約 2 か月前から実験のテーマと授業の構成を考え、試作実験と打ち合わせを繰り返しながら当日ギリギリまで準備をしました。残念ながら私自身の都合で試作実験やミーティング等にあまり参加できず、終わった今振り返るとそれをとても悔しく感じています。今回行った実験が実験者による小さな誤差ややり方の違いによって結果が大きく変わってしまう恐れがあったのです。試作実験に参加できなかった私は、他のメンバーと比べて実験に慣れておらず、授業全体の構成や進行を考える上でそれが妨げとなることが多くありました。今後ボランティア活動に参加する際は準備段階から積極的に参加したいと思いました。

当日は実験準備約 30 分、実験約 40 分、講義約 20 分という構成で授業を行いました。事前準備段階で不安が残っていた実験に関して、本番はとてもうまくいきました。正直こんなにもうまく実験が進むと思っていなかったので大変驚きましたが、実験がうまく進んだおかげで実験後の講義がとても効果的なものとなり、とても満足しています。中学生も楽しそうに実験に取り組んでいて、その様子を見ているだけでも「ここまで頑張って準備してきてよかったな」と思うことができたと共に私たちも純粋に楽しむことができました。

今回のボランティアを通して、ボランティア活動の楽しさや達成感を改めて感じました。分野や対象に関わらずこれからもボランティア活動に積極的に参加していきたいと強く思いました。

▲講義の様子

▲実験の様子

エコキャップ回収(公認ボランティアサークルぱれっと)

今年で中野キャンパスでのエコキャップ回収は終了となります。

2022 年度の中野キャンパスで回収されたエコキャップは、中野キャンパスの清掃員さんのご協力もあり約 10 袋分になりました。

また最後のエコキャップ回収作業となる今回は、中野キャンパスに設置されていた回収ボックスの撤収作業も併せて行いました。

4 つの回収ボックスは和泉キャンパスの各所に設置され、和泉キャンパスでのキャップ回収に使われることになりました。

日　時	2022 年 10 月 13 日(木)※エコキャップ回収と回収ボックスの撤収(中野キャンパス) 2023 年 1 月 30 日(月)※回収ボックスの運搬 2023 年 4 月 10 日(月)※回収ボックス設置(和泉キャンパス)
参　加	3 名
回　収	110.50kg(55,250 個、ワクチン 55.2 人分)
センターの役割	回収依頼・作業補助(中野)

▲中野キャンパスでのエコキャップ回収の様子

▲回収ボックスは和泉キャンパスに設置され、
キャップ回収に活躍しています

全商品リサイクル活動（公認ボランティアサークル MIFO）

「全商品リサイクル」は、明治大学の学生、教職員、また近隣の住民から不要になった衣類などを回収し、ユニクロやNPO団体を通じ難民キャンプに送る、公認サークルMeiji International Friendship Organization（MIFO）が行っている活動です。また、その活動を通して、学生が主体となって難民・避難民への実質的な支援を行うと同時に、より多くの大学生、教職員等に難民問題を啓発し国際問題への意識を高めることをねらいとしています。

日　時	①2022年6月13日(月)～2022年6月17日(金) 12：00～13：30 ②2022年12月19日(月)～2022年12月23日(金) 12：00～13：30
場　所	和泉キャンパス校舎前
参　加	①25名 ②11名
回　収	①87着 ②142着
センターの役割	作業場所及び保管場所の提供（和泉）

▲回収の様子（6月）

▲回収の様子（12月）

政治経済学部3年　木村 松高

「全商品リサイクル」は、MIFOの国際支援活動や環境保全活動の一環として行なわれる活動です。6月の活動では、2021年度より日数が少なくなったものの、広報誌などを通じて活動を周知でき、そして何より学生や教職員の皆様に活動をご理解いただき、ご賛同いただいた結果、合計87着もの衣類をご提供いただくことができました。皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。また、引き続き、感染症対策を行なうため、参加部員数の制限など、制約の中での活動となりましたが、無事に終えることができ、嬉しい限りであります。今回も、株式会社ファーストリテイリングに協賛いただき、みなさまよりお預かりした衣類のうち、ユニクロ・GUブランドの計14着を、株式会社ファーストリテイリングに寄付しました。それらは衣料支援や素材リサイクルに活用されます。他の73着については、寄付もしくは販売を行なう方針で調整しております。私達の活動を通して、身近な「衣類」から社会課題について考えるきっかけを提供できたら幸いです。今後も「全商品リサイクル」を見かけたら、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

法学部2年　宮本 連

「全商品リサイクル」活動は、MIFOの国際支援活動の一環として行なわれる活動です。12月の活動では、学生や教職員だけではなく、学外の方にも衣類の寄付にご協力いただきました。今回の活動では株式会社ファーストリテイリングに協賛いただき、計142着の衣服のうち、51着のユニクロ・GUブランドの衣類をお預かりすることができました。ユニクロ・GUの服 はファーストリテイリングより素材への再生や燃料、難民寄付衣類などに活用していただきます。その他の服は2023年の春にフリーマーケットで販売する予定です。服を持ってきてくださった方々、サポートしてくださった方々、ご協力ありがとうございました。

Meal for Refugees（公認ボランティアサークル MIFO）

「Meal for Refugees（M4R）」は、認定 NPO 法人難民支援協会（以下 JAR）が、日本で暮らす難民と共に作った料理レシピ本『海を渡った故郷の味～ Flavors Without Borders』から生まれた社会貢献プロジェクトです。

学生食堂の協力のもと、身近な「食」を通じて、より多くの大学生・教職員等に難民問題を身近に感じてもらい、関心・理解を深めてもらうことを目的に実施しています。売り上げの一部は JAR を通して、日本に暮らす難民の方に寄付されます。

2022 年度は 3 年ぶりの再開となり、Meiji International Friendship Organization（MIFO）の未経験のメンバーのみで、時間もない中でスタートした活動でしたが、互いに協力し合い開催にこぎつけました。活動後は多くの達成感を得られ、次回の活動のモチベーションアップにつながったようです。

▲ポスター

日　時　2022 年 12 月 5 日(月)～ 12 月 9 日(金)

場　所　和泉キャンパス和泉の杜(学生食堂)

内　容
- 学食にて難民の故郷の味を再現したメニューを導入する
- 難民問題に関する啓発(学食へのポスターの設置、難民に関する勉強会の開催、図書館にコーナーを設置など)

センターの役割　活動場所や備品等の提供、広報活動の支援、全般にわたる相談(和泉)

販売メニュー	販売期間	価格	販売数
豚肉のガラムマサラ炒め	2022 年 12 月 5 日(月)、7 日(水)、9 日(金)	500 円	206 食
鶏肉と野菜のスパイシー炒め	2022 年 12 月 6 日(火)、8 日(木)	500 円	125 食
寄付金額：6,620 円(一食につき 20 円を寄付)			

▲食堂での呼びかけの様子

▲図書館の難民に関するコーナー

企画学生の声

文学部 2 年　佐藤 麻奈

突然 M4R と聞いても、最初は何の事だろうと思い浮かべる人が多いと思います。しかし、この活動は私たちの身近な食事を通じて難民の方々への理解を深められ、かつ、売上の一部が難民の方の生活支援などにつながるという、ささやかではありますが素敵な活動です。難民問題は沢山の人々や物事が関わった複雑な問題ですが、難しいからと理解しないままいるのではなく、私たちはまず難民について知ろうとする姿勢を持つべきだと思います。その為、この活動を通じて、少しでも多くの学生・教職員の方々に難民について知り、興味関心を抱いてもらえたら幸いです。

また、この活動は MIFO で年 2 回行なっていた大切な活動でしたが、新型コロナウイルスの流行後、活動自体が途切れていました。しかし、この度沢山の方々からご協力を得て、久しぶりに活動を再開することができました。誠にありがとうございました。振り返ってみるともっとこうしていればよかったと思うことも沢山ありますが、この活動を無事に終えることができて一安心しています。今回の活動で、この活動の重要性を再認識しました。来年度以降も引き続きこの活動を続けていけるよう努力してまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

TABLE FOR TWO（公認ボランティアサークルぱれっと）

TABLE FOR TWO（略称：TFT）は、開発途上国の子ども達と先進国の私達が、食事を分かち合い、食の不均衡を解消することを目標とした企画です。食堂の方にご協力頂きながら、自分達で考案したバランスの良いメニューを学生食堂で提供しています。1 食につき 20 円（開発途上国の給食 1 食分）を TABLE FOR TWO International に寄付し、栄養問題の解決に向けての支援をします。世界の食の不均衡や、「食と健康」、世界の食糧事情について考えるきっかけになることを目指して活動しています。

2022 年度は、3 年ぶりに活動を再開させることができましたが、準備に時間を要しました。しかしその中で、この活動についての学び直しや、さらに次に引き継いでいくことの大切さを実感することなど、得たものが多い活動となったことが伺えました。

▲ポスター

日　時　2022 年 12 月 12 日（月）～ 12 月 16 日（金）

場　所　和泉キャンパス和泉の杜（学生食堂）

センターの役割　活動場所や備品等の提供、広報活動の支援、全般にわたる相談（和泉）

メニュー	販売期間	価格	販売数
麻婆豆腐と揚げ餃子	2022 年 12 月 12 日（月）、14 日（水）、16 日（金）	500 円	393 食
オムライスデミグラスソース（サラダ付き）	2022 年 12 月 13 日（火）、15 日（木）	500 円	329 食
寄付金額：14,400 円（一食につき 20 円を寄付）			

▲麻婆豆腐と揚げ餃子

▲オムライスデミグラスソース（サラダ付き）

法学部 2 年　小島 涼司

この Table For Two 企画は、コロナウイルスの影響で 2019 年度を最後に行うことができていなかったため、久しぶりの開催となりました。そのため、計画段階の時点から遅れが出てしまいました。しかしながら、この企画に参加してくれたメンバーの協力のおかげで行うことができました。また、計画している途中で何度か問題が発生しましたが、協力して対処することでなんとか問題を解決することができました。今回のことで学んだのは、計画を立てる際には、計画に余裕を持たせ、何かトラブルが発生したとしても、それに素早く対処できるよう想定をしておくことが大切だということです。今回起きた問題のうちのいくつかについては、行動に移す時期を早めることによって起きなかった可能性があるものも存在します。久しぶりの企画開催で、このような企画に慣れていなかったことが、問題の原因であると考えています。なので、今回の経験をしっかりと残し、後輩たちが同じような企画をやる際に、その資料になればと考えています。そして同時に、みんなで同じ目標に向かって協力することの大切さと大変さなど、チームで取り組むとは何かを学べたと考えています。

社会福祉

献血活動の呼びかけ（公認ボランティアサークル学生赤十字奉仕団・クローバー）

中野キャンパスで 2013 年から毎年実施されていた献血活動。2020 年と 2021 年はコロナ禍のため行えずにいましたが、活動制限レベルが下がった春学期にようやく再開することとなりました。

天候にも恵まれ、午後から申込者が増え始め、2021 年の献血者数は例年とほぼ同数の申込者、および献血者数となりました。職員の申し込みもあり、性別や年齢を問わず献血活動に参加する様子が伺えました。

秋学期は 2 回の献血活動を行いました。2 回目の実施日には近隣企業や住民へも参加を呼びかけましたが、学生の参加のほうが多く、また、前回申込をしたものの実施できなかった学生が再度訪れて参加してくれました。2 回目の方が参加者が増えたことから、定期的な実施が参加への種まきになっていることが伺えました。

日　時	2022 年 5 月 11 日（水）10：30 ～ 11：30　13：10 ～ 17：10 2022 年 10 月 13 日（木）12：40 ～ 17：10 2022 年 11 月 11 日（金）11：00 ～ 13：30　15：00 ～ 17：00
場　所	中野キャンパス 1 階アトリウム
参　加	1 名
献血者	117 名（5 月…39 名、10 月…37 名、11 月…41 名）
センターの役割	広報（中野）

▲久しぶりに開催した献血活動には性別・年齢問わずたくさんの方が参加してくださいました。

情報提供・交流

留学生との交流会(Tree)

日　時	2022 年 6 月 24 日(金) 17：30 ～ 19：30
場　所	リバティタワー内教室
内　容	明治大学の外国人留学生と日本人学生の交流会
参　加	40 名(Tree メンバー 30 名、留学生 10 名)
センターの役割	相談(駿河台)

法学部 4 年　菅 未紗希

明治大学の外国人留学生と Tree の日本人学生でチーム対抗のクイズや絵しりとり、ビンゴ大会を行い、交流を図りました。せっかく日本に留学に来たのにコロナ禍でコミュニケーションが希薄化した状況にある中で、留学生と日本人学生が交流するプラットホームを作りたいという思いからこのイベントを企画しました。Tree の活動としては、前例がない企画だったため、一からの企画で紆余曲折もあり大変苦労しました。また、時間がない中で準備したため、当日進行がグダグダになってしまったのは反省点です。しかし、実際に Oh-o! Meiji を通じて 10 名の外国人留学生に参加していただきました。Tree の学生も約 30 名参加し、大変多くの方がイベントに興味をもってくださり大変嬉しかったです。優勝チームには賞品が用意されており、それぞれのチームが優勝を目指して大いに盛り上がりました。初めて顔を合わせる人も多い中、チームで協力してゲームを行ううちに一体感が生まれ、打ち解けて話すことができました。交流会を通じて留学生や団体間の親睦を深めることができ、大変楽しい時間になりました。

地　域

華を楽しむ会(Tree)

日　時	2022 年 7 月 16 日(土) 13：00 ～ 14：00
場　所	神田猿楽町町会詰所
内　容	神田猿楽町周辺の花壇の花の植え替え・雑草除去
参　加	3 名
主　催	神田猿楽町町会
センターの役割	連絡調整、相談(駿河台)

▲華を楽しむ会の様子

政治経済学部 3 年　那須 総一郎

明治大学近くの花壇に花を植えました。今回植えたのは「サルビア」と「ポーチュラカ」です。町会の方々と協力し、約 1 時間活動しました。「華を楽しむ会」は千代田区神田猿楽町町会の方々の主催で年に 2 回行われているそうです。今回はあいにくの雨が降る中での開催でしたが、活動中に通りがかった人達から感謝の言葉を掛けられることもあり、とても嬉しくなりました。ボランティア活動を通じて沢山の人達とコミュニケーションを取ることが出来ました。また参加したいと思いました。そして、花があるだけで街の印象がとても明るくなると思うので、これからの開花が楽しみです。多くの人達に見ていただき、癒しになればと思います。

北神町子ども夏祭り（Tree）

日　時　2022年7月16日(土) 12：00～17：00
場　所　千代田ファーストウィング
内　容　町会の子ども夏祭りの手伝い
参　加　3名
センターの役割　連絡調整、相談（駿河台）

文学部3年　浅野 有咲

町会のイベントなので外部から来た自分が溶け込めるか少し不安でしたが、町会の方や、他のボランティア団体の方がたくさん話しかけてくれてとても楽しく参加できました。子ども達も人懐っこく積極的にボランティアの私達にモーションをかけてくれたので 会場の一員として自分が地域に貢献を出来ている感覚を味わえて、とても良い経験ができたと思います。北神という街の活気や、地域の方との関わり、このようなイベントがそれらのプラットフォームになっていることなどを感じられて楽しかったです。

▲北神町子ども祭りポスター

神保町子ども夏まつり（Tree）

日　時　2022年8月15日(月) 11：00～18：00
場　所　西神田公園・コスモス館小ホール・ひまわり館
内　容　神保町子ども夏まつり（西神田ファミリー祭り）の運営補助（会場の設営・撤去、受付業務、廃材で作ろう・バンジートランポリンなどの運営スタッフ）
参　加　17名
センターの役割　連絡調整、相談（駿河台）

商学部3年　箱田 成美

神保町子ども夏まつりでは、お祭り日和の晴天に恵まれ、千代田区神保町地区の地域コミュニティーの温かさを感じつつ楽しく活動することができました。また、イベント関係者用Tシャツを支給していただいたため、様々な団体の方とより一体感を持って活動に参加することができました。

▲神保町子ども夏まつりポスター

ふれあい福祉まつり(Tree)

日　時　2022 年 10 月 15 日(土)
場　所　千代田区役所 4 階フロア
内　容　千代田区主催の「ふれあい福祉まつり」に参加し、他大学のボランティアサークル及び千代田区ボランティアセンターの方々と共に、防災バッグ詰め体験の実施をする。
また、学生ネットで実施する「大学生と宿題を進める会」の周知として、訪れていただいた方々にチラシ配りを行う。
参　加　17 名
センターの役割　連絡調整、相談(駿河台)

経営学部 3 年　藥袋 由樹

「ふれあい福祉まつり」に参加して、千代田区に住み働く人々の共に支え合うコミュニティを実感しました。様々な企業や団体の協力のもと、世代や文化、障壁を越えて「人とつながる」充実感を味わうことができました。また、いざという時のために、何を備えておけばよいのか参加者と共に学ぶことができました。また、私達が用意した防災バッグ詰め体験コーナーに参加してくださった方々から「とても楽しかった。」という声をいただいたことがとても嬉しかったです。

キッズハロウィンフェスティバル(Tree)

日　時　2022 年 10 月 29 日(土)
場　所　錦華通り
内　容　・参加者の誘導
・お菓子をもらうコースの見守り
参　加　1 名
センターの役割　連絡調整、相談(駿河台)

政治経済学部　長岡 熙

キッズハロウィンフェスティバルに参加したことにより、地域の人の温かさや活力を感じ取ることができた。キンカストリート商店街の多くのお店がこのイベントに協力されていたため、会場のイベントの種類やお菓子をもらうことのできる場所が非常に豊富であり、参加した子ども達がみんな楽しそうにしていたことが印象的だった。また、神田女学園やお茶の水小学校の生徒による演奏や、DJ のパフォーマンスによって常時賑やかであった。

イベントの途中、参加者から「落とし物をしてしまった」と連絡があり、一緒に探すことがあった。発見した際には、お子さんはとても嬉しそうにしていて、保護者の方からは何度もお礼を言われた。この経験を通して、人助けやボランティアが持つポジティブな影響や意義について再認識することができた。また、ほかのボランティア活動にも参加したいと思った。反省点は、予想以上に参加者が多かったことだ。キッズハロウィンフェスティバルのメインイベントである「お菓子をもらいに商店街を回る」コースは定員以上の人が来てしまい、参加できない子どもも出てしまった。次回はもっと多くの Tree メンバーが参加し、イベントの前日から関わるなどすることで、イベントに参加できない子どもを出さないような体制を作る協力をするべきだと感じた。

神保町ブックフェスティバル(Tree)

日　時 2022 年 10 月 29 日(土)・30 日(日)
場　所 神保町すずらん通り　周辺
内　容 受付・見回り・子供誘導(交通整理)
参　加 29 日　7 名
30 日　3 名
センターの役割 連絡調整、相談(駿河台)

法学部 4 年　吉村 野ばら

コロナ禍により昨年は開催できなかった神保町ブックフェスティバルですが、今年は無事に対面開催が叶いました。普段、土日は閑散としている神保町の街ですが、人と古書で溢れていました。日曜日に Tree から参加したのは 3 人でしたが、それぞれが配置場所につき、私は他の大学（専修・法政大学)の 2 人と交通整理を行ったため、同じ Tree の仲間とは活動は一緒ではなく少し残念に感じました。ですが、他の大学の方々と行うのもとても楽しかったです。普段かよっている駿河台キャンパスの目の前で交通整理を行い、子ども達が、安心してブックフェスに参加できるように努めました。

▲神保町ブックフェスティバルの様子

その他

Tree 総会(Tree)

日　時 2022 年 12 月 21 日(水)
場　所 リバティタワー内教室
内　容 1 年間の活動報告・新旧幹部の挨拶
参　加 学生 17 名　職員 2 名
センターの役割 教室の確保、相談(駿河台)

法学部 4 年　吉村 野ばら

総会では、新旧幹部の挨拶を行いました。新幹部からは来年への意気込みを聞くことができ、来年の Tree が良い団体になっていくのだろうと期待を持ちました。また、ボランティアセンターの職員にもご参加いただきました。現幹部は、この総会を持って新幹部に引き継いで引退となります。去年の総会からあっという間でしたが、貴重な 1 年間でした。

▲スライドを使った活動報告

心のボランティア

法学部 2 年　小倉 光弘

今年で東日本大震災から 12 年が経ちました。当時、都内の小学生だった私は下校の最中でした。激しい揺れの中、友人と歩道の真ん中で身を寄せ合い、経験したこともない現象にただただ怯えていました。その後、余震が続く中、近所の児童館へと避難するよう呼びかけられたのです。なぎ倒された自転車や傾いた電柱の下を、込み上げてくる酔いを抑えつつ、児童館前の広場へと辿り着きました。当時の記憶はこのくらいではありますが、その広場に集まった人々の中から母を発見した時の安堵感、十数回のコールを経て聞こえた父の声を聞いた時の安心感は、はっきりと覚えています。

▲活動中の様子

▲被災地にスイセンを植える活動

やがて時は流れ、大学生となった私は高校時代から入ることを決めていたボランティアサークル（震災を身近に感じたためか福島県の振興・復興活動に重きを置いたサークル）に所属し、活動を始めました。2 年生の夏、私は東日本大震災の被害を受けた現地へ初めて足を運びました。震災から 10 年以上の時を経ているのにも関わらず、そこには広大な荒地の他には何もありませんでした。「何もない」ということが、当時の状況や事の悲惨さを生々しく物語っていました。そして現地の方から実際にお話しいただいたことが、私のボランティアに対する考え方を大きく変えることとなったのです。それまでの私は、ボランティアというものは瓦礫の撤去や街の修繕といったように、形として失われたものを取り戻すことが本意であると考えていました。確かにそれも大切な活動であることには変わりありませんが、外部的な復旧は行政の仕事です。では、私たち個々人にしかできないことは何でしょうか。それは内部的な復旧、言わば被災者たちの心のケアです。「心の修復はボランティアにしかできない」これが現地の方から言われた言葉です。震災で壊れた建物はいずれ再建されます。しかし、震災によって傷ついた心は簡単には治せません。回復したとしても、それは記憶という形で残り続け、消されることは恐らくないでしょう。その傷跡の深さを理解し、何を求められ、また何をするべきなのかを相手の立場になって考え、心から寄り添い続けていきたいです。

作ったキワニスドールは誰かの心の支えとなっているだろうか。被災地へ植えたスイセンはいつか皆を笑顔にできるような花を咲かせてくれるだろうか。自分の知らないところで、知らない誰かに幸せを届けられていたら私は嬉しいです。

▲インタビューに応える筆者

Xmas 限定の特別なボランティア

理工学部 2 年

▲公共交通機関で届ける

2022 年のクリスマスイブは、※サンタクロースの付き添い人として、子どもが待つ家庭にプレゼントを届けるという例年にない体験をしました。

軽い気持ちで参加したのですが、想像以上にたいへんな面と、想定外に楽しい二面がありました。

楽しかったのは、もちろん子どもたちの反応です。実物のサンタの登場に、大興奮してくれました。プレゼントを開けて、「なんで、オレの欲しかったものわかったの？」と目を丸くしている様子がかわいかったです。

複数の子どものいる家庭で、名前を間違いなく言えるか不安だったけど、そんな心配は必要ありませんでした。サンタの登場に大喜びした子どもたちが自ら、「この子は○○っていうんだよ～」と教えてくれるからです。

たいへんだったことは、この活動に初めて参加する 2 人でプレゼントを渡す家庭に行かなくてはいけなかったことです。事前の研修では、当日は過去に参加経験のある人と一緒に行くといわれていたのに、その人が何故か来なくて、初心者 2 人で行くことになりました。不安でしたが度胸でのりきりました。

あと、自分たちは電車とバスを使う必要があったのですが交通費は自腹でした。また、募集要項には書いて無かったのに当日はブーツを用意する必要がありました。ボランティアとはいえ結構出費がかさみました。

楽しかったけど、終わったあとはくたくたに疲れていました。

自分がこの活動に参加することで、経済的に厳しい家庭の子にもクリスマスプレゼントが届くと思うと嬉しいです。

※NPO 法人チャリティーサンタ世田谷・明治大学支部・・・サンタクロースに扮してクリスマスプレゼント届けるチャリティーで、経済的に厳しい家庭の子どもにもクリスマスプレゼントを届けている。

熱意は予想外の展開を生み出せる

国際日本学部２年　小松崎 由実

活動のきっかけは私がエンターテインメント系の職業に就く為には何ができるのか考え、中野ボランティアセンターに立ち寄ったところから始まりました。どのような世界なのか経験したら本当に自分がやりたいかどうかが分かるだろうと思い、※トッピングイーストの代表にメールを送りました。HP の「どんな些細なことでも連絡してください」という言葉に励まされ、「イベントごとの単発ボランティアでも良いので参加させてください」とメールで伝えました。後から聞いた話ですが、2022 年はボランティア・NPO でのインターン共に募集しておらず、代表はメールを送った私の熱意を買ってくださり、例外の参加となりました。

途中参加だからといって容赦はありません。墨田区の方・代表・プロデューサーの皆さんと同じメッセージアプリのグループに入り、空いた時間に膨大な情報量に追いつかなくてはなりません。私は議事録作成を行っていました。日々更新されていく情報を書き換え、他の業務もしている代表が覚えきれなかった情報を拾えるようにならなくてはいけませんでした。もちろん分からないことがあるのは当然なので聞くこともありますし、十分に役割を全うできていないことも多かったです。

叱られることも何回かありました。そもそも感情を出すことが得意ではなく、自分が直接動く現場仕事より頭の中で動く企画・発案の方が向いている私は、やる気があるのか分からないと言われたことがありました。心の中で変わらず「やる気」は燃えていたのですが、周りからは当初の飛び込み参加してしまうような行動力を求められていたのだと思います。それでもそのことに気付けたことは大きな収穫ですし、イベント当日は、私は「本部の人」だという責任感を持ち、誰よりも動き回っていた自信があります。

ここから私が思うのは、情熱は人に伝わるということです。その過程で叱られても構いません。自分の中の熱意を信じて、思い切って身を任せてみるのも一つの選択肢です。必ずしもその情熱が見える必要も、褒められる必要もありません。私は、ただ非常に貴重な経験をしていることを忘れずに、その一秒また一秒と過ぎていく貴重な時間の中で自分が後悔しない行動をとることを大切にしていたように思います。やりたいという気持ちがあれば、必ず誰かが助けてくれますし、自分も良い方向に成長できる気がします。

※NPO 法人　トッピングイースト…東東京で音楽とアートでまちづくりを行う団体。参加型プログラムの墨田区企画の芸術系イベント「すみゆめ踊月夜」や「隅田川道中」などを実施。

ボランティアセンター来室者・活動参加者

	来室者※	うち学生※	活動参加者※※
2013 年度	6,057	5,468	
2014 年度	6,913	6,216	
2015 年度	8,321	7,647	
2016 年度	9,417	8,873	
2017 年度	10,239	9,581	
2018 年度	12,305	11,633	2,601
2019 年度	12,008	11,403	2,347
2020 年度			2,304 ※※※
2021 年度	2,241	1,996	1,824
2022 年度	**3,478**	**2,988**	**2,184**
累計	70,979	65,805	11,260

※対面での数。
※※対面又はオンラインで、センターが主催・コーディネートした企画の活動参加者。2018 年度から集計。
※※※2020 年度は、全てオンラインでの数。

外部事業への協力・取材など

外部委員委嘱

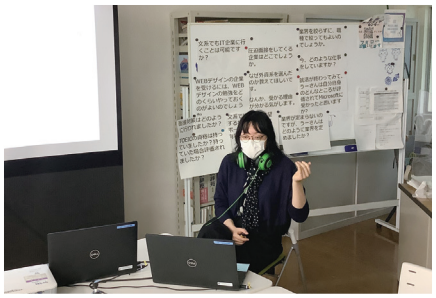
・杉並区社会福祉協議会杉並ボランティアセンター　運営委員
・杉並災害ボランティアネットワーク連絡会　委員

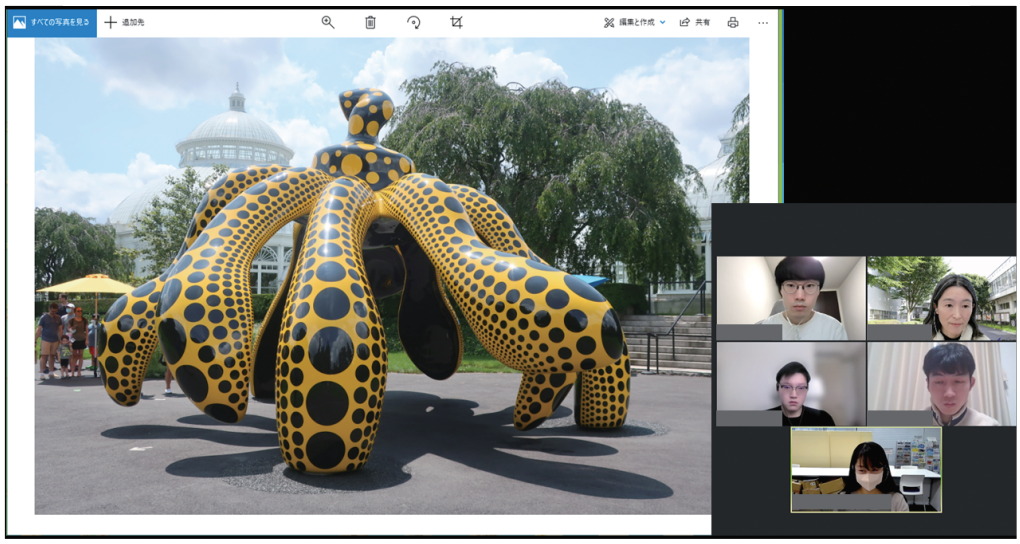
協力

日時	対応先	対応人数等
2022 年 10 月 11 日	社会福祉協議会 70 周年記念インタビュー	明大生 2 名、 コーディネーター 2 名
2022 年 7 月 21 日	杉並区公式情報サイト「すぎなみ学倶楽部」	コーディネーター 3 名

発行物

明治大学ボランティアセンターパンフレット (2022)





2022年度　明治大学ボランティアセンター活動報告書
発　行　日　2023年11月発行
発　　行　明治大学ボランティアセンター